ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅳ－Ⅱ

1977

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅳ－Ⅱ

1977

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
SA27

はじめに

県下におけるほ場整備事業にともなう埋蔵文化財の発掘調査もはや四年目を迎え、莫大な調査の成果が蓄積されつつあり注目されるところである。しかし、反面事業区域の増大は一途をたどり、調査件数、規模の増大は著しいものがあり、工事と平行する調査は困難をきわめること再々と言える。

このような状況をふまえ得られた成果をすみやかに地元に還元する作業もまた重大な責務であろうと考える。

本報告書の作成には、地元教育委員会をはじめ地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得ることが出来た。記して感謝したい。

昭和52年3月末日

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課課長
藤沢守雄

例　　言

1. 本報告は、昭和51年度に実施したほ場整備事業（耕地建設課経費負担）に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を収載したものであり、国庫補助事業対象遺跡については別冊でとりまとめた。

2. 調査にあたっては、地元関係市町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。

また、現地調査は、本県文化財保護課技師丸山竜平、同大橋信弥、同近藤滋、同田中勝弘、守山市教委文化財担当山崎秀二がそれぞれ担当した。

3. 本報告中概要に留めたものについては昭和51年度滋賀県文化財調査年報に収載したので参照されたい。

目　　次

はじめに

例　　言

第 1 章　守山市赤野井遺跡 …… 1

1　位　　置…… 3
2　発掘調査経過…… 3
3　調 査 結 果…… 4
4　ま　と　め…… 6

第 2 章　野洲町五之里遺跡 …… 7

1　はじめに…… 9
2　経　　過…… 9
3　調査の成果…… 9

第 3 章　野洲町下繰子遺跡E・S地区 …… 11

1　はじめに…… 13
2　調 査 経 過…… 13
3　遺　　構…… 17

4 遺　　物〔(1)土器 (2)石器 (3)木製品〕… 28
5 む す び…… 46
第 4 章 秦荘町上蚊野古墳群 …… 75
1 はじめに…… 77
2 位置と環境…… 77
3 遺　　構…… 78
4 遺　　物…… 82
5 ま と め…… 83
第 5 章 高月町井口遺跡 …… 87
1 はじめに…… 89
2 位置と環境…… 89
3 調査の経過と概要…… 91
4 遺　　構…… 93
5 遺　　物…… 102
6 結　　語…… 120

図版目次

守山市赤野井遺跡

1．（1）Z地区西半　SB1・SB2・SB3・SB4

（2）Z地区東半　構2と掘立柱式建物

2．（1）SB25

（2）SB38・SB36

3．（1）出土遺物（緑釉陶器）

（2）出土遺物（ヘラ描き文字）

4．（1）出土遺物（銅銭）

（2）出土遺物（瓦）

野洲町下鈎子遺跡

5．（1）E－7区全景（南より）

（2）E－8区全景（北より）

6．（1）S－5区全景（南より）

（2）S－5区・SH－1 ～SH－3（南より）

7．（1）E－7区・SH－4 他（東より）

（2）E－7区・SH－6 他（南より）

8．（1）S－7区より南をのぞむ

（2）S－1区旧河道内堰状遺構（北より）

9．（1）S－1区全景（南より）

（2）S－1区旧河道及び堰状遺構（北より）

10．（1）S－13区・SD－1（北より）

（2）S－9区・SE－1（北より）

11．（1）出土遺物（土器）e18～e47

12．（1）出土遺物（土器）e51～e85

13．（1）出土遺物（土器）e102～e106

（2）出土遺物（土器）e1～e16

14．（1）出土遺物（土器）e18～e30

（2）出土遺物（土器）e32～e50

15．（1）出土遺物（土器）e52～e62

（2）出土遺物（土器）e63～e75

16．（1）出土遺物（土器）e76～e94

（2）出土遺物（土器）e95～e108

17．（1）出土遺物（木製品）w1～w6

（2）出土遺物（木製品）w11・w12

18．（1）出土遺物（木製品）w8～w22

（2）出土遺物（木製品）w17～w24

19．（1）出土遺物（木製品）w19・w20・w21

（2）出土遺物（木製品）w29～w34

20．（1）出土遺物（木製品）w13～w15

21．（1）出土遺物（木製品）w16　S1・S2・種子

秦荘町上蚊野古墳群

22．（1）3号墳主体部全早

（2）4号墳主体部全景

23．（1）1号墳主体部全景

（2）2号墳乗道部階段及び閉塞（玄室より）

24．（1）5号墳主体部全景

（2）5号墳玄門部階段（玄室より）

25．（1）5号墳丘外土坑遺物出土状況

（2）6号墳玄室内階段

高月町井口遺跡

26．（1）遺跡全景（南部）

（2）遺跡全景（北部）

27．（1）A水路全景

（2）A水路竪穴式住居跡

28.（1）A水路掘立柱建物跡（部分）

（2）A水路掘立柱建物跡（部分）

29.（1）A水路土坑

（2）A水路土坑内遺物出土状態

30.（1）C水路全景

（2）C水路掘立柱建物跡・溝跡等

31.（1）C水路竪穴式住居跡群

（2）C水路4号住居跡

32.（1）C水路3号住居跡

（2）C水路2号住居跡

33.（1）D水路全景（南部）

（2）D水路全景（西部）

34.（1）D水路西部ピット群

（2）D水路南部ピット群

35.（1）D水路溝状遺構

（2）D水路掘立住建物跡

36.（1）E水路全景

（2）E水路掘立柱建物跡柱穴

37.（1）E水路ピット群

（2）C地区eグリッド掘立柱建物跡（北西部分）

38.（1）C地区bグリッド掘立柱建物跡（東西柱列）

（2）C地区jグリッド掘立柱建物跡（東西柱列）

39.（1）A地区dグリッド竪穴式住居跡

（2）A地区dグリッド竪穴式住居跡

40.（1）G地区eグリッド遺物出土状態

（2）A地区fグリッド内灯明辺出土状態

41.（1）I地区cグリッド瓦出土状態

（2）I地区cグリッド瓦出土状態近景

42.（1）I地区cグリッド軒丸瓦出土状態

（2）I地区cグリッド軒丸瓦出土状態

43.（1）A～D水路出土土器

44.（1）A～D水路出土土器

45.（1）各地区出土土器

46.（1）各地区出土土器

（2）軒丸瓦・陶硯・須恵器・甕

47.（1）I地区cグリッド出土縄目タタキ平瓦

48.（1）I地区cグリッド出土籠盤形平瓦

49.（1）I地区cグリッド出土格子目タタキ平瓦

50.（1）I地区cグリッド出土平瓦布目痕

表 目 次

野洲町下鉢子遺跡
1．木製品一覧表…… 40
2．遺物観察表…… 54

挿 図 目 次

守山市赤野井遺跡
1．遺構全図…… 4・5
野洲町五之里遺跡
1．遺構全図…… 10・11
野洲町下鉢子遺跡
1．遺跡分布図…… 15
2．地区設定図…… 16
3．遺跡層位図…… 17
4．遺構全図…… 18・19
5．SH－1平面実測図…… 18
6．SH－2平面実測図…… 18
7．SH－3平面実測図…… 19
8．SH－4平面実測図…… 19
9．SH－5平面実測図・出土遺物実測図…… 20
10．SH－6平面実測図…… 23
11．SE－1平面実測図…… 24
12．旧河道(上)、SD－1(下)平面実測図…… 24・25
13．SK－1平面断面実測図…… 27
14．土器実測図(1)…… 35
15．土器実測図(2)…… 36
16．土器実測図(3)…… 37
17．土器・石器・木製品実測図(4)…… 38
18．楔状木製品出土復元模式図…… 40

19．木製品実測図（w１～w12）…… 50
20．木製品実測図（w13～w18）…… 51
21．木製品実測図（w19～w25）…… 52
22．木製品実測図（w26～w28）…… 53
秦荘町上蚊野古墳群
１．遺跡位置図…… 79
２．４号墳石室実測図…… 80
３．５号墳石室実測図…… 81
４．１号墳出土土器実測図…… 82
５．２号墳出土土器実測図…… 83
６．３号墳出土土器実測図…… 83
７．４号墳出土土器実測図…… 83
８．５号墳出土土器実測図…… 84
９．５号墳出土土器実測図…… 85
10．６号墳出土土器実測図…… 85
高月町井口遺跡
１．主要遺跡分布図…… 90
２．東区グリッド配置及び遺構分布図…… 92
３．A水路遺構実測図…… 96
４．C水路遺構実測図…… 96
５．D水路遺構実測図…… 98
６．E水路遺構実測図…… 100
７．A地区dグリッド竪穴住居跡実測図…… 102
８．A・D・L地区出土遺物実測図…… 104
９．B地区出土遺物実測図…… 105
10．B・C・E・I・J 地区出土遺物実測図…… 108
11．G地区出土遺物実測図…… 111
12．G・H地区出土遺物実測図…… 113
13．F・K地区出土遺物実測図…… 115
14．A水路出土遺物実測図…… 117
15．C・E水路及びA地区dグリッド竪穴式住居跡内出土遺物実測図…… 121
16．D水路出土遺物実測図…… 122

第１章　守山市赤野井遺跡発掘調査報告

1．位　置

赤野井遺跡は守山市赤野井町、十二里町、石田町、杉江町にまたがり、大半は赤野井町地先に存在する。小字名は小柿、狐塚、上筋カヒ、袖屋、シノ田、六反田、林田、須田、三ノ袋、一ノ坪他である。なお、遺跡地は、現在の十二里町、赤野井町の住居地内にも広がることが予想される。

2．発掘調査経過

昭和51年４月に守山市内の遺跡分布調査を実施している際に発見された本遺跡は従来からも地元で耕作時に土器の出土があったと伝えられ、中でも字狐塚や字小柿は、特に前者は武士の墓であるとか、処刑場であるとか伝えられており、あまり手が加えられずに１段高い畑地となっていた。また後者は耕作が深くなると土器が多量に出ると言われ、遺跡の存在が知られていたようである。遺跡の確認後、市教委から県教委に連絡をとり、本年度に圃場整備があることがわかり、県の内部で協議がもたれた。

調査は昭和51年11月２日から開始し、先に幹線排水路を次に支線排水路の予定地で行ない、およそ東西幅２町余を確認した。その後、工事の内容において遺跡地内で削平される部分のあることがわかり協議後、削平部分の調査を実施し、昭和52年１月20日で終了した。

地理的位置

赤野井遺跡の位置は赤野井町、十二里町、杉江町、石田町にまたがる広大な遺跡で、推定８万㎡余に及ぶ。野洲川沖積平野部の中央やや湖寄りの位置にあり、遺跡の西側で大きく段差をもって下降してゆく、丁度接点のような位置にあり、下降する線上に水路が認められる。この水路は地形図上でみると野洲川旧分流である境川から分かれた支流のようである。また、遺跡の東側にも水路があり水路で遺跡の周辺が画されている。即ち、東、西限を水路で区切られた微高地に立地しているのである。東限については東端とするに足る畦畔と小水路が認められた。西限は東限とほぼ同様であり、東西とも、畦畔を越えて外れると地割の方向がずれる。このことも、この遺跡地が水系の中でできあがった微高地を利用したことがわかる。

本遺跡は湖からの直線距離で約１kmで、野洲川沖積地の中央部にあり、比較的安定した土地と考えられる。しかし、居住以前には幅約60m程の流れのあったことがわかった。

歴史的位置

本遺跡は古墳時代前期から平安時代にわたる複合遺跡で、周辺にも多数の遺跡がみられる。本遺跡の北側に弥生時代前期から平安時代まで継続して営まれたと考えられる寺中遺跡、西側に弥生時代前期から中期にかけての赤野井浜遺跡等（服部遺跡も弥生時代前期か

ら）の立地がある。又、更に外に輪を広げると、集落跡が多数みられ、石田、金森西、三宅北、杉江、同東、等、古墳時代から後、平安時代までの遺跡がみとめられる。これらは各時代における生産性の向上から導びき出される分村や新たな居住地として成立するものと思われる。中でも金森西遺跡は小型珠文鏡を出土しており、特殊な性格が考えられる。

3．調査結果

調査はその便宜上、各地点において記号を付した。幹線排水路部分はAとB、支線排水路部分はC及びD、面的に広げた場所はZ地区、N地区、NW地区、W地区とした。そして、それぞれの地点でトレンチの数により1・2・3……と番号を付した。A～Dは手掘り、それ以外はユンボによる表土除去を行なった。調査期間は昭和51年11月から明年1月までを費し、およそ1万3千平米の面積を調査した。

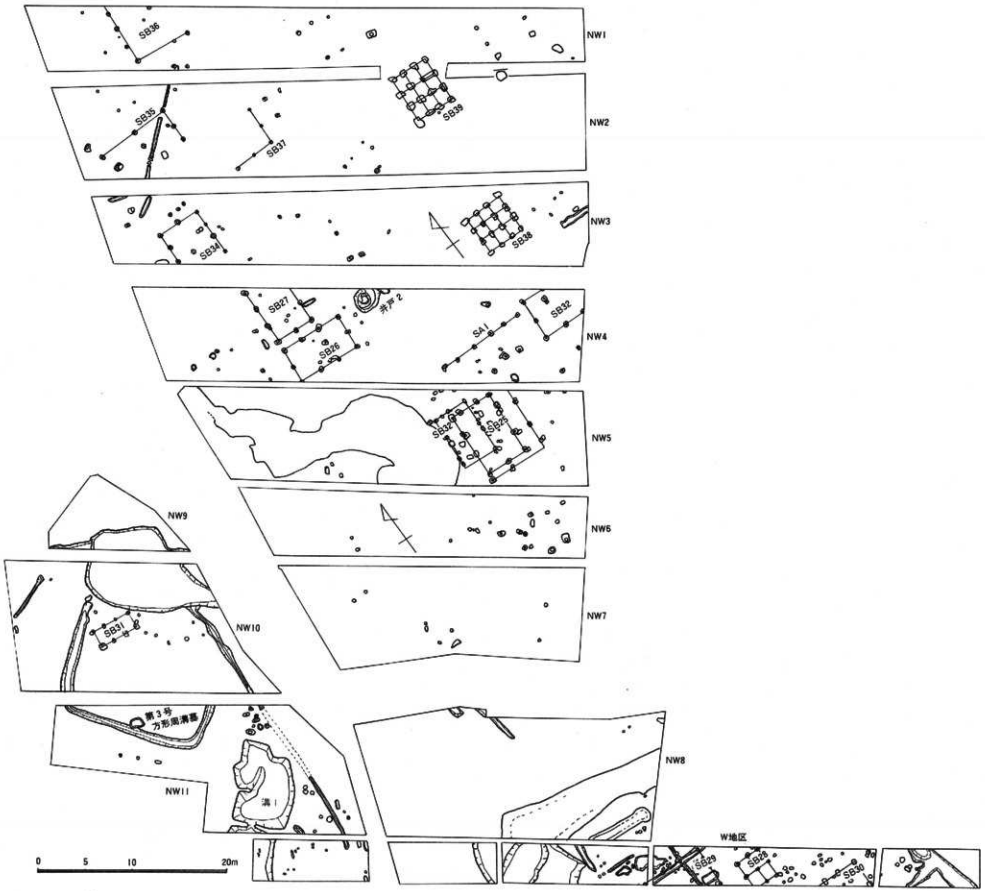
本遺跡の調査において検出された遺構は多種、多数にわたり、またそれに伴って遺物も多く出土した。次に遺構の概要を記し、それぞれについて説明を加える。

方形周溝墓

C地区で1基、D地区で1基、Z地区で2基、NW地区で1基計5基が検出された。Z地区の方形周溝墓を第1号、第2号と呼び、NW地区のそれを第3号、C地区を第4号、D地区を第5号と番号を付した。第1号墓が最大で、一辺（溝外肩）が10米を越え、また溝幅が約1.5米であった。主体部は溝内台状部になく、南辺周溝の外側に庄内式の壺を1点埋めた土壙とその西に長方形土壙がみられた。遺構の残存度がやや悪いため主体部がみられず、削平されてしまったと考えられる。第2号墓は溝幅が約60糎、深さは5～25cmと変化に富み、一辺は約8米余である。第3号墓は一辺10米余、深さ20cm余、幅は40～60cmであったが東辺、北辺が検出されず、コの字形に近い形状であった。第4・5号墓は規模が確かでなく、周溝の一角が認められた程度である。遺物は第1・2号墓で細片がみられた以外は何も出土していない。

溝　跡

W地区、NW地区にわたって溝状（端があり、溜まりになっている）遺構（溝Ⅰ）が検出された。この溝は出土遺物からみて古墳時代前期に属することがわかり、本遺跡で発見された溝状遺構では最も古い時期である。またW地区では古墳時代から奈良時代にかけての落ち込み（溝状に落ち込む溝Ⅱ）がみられた。その他は全て基本的に奈良時代から平安時代に属す溝跡である。最大の溝はZ地区で検出され、B地区に伸びる大溝で幅は10米を越し、深さも1米余であった。この溝は溝Ⅱと呼ぶが、古墳時代から平安時代までの遺物を含む。しかし、古墳時代単独の層はなく、奈良時代の遺物と混って出土するため、溝の開掘は奈良時代前期に求められると思われる。本遺構はその中に古墳時代土師器、須恵器、



第1図　W NW地区遺構分布図

奈良時代須恵器、土師器、平安時代須恵器、土師器、黒色土器、銅銭（隆平永寶）を含んでおり、その量も多い。本遺構の流れの方向は正南北（磁北）であり、目的意識的に掘削されたものと考えられ、この方位は後述する建物跡と共に計画されたと考えるべきであろう。本遺構が埋没するのはおよそ11世紀と思われる。

溝Ⅳは溝Ⅱと直交すると考えられる溝で、A地区で東西方向に検出された。溝幅は約3米で深さは約40糎である。遺物は奈良時代から平安時代に至る須恵器土師器がみられた。その他にも溝状の遺構がみられた（W地区東端、NW地区）が、溝Ⅱや溝Ⅳと同じく、基本的に南北、東西の方位をとる。またN地区では幅約30糎、長さ5～8米の落ち込みや、ふぞろいな長さ、幅の溝状の遺構がみられたが、何の目的の掘削か判断し難い遺構がみられた。しかし、これらの不ぞろいの溝状の落ち込みもやはり東西、南北に基準をもつ。

土　壙

Z地区の第1号方形周溝墓の近辺で3、A地区で2、B地区で1と多数の土壙が検出されている。これらはそれぞれで意味があり、Z地区の土壙は方形周溝墓に付随するものと考えられ、A地区は単独の土壙であるのか、周辺では遺構は検出されなかったが、土壙は浅く中に炭化物がうすく層になっており、特別な意義が与えられよう。B地区の土壙は地鎮祭用の土壙であり、内部に土師器皿が多数埋められており、皿と皿の間あるいは土中に銅銭（長年大寶）が混じており、土器と銅銭を埋めるための穴として掘られたのである。なおZ地区土壙は古墳時代前期、A地区土壙は奈良時代後期、B地区は平安時代である。

建　物　跡

A～Z・NW・N・W地区の全地区におよぶ柱穴群は多数の建物のそれであった。中でもNW地区はととのった単独の建物が並び存在していた。NW地区では三間×三間の倉庫（建てかえがある）が2棟、二間×三間の建物が4棟以上、廂付かと考えられる建物1棟がそれぞれ検出されている。これらの建物は軸を南北、東西にとっており、整然としている。

A地区では東端で二間×二間の倉庫跡1棟、B地区では二間×二間の倉庫、二間×三間の建物が1棟みられた。N地区では1棟、W地区では4棟、Z地区に25棟、総計40棟以上が認められた。Z地区では最低5回以上の建て替えがあると考えられ、柱穴の切り合いと柱穴埋め土の色の差によって分類し得た。建物の建造手代については6世紀後半から7世紀初頭までのⅠ期、7世紀前半のⅡ期、8世紀前半のⅢ期、8世紀後半のⅣ期、9世紀後半～10世紀のⅤ期が考えられ、柱穴の埋土の色差及び柱穴内出土遺物から分類した。

井　戸　跡

2基検出されZ地区、NW地区に存在する。Z地区井戸Ⅰは掘り方径120糎、木枠内径90糎、深さ130 糎である。溝Ⅱの西側肩にあり、井戸内遺物は須恵器杯他土師器若干であった。

時期は奈良時代前半と考えられる。NW地区井戸Ⅱは後世に攪乱されておるようで掘り方や内部が崩れていた。出土遺物からみて奈良時代後半に使用されていたものと思われる。

遺　物

遺物は多量に出土した。そのほとんどは溝内出土である。古墳時代土師器、須恵器、奈良時代土師器、須恵器、平安時代土師器、須恵器、施釉陶器、黒色土器、銅銭、フイゴ、瓦があった。他に「赤見？」「大吉」のヘラ描き文字、「大田？」「内」の墨書土器がある。

古墳時代土師器は庄内式並行期から布留式並行期の時期の壺、甕、高坏で須恵器は6世紀前半後葉から7世紀初頭、白鳳時代須恵器もみられた。ほとんど坏、坏蓋、鉢であった。奈良時代では器種も多く坏類では4～6種に細分、甕も数種に、土師器では暗文手法の有無や口径、胎土によって細分した。銅銭は「隆平永寶」「長年大寶」の2種が確認されたが後者は約30枚がくっついており、表面の銅銭であり、その他は判別できなかった。その他、鉄滓や焙壁が出土しており、近辺に製鉄工房が存在することも推定できる。

4．ま と め

1．赤野井遺跡は大規模な掘立柱式建物跡群を中心とする遺跡である。

2．それらの建物跡は南北、東西を軸にするものである。

3．これらの建物は古墳時代後期後半から、平安時代に至る期間の造営である。

4．この遺跡地に残る水田の畦畔は検出された遺構を踏襲したものである。

5．出土遺物は多様で、ヘラ描き文字、墨書土器があり「大田？」「内」「大吉」「赤見」等がみられた。その他、蓋転用の硯や施釉陶器、また建物から公的な性格が考えられる。

（山崎秀二）

第２章　野洲町五之里遺跡

1．はじめに

野洲郡野洲町五之里の現集落から久野部方向にかけては、五之里古墳を含む埋蔵文化財の包蔵がおぼろげながら推定されていた。特に富波乙から延びる砂地の微高地は畑地となって遺物の散布が知られていた。

このため、今回のほ場整備事業にともない遺構の有無、性格等の究明を試みることになった。

調査は昭和51年８月１日～同年12月末日までを現地にて実施し、整理、報告業務は３月末日までとし、以降必要に応じて補足作業を行なった。

2．経　過

調査は五之里集落の南、第１区の畑地から開始し、南へ一町ごとに第２区、３区と進み、さらに幹線水路を介しながら４区、５区、６区を設定した。この他、五之里古墳区、富波地先であるが五之里集落の東側にあたる畑地を富波Ｉ区として、総計８区を設けることになった。

3．調査の成果

第１区～第３区においては、北北東方向に走る数条の溝が検出され、その年代幅も大きく、早いもので古墳時代前期の土器細片が多数みうけられるもの、伴出遺物が皆無であるが土層から平安時代にまで下ると思われるものなどがあった

第４区は、第５区より南に位置するが早く調査に取り組んだため番号が若い。当区からは、方形周溝墓が五基検出され、うち３基は周溝を共有し、他の二基は独立的様相を呈す。独立の二基は庄内、布留期に該当し、他は少し年代が遡ると思われる。

また、独立する北側の一基は、その南西に多数の土坑群を配し、うち高坏を蓋とした甕棺が一基検出されている。この甕棺の胴部下半に１孔が穿たれていた。なお、この方形周溝墓の西側にはピット群がみうけられ掘立柱の建物が予想された。

その他、平安時代におよぶ溝が多数検出されている。

第５区、６基の方形周溝墓と土坑、ピット群が検出された。完掘した第４号方形周溝墓では１辺　12ｍ×12ｍの内郷と最長　19ｍ×18.5ｍの略方形周溝を設け、周溝の四隅は浅くなり、南々西隅では陸橋部を呈していた。しかも、この陸橋部で１基の土坑墓が検出されている。ただ、墳丘は削平のため全く認められなかったが、溝内には、もと墳丘の盛土と推定される土層の堆積があった。

また、２号周溝と５号周溝の間には多数のピット群が認められ１間×１間の掘立柱建物

が検出された。

第6区、多数の溝と1基の方形周溝墓および土坑墓群が検出された。周溝墓は庄内併行期と推定されれ、溝は古墳時代および以降のものである。

五之里古墳区、墳頂部が村の墓地となっており、削平をうけているとはいえ径34 m、墳高2.5 mを測る古墳である。

周溝の有無、墳丘規模を出すため裾部の調査を行なった。その結果幅3 mの溝が認められ、内より土師質、須恵質の埴輪片、須恵質の甕が検出された。その年代もの五世紀後葉と考えられる。

なお、この五之里古墳の東側で埴輪と須恵器が発見され、もう一基古墳がかってあったのではないかと推定された。

富波I区、五之里集落の東に接して砂質土の堆積した丘が認められていた。この畑地より中世の土器類が観察されたため調査を行なった。

その結果、現水田面に近い位置から古墳時代初頭の竪穴住居跡6棟、掘立柱高床倉庫数棟および土坑が検出され、平安時代の溝なども発見された。

（丸山竜平）

T4区
T5区
SX－1
SX－2
SX－3
SX－5
SX－1
SX－2
五之里古墳
T3区
T2区
T1区
T6－1TE
T6区
SX－1
0
100
200m

第1図　遺構全図

第３章　野洲町下繰子遺跡E・S地区

1．はじめに

野洲町下緑子遺跡E・S地区は、昭和50年度に、排水路部分200m（幅8m）が試掘され古墳時代前期の住居址群が検出されたため、設計変更等につき協議がなされた。しかし、地区境界に当っていることもあって、全面的な変更は不可能となった。このため、削平を最小限にとどめるため、計画高を土盛りによって上げることとなったが、排水路部分およびほ場の一部で削平されるおそれが生じたため、本年度事業として、完全調査を実施することとなった。（注1）（大橋信弥）

（注1） 古川与志継「野洲町下緑子遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ－Ⅱ所収 滋賀県教育委員会、1976）

2．調査経過

本調査は、ほ場整備事業に伴う水路設置のための事前調査であり、従って調査範囲も幅4m、長さ200mの北西から南東へ長く伸びる部分を主に、その北東のわずかな地を付加した極めて限定されたものである。ここでは前者をS地区、後者をE地区と称して調査の経過を概括しておこう。

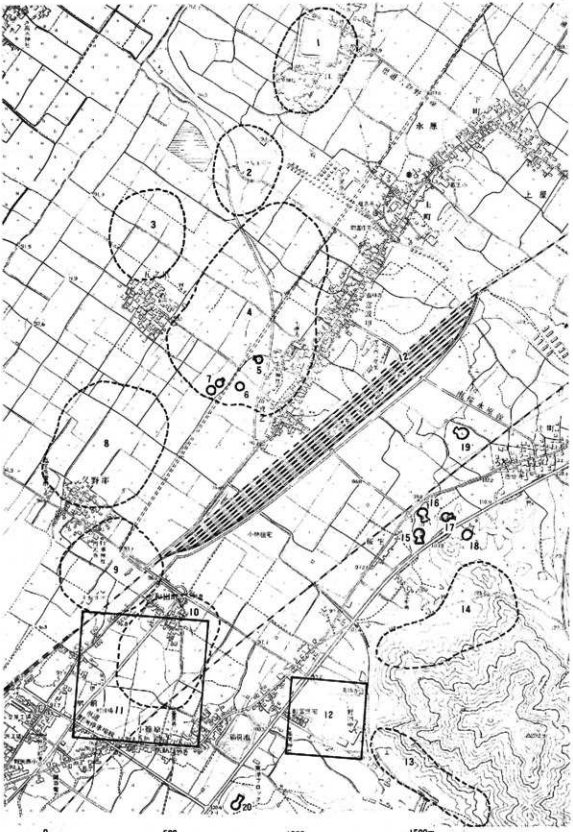
調査は、1976年11月9日に開始し、同年12月27日に至って終了したが、開始とともに、まず、S・E両地区の割り付けを行なった。S地区は、北西より10mごとの区画を設けて、それぞれ S－1区、S－2区、S－3区…… S－20区とした。E地区は、S地区の区設定に準じ、E－7区、E－8区、E－9区と称することにした。なお、調査にあたっては、方位の複雑なことからくる混乱を避けるため、S地区の長軸を調査上の南・北に比定し、短軸を東・西とした。E地区の方位もそれに準じた。以下本報告に称する断面図の方位のみ、調査上のそれを使用した。

調査は、排水の関係上、当初E地区より始めた。E地区は、攪乱土層、耕土層（灰黒色粘質土）、床土層（暗灰褐色弱粘質土層）、さらに一部の箇所では遺物包含層（黒灰色粘質土層）を順次剥ぎ取り、遺構が露見するに至った。E地区完了の後、S地区に移り、E地区との関連を示すS－7区、S－8区、S－9区の各区より始めて、次第に両翼へ拡げていった。ただS地区は1975年度の調査で既に遺構確認がなされており、今回はその後堆積した土を除去し、遺構の再確認とその掘開が主たる目的である。それらの結果、S－6区～S－9区とE地区近辺が、かって微高地を形成していたことが明らかとなった。もっとも、そのことが一方では後世の削平を露骨に受ける悪しき結果を招き、それらの区における遺構の遺存度は他に比して相対的に浅く、良好とは言い難い。しかも、そのことと関連してこれらの微高地では、灰白色弱粘質土からなる後世の鋤跡が、ほぼ等間隔をなして東

西に走っており、それが遺構の確認をさらに困難なものにしていた。従って、これらの各区では鋤跡を掘開の後、遺構検出を行なった。

なお、前年の確認調査以降、何等かの用途をもって、当該域に機械力が投入されており、S－9区、S－12区、S－13区、S－14区のそれぞれ一部、及びS－15区～S－20区に至るすべてが攪乱を受けており、調査が事実上不可能であったことを付記しておく。

（谷口　徹）



1．江部遺跡　2．富波北遺跡　3．下繰子遺跡　4．富波遺跡　5．亀塚古墳
6．古富波山古墳　7．富波古墳群　8．五之里遺跡　9．久野部遺跡　10．和田遺跡
11．野洲郡衙推定地　12．福林寺跡　13．天王山南古墳群　14．大岩山古墳群　15．茶臼山古墳
16．甲山古墳　17．丸山古墳　18．天王山古墳　19．大塚山古墳　20．越前塙古墳

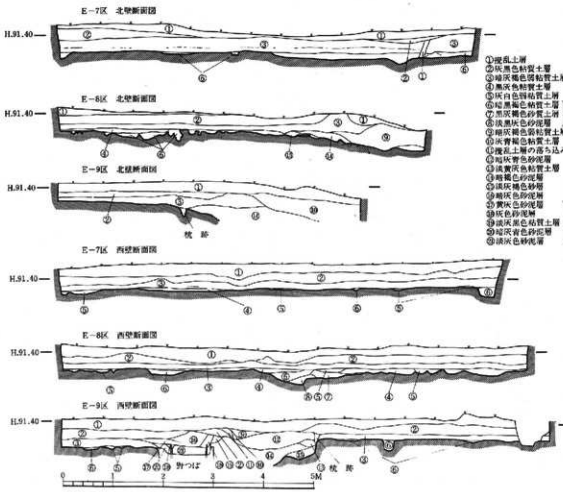
第1図　周辺遺跡分布図

第２図　地区設定図

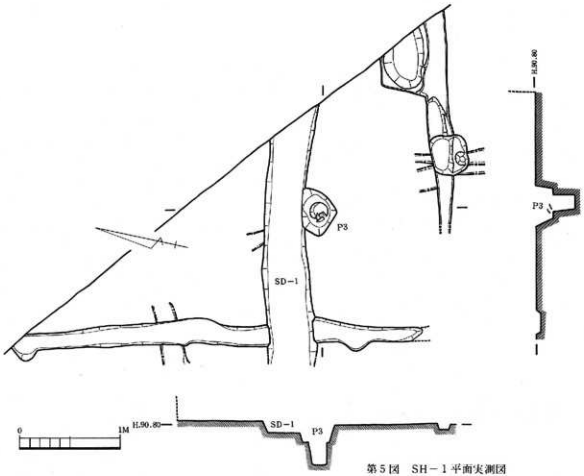
3．遺　構

今回の調査により検出された遺構は、住居址状遺構６例（ＳＨ－１～ＳＨ－６）、井戸状遺構１例（ＳＥ－１）、旧河道とそれに伴う堰状遺構１例、幾例かの溝及び土坑、そしておびただしい数にのぼるピットである。各遺構の時期は、奈良時代以降に掘開された条里溝１例を除けば、すべて弥生時代後期後半から古墳時代前期のやや幅を保つ期間内に位置付けられる。

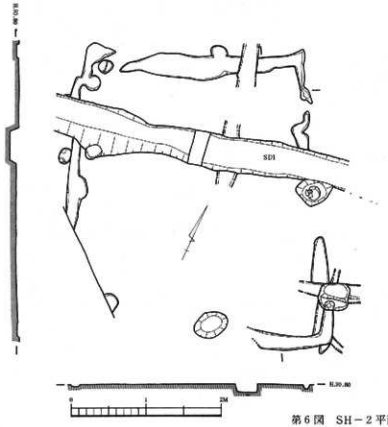
以上の各遺構が掘開された地山は、単一ではない。Ｓ－６区からＳ－８区とＥ地区の微高地周辺の地山が黄灰褐色粘質土の沖積層からなるのに対し、次第に比高を減ずる両翼では青灰色の粘土ないし砂からなる酸欠沖積層へと漸欠変化する。しかも、両者の間わずか数メートルは、灰黒色砂層が地山を形成していた。これに類する例が、野洲町内の他の遺跡にもあり、そこでは、その直下に暗茶灰色の砂礫沖積層が存在したことが知られる。



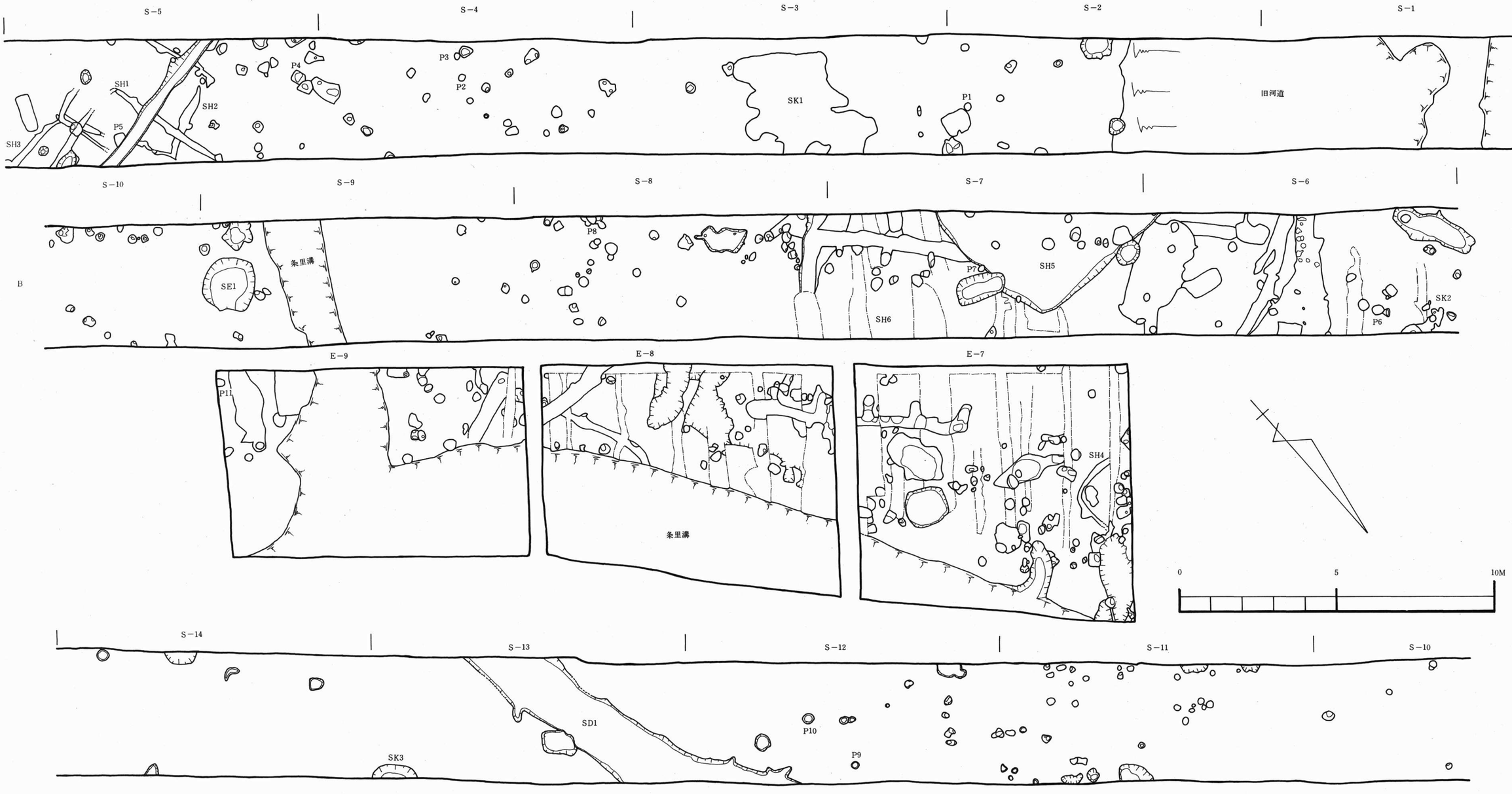
第３図　遺跡層位図



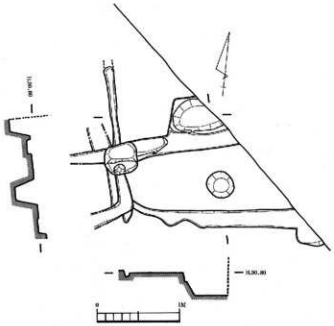
第5図　SH－1平面実測図



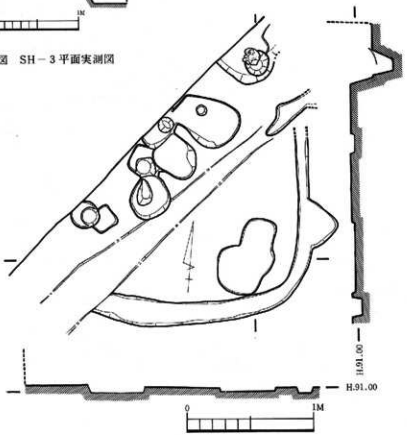
第6図　SH－2平面実測図


S−5
S−4
S−3
S−2
S−1
SH1
SH2
SH3
P5
P4
P3
P2
SK1
P1
旧河道
S−10
S−9
S−8
S−7
S−6
B
A
SE1
条里溝
P8
P7
SH5
SH6
SK2
P6
E−9
E−8
E−7
P11
条里溝
SH4
0
5
10M
S−14
S−13
S−12
S−11
S−10
SD1
SK3
P10
P9

第4図　遺構全図



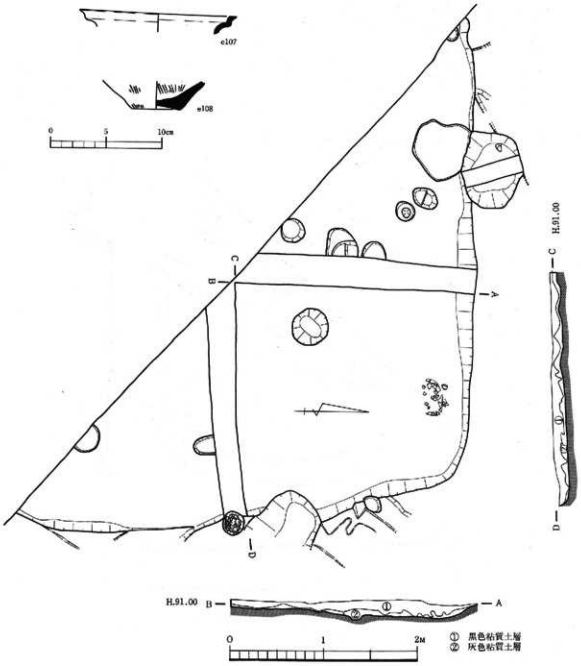
第7図　SH－3 平面実測図



第8図　SH－4 平面実測図

（1）住居址状遺構

弥生時代における竪穴住居址の平面プランは、「方形と円形を両極にして、その間にいくつかの中間形態」を派生させていた。しかし、弥生時代も後期に至ると、若干の地域的偏差を伴いつつも(注1)、ほぼ汎日本的に方形ないし長方形プランへの画一化傾向が指摘され、それは基本的に古墳時代へと踏襲されていく。このことは、単に平面プラン上の画一



第９図　SH－５平面実測図・出土遺物実測図

化傾向というに留まらず、家屋構造の画一を意味し、そのことと関連して、画一がもたらされるに至る政治的諸関係をも想起し得よう。

当遺跡の今回の調査で確認された住居址状遺構は、先に述べたように6例存在し、それらのすべてが方形プランを呈していた。しかも、それらが例外なく沖積微高地上に構築されていることは、この期に一般的な立地状況を彷彿させて興味深いが、そのことが一方では、後世の削平を思うままとし、SH－5のわずか1例を除いては、壁溝の検出をみたに過ぎなかった。ただ、これらの壁溝には、径10cm前後の凹部を点列する箇所があり、切上げ柱様の小穴である可能性を残している。

SH－1～SH－3（第5図～第7図）

S－5区では、SH－1～SH－3の3例の住居址状遺構が切り合い関係をなして検出された。それは、SH－3を最古としSH－1を最新としているが、さらに3者は東西に走る小溝によって切られていた。ほぼ全形が露見したSH－2は、約3.0×3.8mを計る。SH－1、SH－2、SH－3の方位は、おのおの約N－20°－W、N－25°－W、N－5°－Wとわずかながら軸を異にしている。主柱穴を想定しうるものは検出されず、削平のため消失する程度の浅いものであったかとも思われる。壁溝内からは、時代を決しうる良好な資料に恵まれなかったが、近くを東西に走る小溝に切られたP－5からは、古式土師に属する鉢（E－86）が出土している。

SH－4（第8図）

E－7区からは、SH－4が検出された。壁溝の一端は攪乱により、他端は落ち込みによりそれぞれ消失しており、全形のわずか4分の1を確認したに留まった。それからの推測にすぎないが、方位を約N－5°－Wに保ち、やや丸みを帯びた方形の住居址と考えられる。これも主柱穴と思われるものの確認は困難を極めたが、東隅に配する不正方形の浅いピットがわずかにそれである可能性を残している。なお、北へ向かう壁溝の延長部――落ち込みの肩部から丸底の土師器が検出されたが、磨耗が激しく、測定するまでには至らなかった。

SH－5（第9図）

S－7区では、唯一の覆土を保つ住居址状遺構が検出された。方位は、SH－3、SH－4とほぼ同じくN－5°－Wを示し、やはりやや丸みを帯びた方形をなす。調査区域が限られているため、全容を明らかにできなかったが、現存長4.0×4.9mを計り、さらに伸びるものと思われる。他の住居址状遺構に比して大形である点が注目され、仮にこれを住居址と想定すれば、やや唐突ながら弥生時代中期末以降に顕在化する大形住居址の系譜を引く可能性を残している。

覆土は灰色粘質土層と黒色粘質土層の2層からなり、両層からは若干の土器片・炭化物

が検出された。灰色粘質土層下部からは、あたかも床面にはり付くように古式土師に属するいわゆる受口状口縁の甕（Ｅ－107）が出土しており、この住居址状遺構の年代決定に有力な証左を与えることとなった。もっとも、覆土の堆積に凹凸が激しく、又、床面に踏み固められた箇所が皆無である点など、この遺構を住居址と断定するには一抹の疑問を残している。やはり、ここでも柱穴は明瞭ではなく、想定しうる幾つかのピットも浅いものでしかない。なお、次に示すＳＨ－６は、この住居址状遺構の東側で切られており、又、そのすぐ北方では、逆にこの住居址をわずかに切って掘開されたＰ－７が露見し、一個体の甕（Ｅ－108）が押しつぶされた様相で内存していた。

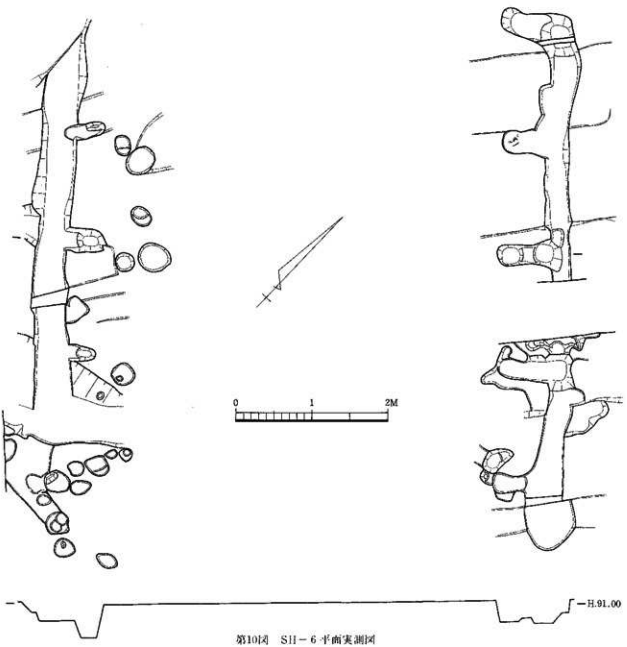
ＳＨ－６（第10図）

Ｓ－７、Ｓ－８区及びＥ－７、Ｅ－８区にまたがってＳＨ－６が検出された。ＳＨ－６は従来の住居址状遺構とは若干、趣を異にしている。壁溝は南北に走る二条が確認されたにとどまり、東西のそれは現状では存在しない。しかも、南北の各壁溝から内にむかって1.3m内外の箇所に、おのおの対応するように５ピットが並存し、それらは溝によって各壁溝とつながっている。壁溝及びピットの配置から考えて、一辺７ｍ前後、10主柱からなる方形プランを呈する住居址状遺構と考えるのが妥当であろう。この遺構内からは、規則性を考慮し難いわずかのピットが確認されたにとどまり、その他の住居址関連遺構の検出はなかった。なお、この住居址状遺構は、先のＳＨ－５によって切られており、又、並存する幾つかのピット内から高杯（Ｅ－103）や器台（Ｅ－104）が出土するなど、その利用に供された時期をほぼ定かにしている。

こうした通有のものとは異なるプランを保つ住居址状遺構の類例が、東京都志村遺跡を始め、埼玉県一ッ木遺跡、群馬県女塚遺跡など関東地方で幾例か知られる。それらに関しては、各主柱穴と壁溝につながる各溝のあり方から、「壁体で区切られた小房[注2]が並んでいた」可能性が指適され、その機能用途として「寝所の設置が、住居構築以前に世帯員に応じて割り出されていた」計画性を示すものと推察されている。もっとも、こうした機能用途にもとづく計画性が顕著となる住居址の類例は、関東における土師器編年上、鬼高期から真間期の段階に比定されており、今回のそれとは時期的にも大きなへだたりがある点で留意すべきであろう。詳細な検討は、今後に譲りたい。

（２）井戸状遺構（第12図）

Ｓ－９区南端近くから、幅約２ｍ、深さ0.8m余の井戸状遺構（ＳＥ－１）が検出された。平面は円形をなし、断面は上方に向かって開くＵ字状を呈している。覆土は、基本的に３層からなる。それは、下層より黒褐色粘土層、暗黒色粘質土層、黒色粘質土層を示し、上層の黒色粘質土層に最も遺物が多く、一部暗黒色粘質土層上部におよんでいる。なお、掘り込まれた地山が、青灰色の砂層からなるため、東方を始めとする肩の一部にくず

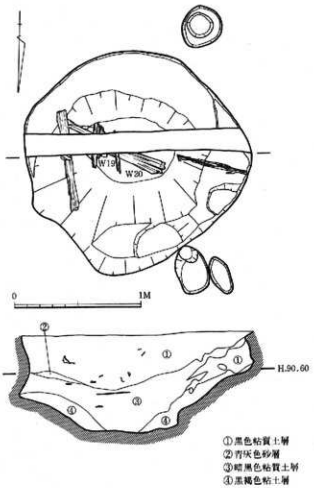


第10図　SH－6 平面実測図

れ落ちた形跡がみられ、明瞭な層序を呈しているとは言い難い。遺物は、自然木・木製品及び土器（E－91～E－92）からなり、木製品の内には井戸枠状のもの3点を含む。しかし、それらはいずれも流入的様相を示しているところから、当遺構に直接利用されたものであるのかどうかについては一考を要する。当遺構が掘開された箇所は微高地端部に位置しており、現在でも放置すれば地下水が噴出してまたたく間に約3分の2が水没する。

（3）旧河道（第11図上）

S－2区の一部からS－1区北西隅に至る箇所では、青灰色粘土の地山に暗黒色泥土からなる広範な落ち込みが露見した。掘開の結果、旧河道とそれに伴うテラス様の溜りであることが明らかとなった。

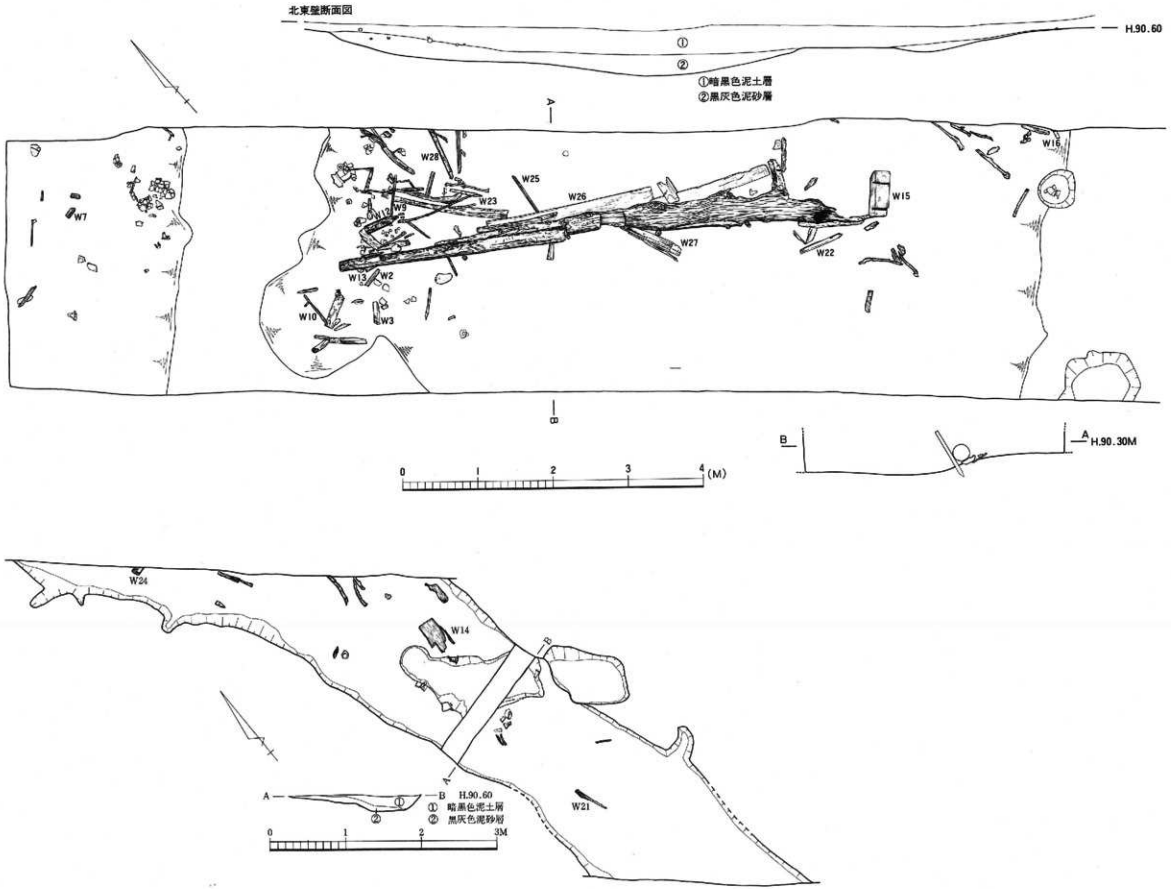


第11図　SE－1 平面実測図

旧河道は、幅約9.5mを計る広く浅い河道で、北東から南西に走っている。断面は皿状を呈し、側辺部にむかってゆるやかに立ち上がる。側辺部に杭列・矢板列等の人為的な整備の跡は確認されないが、両側辺部を渡すように堰状遺構が存在した。堰状遺構は、幅30cm余りの切り込みを設けた自然木と、同じく 15 cmの切り込みを入れ表面を手斧様工具で加工した木製品からなる。両者は、ともに二次的な利用として供されたものと考えられ、後者に関しては、本来、主柱であった可能性が高い。両者の接する中央では、自然木の端部上へ主柱状木製品が約１mにわたって重ねるように配置されていた。この堰状遺構の南西は、その北東に比して10～20cm余深く、堰状遺構に接しては、水圧に抗するように棒杭が1.5m余の等間隔で打ち込まれて堰状遺構を補強している。堰状遺構の北西は、堰状遺構をかわした水流によって青灰色粘土の地山が弧状にえぐられていた。

旧河道にその後堆積した土層は、基本的には２層の比較的単純な層序を示し、下層は黒灰色泥砂、上層は暗黒色泥土からなる。下層の黒灰色泥砂層は、さらに厳密な観察を加えると、灰褐色微砂とヨシ等の植物繊維がおのおの薄く数条にわたって断続的に介入しているのが知られる。植物繊維内では、比較的良好な遺存状況を示す種子も併存していた。こうした両細層は、とりわけ両側辺部で顕著となり、多量の自然木・木製品及び土器は、その内の灰褐色微砂に伴って検出される場合が多く、土器はあたかもしきつめた様相を呈していた。おそらく、灰褐色微砂とともに流入したのであろう。

さて、こうした両細層を内蔵する黒灰色泥砂層は、堰状遺構を境にして、その北東では15～25cmと厚く、南西はわずか数センチを計るに過ぎない。しかも、北東では、板材を始



第12図　旧河道(上)・SD－1(下)平面実測図

めとする幾つかの木製品が堰状遺構にもぐり込むように検出されており、その間隙を埋めるようにおびただしい量のモモの種子が露見している。北東の以上のようなあり方は、水流に伴って流下した泥砂が、堰状遺構を前にして勢いを弱められ堆積したかのようであり、それは、先に述べた堰状遺構に伴う棒杭の位置とともに、旧河道が北東から南西に流れていたことを物語る有力な証左となり得よう。

しかし、現在の下縄子遺跡周辺の地形は、ほぼ北東から南西に向けて比高を増しており、露見した旧河道の流れからすれば、全く相入れない矛盾を呈することになる。従って、相矛盾する両者がともに正しいとすれば、その解決は、時間の推移にゆだねるか、ないしは徹視的な調査故の誤謬とするしかないだろう。つまり、旧河道が流れていた当時は、北東のやや高い地形を保っていたが、南西を流れる野洲川の長期にわたる強靱な沖積作用も加わって、現在では相対的に北東が比高を減じる結果をもたらしたということである。ないしは、調査を行なった極めて限定された範囲に関する限り、確かに旧河道は北東から南西へ流れているが、それは蛇行する一末梢部をみたに過ぎず、巨視的には現地形に矛盾することなく南西から北東に流れていたとする立場である。しかし、両推定とも余りにも恣意的であり、これ以上の軽卒な考察は避けて今後の精査を待つことにしたい。なお、こうした旧河道の流れと堰状遺構を関連づければ、堰状遺構のやや上流には灌漑用に取水口の開いている可能性が考えられ、それに伴う水田域の存在を彷彿されて興味深い。

旧河道上層の暗黒色泥土は、下層の黒灰色泥砂層による堆積の結果、既に湿地と化していた段階で形成された土層である。やはり、ヨシ等の植物繊維を多量に含んだ有機質泥土からなり、時に鞘翅類に属する昆虫の遺体も検出された。若干の遺物もこの層内下部から検出されているが、土器からみて下層のそれとの間に時期的な差を認め難いところから、純然たる堆積によるものというよりは、むしろ流入の遅滞ないしは二次的な移動によるものと考えることができよう。

以上の旧河道に接する北西部には、深さ約20cmからなる平坦なテラス様の溜りが存在する。その規模、形状に関しては調査範囲が限定されているため不明である。堆積した土層は旧河道同様の２層からなる。ただ、下層の黒灰色泥砂層は、わずか数センチを計るに過ぎない。ここでも、多量の自然木、木製品及び土器が同層内に散在していた。

（４）溝

ＳＤ－１（等11図下）

Ｓ－13区からＳ－14区にかけて、幅約1.5ｍ、深さ0.2ｍ余りの南北に走る溝である。堆積土は、旧河道同様下層の黒灰色泥砂と上層の暗黒色泥土の２層からなる。各層内のさらに詳細なあり方も極めて類似しており、各種の遺物は黒灰色泥砂層を主に一部暗黒色泥土層にもおよんでいる。やはり、流入によると考えるのが妥当であろう。この溝が、いわゆ

る環溝ないしはそれに類する機能用途を持つものとして掘開されたかどうかについては、現状では判断し難い。

条里溝

野洲町周辺の条里制地割はその地所の大多数が旧来より水田として利用に供されてきたこともあり、その面影を比較的良く残している。従って条里復元の操作も試みられており、既にグローバルな位置付けがなされている。それによれば、当地は８条６里のほぼ中央に位置していることになり、西には五之里の地名(注3)を残す集落もうかがえる。今回の調査では、Ｓ－９・Ｅ－７・Ｅ－８及びＥ－９の各区より、それに関連する坪界の溝が検出された。それは、Ｎ－９区で交差するが、直交する訳ではなく、おのおのＮ－33°－Ｅ、Ｅ－58°－Ｓ、Ｅ－10°－Ｓを計る。野洲町周辺の条里制地割が、おおむね条線Ｅ－33°－Ｓ、里線Ｎ－33°－Ｅであることからすれば、Ｅ－58°－Ｓ、Ｅ－10°－Ｓの方位を保つ各溝は通有のそれに比してやや変則的である。断面は一部に近代の野ツボ跡に切られて不明瞭なものもあるが、概括すれば、溝掘開以降さしたる移動もなく現代に至るまで連々と溝として供されてきたことを物語っている。この溝の比較的底部に近い箇所からは、奈良時代に比定される須恵器（Ｅ－105）が露見しており、当該域の条里施行が奈良時代にまでさかのぼりうる可能性が推察された。なお、当遺跡のＮ地区（Ｎ－２区）からもＮ－42°－Ｅを計る同様の溝が検出されており、平行する先述の溝との距離を109ｍに保つ点で留意されよう。

その他、今回の調査区内からは幾つかの小溝が検出されている。それらは、やや偏差を保ちながら、北東から南西に走るものが多いようである。遺物がわずかであるため、その掘開期を明確にするには至らないが、切り込む地層やその埋土（黒色粘質土）などからも考慮して、おおむね弥生時代後期後半から古墳時代前期のやや幅をもった期間内に位置付けるのが妥当であろう。それは、次に述べる各土坑やピットについても同様である。

（５）土　坑

ＳＫ－１

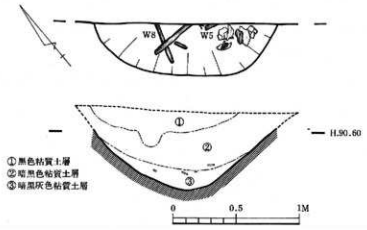
Ｓ－３区から検出された、不定形に浅く広がる土坑である。土坑というよりは、むしろ自然の浅い落ち込みと考えるのが妥当であるかもしれない。南端近くで、甕（Ｅ－84）、高杯（Ｅ－85）が検出された。

ＳＫ－２

Ｓ－６区北端で露見した溝かと思われる不定形の浅いものである。黒色粘質土の単一層からなり、手焙り形土器（Ｅ－87）を始め、高杯（Ｅ－88）、器台（Ｅ－89）、甕底部（Ｅ－90）等が検出された。

ＳＫ－３（第13図）

Ｓ－13区のＳＤ－１よりさらに南で、半分を調査対象区外として検出された径約1.5cm



第13図　SK－1 平面断面実測図

の円形土坑である。上面を機械によって破壊されているが、壁面から復元して深さ約 0.6 mを計るスリバチ状を呈す。覆土は、上層より黒色粘質土、暗黒色粘質土、暗黒灰色粘質土の微妙な色差を保ち、各種遺物は、それらの内の暗黒色粘質土と暗黒灰色粘質土から検出された。各種遺物とも肩口から落ち込んだ様相を示しており、流入ないしは投棄によると考えるのが妥当であろう。

その他、幾つかの土坑が確認されているが、おしなべて浅く黒色粘質土を覆土とするものであり、遺物も皆無に近い。ただ微高地上には、それらとはやや異なる色調を保つ落ち込みが数例存在した。それは茶褐色粘質土を基調とするが、地山との間に明瞭な一線でもって画することが困難であり、遺物は全く含まない。現状でみる限り、人為性を考慮し難い。

（6）ピット

ここでピットと称したものは、径20～30cmを主体とする柱穴状の落ち込みである。やはり、微高地近辺で数例を増すが、調査区全域で確認されている。その総数は、おびただしいものであるが、柱根を遺存したものに限っても6例を数える。

平地式住居については、今日その例は縄文時代にさかのぼりうるが、弥生時代以降生産活動の主要な舞台が低湿地ないし低平地に固定化するに伴い、住居も又それに近い位置環境、従って地下水位の相当に高い位置環境に立地するようになる。このことが住居構築に際して考慮され、平地式住居の相対的増加の傾向を喚起したことが十分推定されるであろう。今回、検出の困難であることも手伝って、その平面プランを確認するまでには至っていないが、おびただしいピットの内の幾例かは、こうした平地式住居の可能性が指適されようし、さらにその一部は、弥生時代前期以降に報告例のある高床式倉庫であるやもしれぬ。今後、こうした方面への、さらに詳細な検討が必要であろう。

なお、S－11区近辺では、自然木を主体とする集積がみられた。自然木以外には、若干の四角柱状木製品及び植物繊維の存在が知られる。植物繊維は、長さ30cm前後を計り、幅20～30cmにわたって地山にはりついた様相のものが数ヶ所で露見した。遺存度が悪く、それが何の繊維であるかは決し難いが、その規模、形状より穂摘された水稲の束である可能性を残す。いづれも、微高地から流れ込んで、この地に至り集積したのであろうか。

（谷口　徹）

注

(1). 和島誠一、田中義明「住居と集落」(『日本の考古学』Ⅲ　1966。)

(2). 和島誠一、金井塚良一「集落と共同体」(『日本の考古学』Ⅴ　1966。)

和島誠一「原始聚落の構成」(『日本歴史学講座』1948。)　他。

(3). 古川与志継『野洲郡衙跡推定地第１次確認調査概要報告書』(野洲町教育委員会　1976。)

4．遺　　物

今回の下繰子遺跡Ｅ・Ｓ地区の調査の結果として、土器、石製品、木製品及び植物種子等、多種多量の出土を見た。以下、順にこれを紹介する。

(1). 土　器

Ｅ・Ｓ地区出土の土器は弥生時代後期後半から平安時代までに至る各時代に属するものであるが、主体となるのは須恵器出現以前の古式土師器と呼ばれる一群の土器である。これらの土器はＥ・Ｓ区の旧河道や溝状遺構、土壙、住居跡、柱穴等の各遺構より出土したものであるが、大半がＳ－１・２区の旧河道から出土したものである。したがって、個々の土器の説明は別表に譲ることにして、以下には旧河道出土土器の概観を中心に、一部出土土器の時代観にもふれてみよう。なお、これらの遺構から出土した土器の他に、耕土層及び攪乱土層、包含層より古式土師器片から近世の陶磁器片まで含む各時代の土器が採集されたが、これについては省略させていただいた。

さて、旧河道内の堆積土層は一応二層に区分されるが、上層の暗黒色泥土は河幅より外へ広がるもので、当旧河道の河川としての機能が停止した後に形成された溜り的性格をおびたものであることからして、この河道の堆積土は下層の黒灰色泥砂層のみの単一層と考えられる。土器も若干の遺物以外はすべて下層に流入したものであって、弥生式土器から古墳時代前半の古式土師器が混在している状況より、数次の流水によって流れ込んだものが殆どと考えられる。

旧河道から出土した土器は甕、壺、小型丸底壺、碗、高杯、器台、土製支脚等各種にわたるが、このうち甕等については数個のタイプに分類できた。まづ、これら各器種の分類

について説明を試みておこう。

甕Ⅰとして類別されるのは、口縁部が中位で屈曲する二重口縁のもので、さらに三類に細分される。甕Ⅰ－A（e1～4）は、口縁部が途中で鋭く屈曲して外上方へきつく立上がるものである。端部は外方へ摘んで突出させるものと、先端を摘まない直口縁のものとがある。しかし両タイプとも口縁部直立部と頸部に櫛状具による列点文を施すという手法が共通する。胴部は下半部の張りが小さい無花果形を呈すると思われる。

甕Ⅰ－B（e5～13）も同じく二重口縁の甕であるが、口縁部の立上がりの度合が弱いうえに、端部を摘むためS字形を呈するものである。しかし、口縁屈曲部の稜は甕Ⅰ－Cに比べて明瞭である。口縁先端を外方へ水平に大きく摘み出し、幅の広い平坦な面を呈するもの、上端部の面の中央が凹線風にやや窪むもの、口縁先端を外上方へ摘み出すもの、口縁部の器壁が薄く、上端の面の幅が狭いもの等、さらに三～四類に細分することができよう。なお、A類に見られた櫛状具による列点文はなくなるが、頸部に櫛状具による条痕を施すものがある。

甕Ⅰ－C（e14～16）は口縁部中位の屈曲が非常に甘い、したがって立上がりの緩い、内外両面ともわずかに波打って屈曲するS字状口縁の甕である。口頸部の施文はなく、単に横ナデを加えるにとどめる。前の二類に比べて口縁部の器壁は厚い。

甕Ⅱとして類別したものは口縁端部が内側へ肥厚するタイプである。出土数は少ないが、肥厚部の丸いもの(e17)、僅かに内傾するか水平なもの(e18・19)、大きく内傾する肥厚帯のもの(e20)の三類に細分できる。この他にe－21のような小型で内側に水平に肥厚する別類がある。

甕Ⅲとして一括できるのは口縁部が単純に外向するもので、さらに二類に類別される。甕Ⅲ－A(e22～31)は「く」字状の頸部から外上方へ直線的に開く口縁を有する甕である。口頸部内外両面にハケ目調整を施し、内面頸部以下を箆で削るものが大半を占める。

甕Ⅲ－B(e32～35)は丸味を持って屈曲する頸部から外上方へ弓なりに開く甕である。この類品も口頸部にハケ目調整を加えるのが大半を示すが、Ⅲ－Aのハケ目よりは比較的粗いのが特徴である。

壺形土器は頸部より大きく外上方へ開く口縁のⅠ型(e36・37)、口縁があり開かないやや直立気味のⅡ型（e38～40）と複合口縁のⅢ型（e41）等があるが、他にe42のような鉢または甕形土器と呼ぶべき小型品まである。なお、壺Ⅰのe37は頸部から体部にかけて斜格子の叩目を装飾的に施すが、この種の土器の類品は船橋ⅡⅡ、ⅡⅡに見られるものの、船橋例は叩目のズレが著しく粗雑な感じである点から、当下繰子例は船橋例(注1)よりも先行するものと考えられる。

小型丸底壺も口縁部が外上方へ大きく開く割合には体部が小さく扁平な形態のものから、

口縁部と体部の比率が接近すると思われるもの、さらには球形の体部に小さく外反する口縁を持つものまで三つのタイプが存する。

高杯は杯部、脚部をともに残すものがなく、類別は難しいが、脚部の形態だけで分類すると三～四類になる。Ⅰ型は支柱部の中下位がふくらむタイプであり（e51・e52）Ⅱ型は細身の筒形の支柱部を持つスマートなもの（e53～59）、Ⅲ型は内外両面に鋭い稜を残して屈折し、外下方へ大きく開く裾部を持つものであり（e60）、Ⅵ型は背の低い脚部の基部から外下方へ大きく開く、支柱部の希薄なものである。なお、以上の旧河道出土土器以外の各遺構より出土した土器についても、上述した類別を適応できるであろうが、各遺構での出土点数が限られていることでもあり、一応未分類のままにとどめた。

さて、これらの旧河道出土の土器は、先にも触れたように、比較的長い期間に及ぶものが、層位的に埋没せず混在していたため、一時期の器種のセット関係やその先後関係等について明確に指摘するのは不可能である。ただここでは、数量的にもっとも豊富で、形態的にも多様で、分類に信頼のおける甕形土器についてのみ、あくまでもその形態変遷をたよりに編年的見通しを述べておく。

まず甕Ⅰとして一括した二重口縁の甕形土器は、従来弥生式土器から土師器への移行期に、東海地方を中心に東は関東、東北地方から西は近畿地方にまで及ぶ広い分布圏を持つS字状口縁甕形土器として一括処理されていたものである。滋賀県下においても、これまで湖北、湖西、湖東、湖南の弥生時代から古墳時代にかけての各遺跡で本類品の多量の出土を見ており、その分布は全県的であり、その規模は圧倒的なものであったことが明らかにされている。[注2]

さて、下鉢子遺跡出土の二重口縁甕形土器は、既に述べたとうり三類に大別されるが、これら三類は型式的にⅠ－A→Ⅰ－B→Ⅰ－Cという変遷過程を辿るものと考えられる。つまり、口縁部の立上がりの強いものから弱いものへ、櫛状具による施文の行なわれるものから無文のものへ推移すると思われるのである。ところで、上述の形態変遷はこれまでの県下の各遺跡の出土例からも伺われるが、一昨年実施された入江内湖西野遺跡の調査によって、不純物を混えながらも、ほゞ上記した変遷に近似するこの種の甕の層位的確認がなされており、東海地方や大和でのこの種の土器の移行過程と近江におけるそれとが大差のないものであることが明らかにされた以上、十分に認めうるものであると思われる。[注3]

ただ、このような形態変遷を経ると考えられる甕Ⅰ一括品は、先にも触れたごとく近年まで、伊勢湾系のS字状口縁甕形土器として把えられ、その型式的編年についてもこれまでのところ、あくまでもS字状口縁甕の形態的変遷の中で検討されていたのが大方と言えよう。ところが最近これらの近江における二重口縁の甕はあくまでも近江地域で独自に発生したもので系譜的にも近江地域でその起源が朔及できるもので、伊勢湾のS字状口縁甕

形土器とは分離しようという見解が提出され、これら分離された近江系の二重口縁甕を受口状口縁甕形土器と呼称しているのである。[注4] すなわち従来は、東海もしくは畿内からの文化的波及の中でのみ検討されてきた近江の弥生後期の土器研究も、ここに在地性という新しい問題を考慮しなければ、精度の高い編年を達成できないという新たなる段階が到来したと言えるのである。

そこで、当下繰子遺跡出土の二重口縁甕についても、一応再検討を加えて見るならば、Ⅰ－A類を近江系の受口状口縁甕として把握できるのに対して、Ⅰ－B・Ⅰ－C類は元屋敷b類あるいはc類に類似する伊勢湾系のS字状口縁甕のタイプに入るものと言えるのである。

ところで、下繰子出土例でもっとも古いⅠ－A類は、さらに端部を摘まない直口縁のe1・2と端部を摘み出す3・4に細分され、直口縁のe1・2は3・4より一層古式のものと考えられ、湖東湖南における受口状口縁甕の上限を示す一類例と思われるので、周辺遺跡出土の受口状口縁甕との比較検討を加えておこう。

草津市片岡遺跡出土のこの種の甕は、最古の土師器と総称される土器の一群を構成しているが、[注5] その中でもっとも古相を呈す甕A－a類は、口縁直立部や頸部に櫛状具による列点文が施されており、下繰子のⅠ－A類に類似するが、端部をわずかに摘んでおり、どちらかといえばⅠ－Aのe3・4に類似すると思われる。したがって、下繰子のe1・2は片岡遺跡の類例に先行するものと考えられる。

ついで、当下繰子遺跡とは至近距離にある古富波山古墳封土中より出土した二重口縁甕[注6]は伊勢湾系の元屋敷b類とされるタイプにも出土例が見られるもので、Ⅰ－Aの二例よりはⅠ－Bに類似したものである。したがって、受口状口縁甕というよりもS字口縁甕とすべきであろう。なお、古富波山古墳出土のS字口縁甕は伴出遺物からも庄内期のものであることは明瞭である。

方形周溝墓からの一括遺物である大津市坂口遺跡出土の受口状口縁甕は口縁部外面直立部及び体部への篦描文が特徴であるが、[注7] その独自な手法の展開からして下繰子のⅠ－A類よりやゝ遅れて来るものと考えられる。

同じ大津市の湖西線関連遺跡例では、[注8] 中にⅣB区1号方形周溝墓出土のC7例のような、弥生後期まで上がる可能性を持つものがあるが、その他はすべて庄内式併行期から布留段階までのものと想定される。

以上の周辺遺跡との比較検討から結果することは、下繰子遺跡出土のⅠ－A類e1・2はこれまでの周辺遺跡のどの類品よりも先行する古式なものだということである。

さて、Ⅰ－A類のe1・2例のような受口状の直口縁の甕形土器の類例は、これまでのところ、湖北・長浜市によく見られる。特に鴨田遺跡[注9] では東海地方の山中期、欠山期に盛

行する浅鉢形土器や欠山式の高杯等とともに多量に出土しており、形態も古付のものが多く見られ、東海地方との密接な交流とその影響を受けたものと考えられる。また大東遺跡1号方形周溝墓内からも類品が出土、これまた欠山期に比定されている。このような湖北地方における弥生後期に比定される受口状口縁甕形土器の出土例からして、下繰子の甕Ⅰ－A、e1・2については弥生時代後期にまでさかのぼるものと考えられるが、本例に共伴する土器には布留期までのものが存し、セット関係にある器種の実状が今ひとつ不明確であり、この点において本例を弥生土器に含むに若干の不安が生ずる。(井10)

ところが最近あいついで、野洲地域に於いて畿内Ⅴ様式の土器に伴出する受口状口縁甕が明らかにされている。久野部遺跡十ヶ坪地点出土例(注11)と久野部遺跡七ノ坪地点出土例(注12)がそれで、いずれも畿内Ⅴ様式に通有な長頸壺、高杯、器台等を共伴している。これによれば、e－1の類似品は十ヶ坪、七ノ坪双方に見られ、口縁端部が内傾するe－2に酷似するものは七ノ坪SD－2上層より出土しており、本二例が畿内Ⅴ様式に併行する時期のものであることは明らかである。このような野洲地域における受口状口縁甕の実態は、編年的研究の進んでいる畿内Ⅴ様式の土器との共伴関係に基づいており、これまで一部では混乱さえ生じていた近江におけるこの種の甕の変遷過程とその起源的課題とに決定的な影響を及ぼすものと思われる。

以上のながながとした考察から、下繰子遺跡出土甕Ⅰ－A類はe1・2を弥生時代後期後半に、e3・4を弥生時代後半～庄内期の古い時期に比定しうる。またⅠ－B類についても細分の可能性を考慮して庄内期の新しい段階から布留期の古い時期に比定することができる。残るⅠ－C類は足達・木下分類のⅢB類からⅣA類に相当するもので、上記のⅠ－B類より後出する布留期の新しい段階のものと考えられる。

次に甕Ⅱであるが、この種の土器は従来布留式土器と汎称される土器群の甕として顕著なものであり、小若江北遺跡や船橋遺跡等に類品を見ていたものである。この種の土器も近年の大和における調査によって、編年的細分が可能となった。つまり、下繰子遺跡出土の甕Ⅱ－Aは木下・安達分類の甕A－a類であり、Ⅱ－Bは(注13)A－b類であり、Ⅱ－C類は同A－　となり、これら三類は坂田寺や上の井手遺跡の調査によってA－a→A－b→A－c類へと漸時的に移行することが明らかになった。そしてこの大和における変遷過程が、先に記した入江内湖西野遺跡で相対的ではあるが、この種の土器についても層位的に確認された。したがって、下繰子遺跡の甕ⅡもA→B→Cという推移を辿るものと考えられるが、出土数が少ないので一応布留期の土器として一括し、細分は控えておこう。

最後に甕Ⅲとして一括把握した単純の甕は一応二類に大別したが、さらに細分の可能性がある。全体としてハケ目調整の多用、体部内面の篦削り、ほゞ球形の胴部を呈すと思われるのが特徴である。時期としては、旧河道より須恵器を伴出しないことから、5世紀ま

では下がらない古墳時代前期の一括遺物として把えたい。

甕形土器以外の他の器種それぞれについても、同じく形態変遷がたどれそうだが、一部、後期後半の弥生式土器に比定しうる可能性のある土器（e42の小型壺、e69の器台、e89の手焙形土器）は別として、大半を庄内期～布留期のいわゆる古式土師器と呼ばれるものが占めると言って大過ないであろう。

さて、下縄手遺跡出土の土器を最後に俯瞰してみると、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半においては在地性の強い甕Ⅰ－Aの存在から見られるごとく、近江という独自な文化圏の影を色濃く残していたと思われるが、古墳時代前期後半前後に達するや畿内及び伊勢湾地域という他地域の影響下に置かれ、在地性の希薄な様相へ序々に推移していったものと想像される。これらの土器という極めて日常的な生活に密着した、それでいてまぎれもない一つの文化現象であるその推移が、野洲川の流域に展開された古代の政治変動に対応したものであるか否かは、今後の調査研究によって次第に明らかにされることであろう。

（別所　健二）

注

(1)原口正三ほか『船橋Ⅰ・Ⅱ』(平安学園考古学クラブ　昭和47年)

(2)大参義一「弥生式土器から土師器へ―東海地方西部の場合―」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第47輯　昭和43年)

(3)田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会　1977)

(4)代表例として、丸山竜平「大津市堅田真野春日山遺跡」(『昭和五十年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会　昭和52年)

(5)丸山竜平ほか「草津市片岡遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－Ⅱ』滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会、1976年)

(6)丸山竜平ほか「野洲郡野洲町宮波遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報48年度』滋賀県文化財保護協会　昭和50年)

(7)林博通ほか『坂口遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会　財団法人滋賀県文化財保護協会　1975)

(8)田辺昭三ほか『湖西線関連遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会　昭和48年)

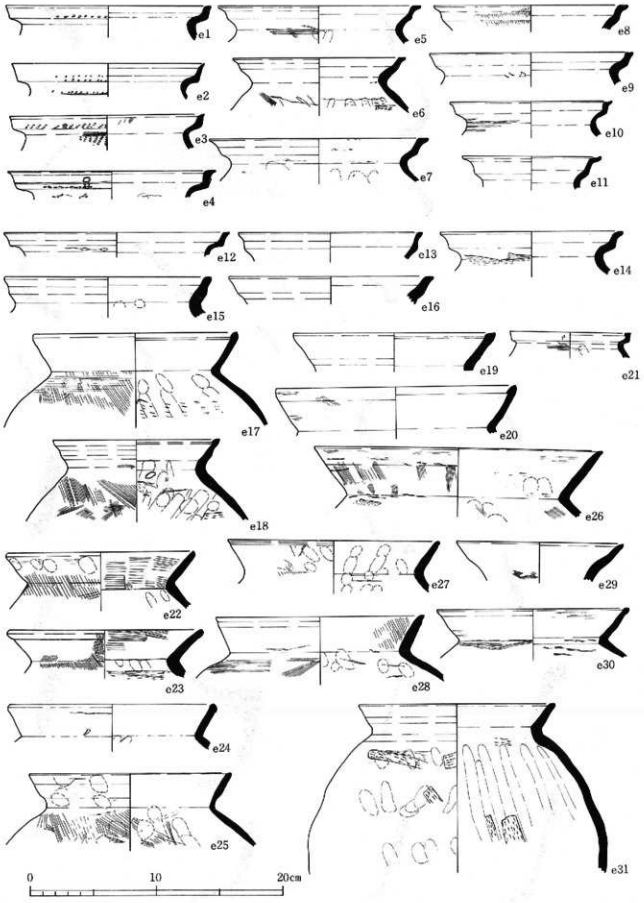
(9)中谷雅治ほか「鴨田遺跡」(『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会　1973年)

(10)田中勝弘・谷口義介・別所健二「大東遺跡」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会　1996年)

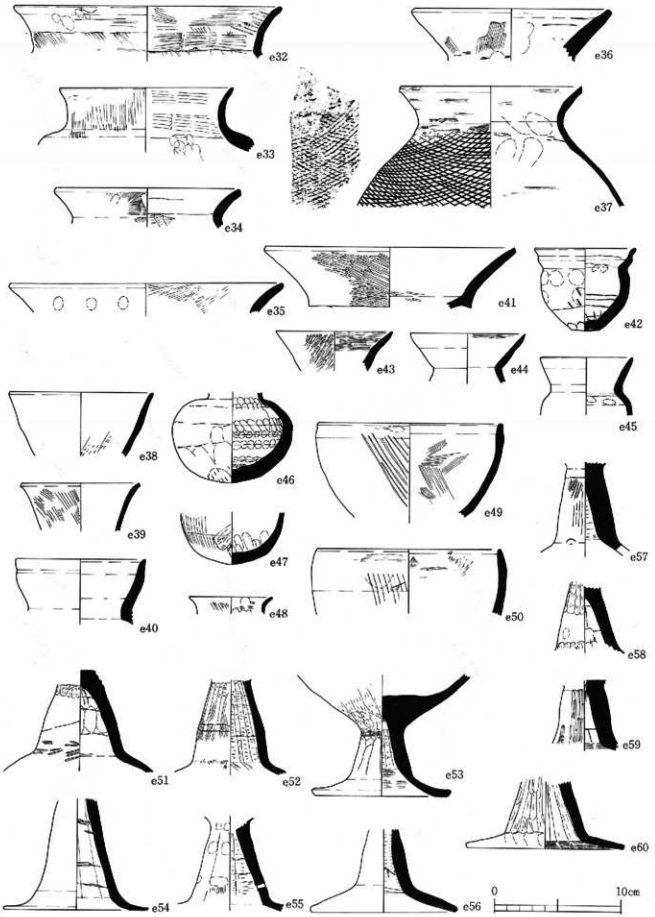
(11)兼康保明ほか『久野部遺跡発掘調査報告書―野洲郡野洲町久野部字十ヶ坪所在―』(野洲町教育委員会　財団法人滋賀県文化財保護協会　1977年)

(12)昭和52年2月～5月まで調査、現在整理作業を行っている。追って報告書刊行の予定。

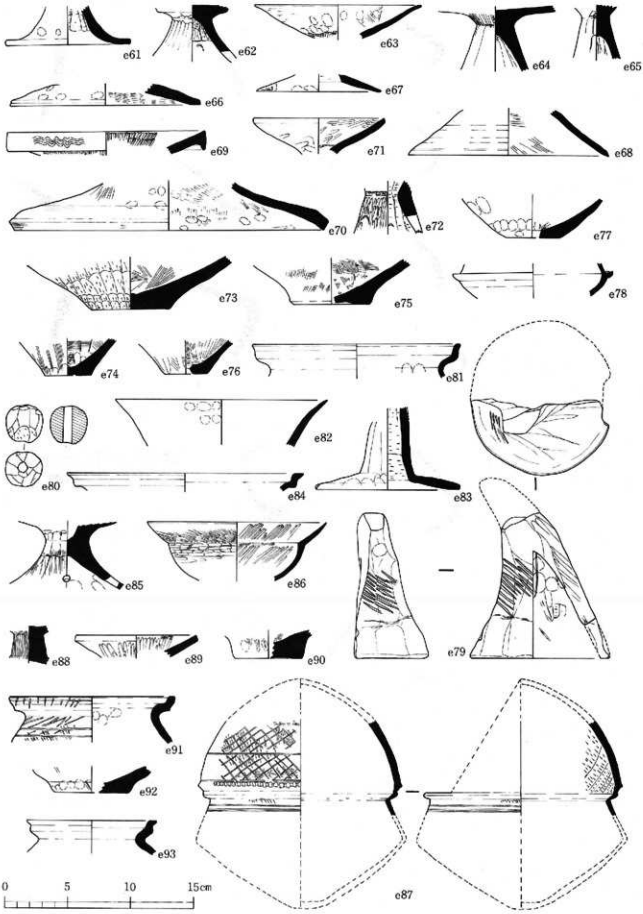
(13)安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第六十号第二巻、昭和49年)


e1
e2
e3
e4
e5
e6
e7
e8
e9
e10
e11
e12
e13
e14
e15
e16
e17
e18
e19
e20
e21
e22
e23
e24
e25
e26
e27
e28
e29
e30
e31
0
10
20cm

第14図　土器実測図(1)

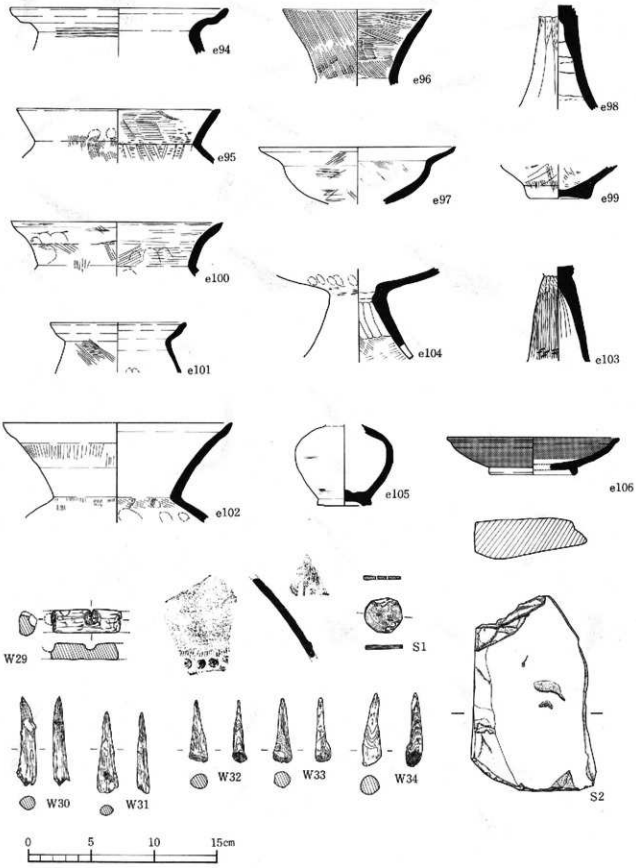

e32
e36
e33
e37
e34
e35
e41
e42
e43
e44
e45
e38
e46
e49
e39
e57
e47
e40
e48
e50
e58
e59
e51
e52
e53
e60
e54
e55
e56
0
10cm

第15図　土器実測図(2)



第16図　土器実測図(３)

旧河道上層出土土器（e61～e80）　SK－１出土土器（e84・e85）　SK－２出土土器（e87～e90）　SD－１出土土器（e93）実測図
旧河道下層出土土器（e81～e83）　P－５出土土器（e86）　SE－１出土土器（e91・e92）



第17図　土器・石器・木製品実測図(４)

SD－１出土土器（e94～e99）　　E区出土土器（e103～e106）
SK－４出土土器（e100～e102）　　石器（s１・s２）木製品（w29～w34）実測図

(2). 石製品

石製模造品（Ｓ１）

径３×2.8cm、厚さ３㎜を測るいわゆる有孔円板である。原材を十数回にわたってカッティングして円形に粗整形したあと、表裏両面を砥石にて数方向から研磨する。側壁にも同様な調整が縦方向に施されているが、このため側壁は幾分丸味を帯びたものになっている。平面中央の二個の小円孔は、錐状工具によって単一方向から穿たれている。石の材質は滑石製のものである。Ｓ－１区の旧河道下層の灰白色泥砂層より出土した。

砥石（Ｓ２）

きめの細かい不定形な砂岩の表裏二面と一側面を利用したもので、三面とも浅い磨痕が残る。長さ15.5cm、幅9.7cm、厚さ3.2cmを測る。Ｅ－９条里溝より出土した。

（別所健二）

(3). 木製品

弥生時代後期から古墳時代前期に至る時期は、水稲農耕を要とする生産諸力の飛躍的な発展を背景とし、一方ではそれを支える生産要具の鉄器化と機能用途による多彩な分化が顕著である。そのことが、木工技術にも直接・間接の影響を与えていたと考えられる。今回の調査でも、それを裏づけるように多種多様の木製品が検出された。それらの多くは、Ｓ地区の旧河道、ＳＥ－１、ＳＤ－１、ＳＫ－４から検出されたもので、多量の土器片や自然木とともに堆積していたものである。木製品は、自然木２～３に対して、およそ１という相当高い割合で見い出されている。ただ、私には、それがいかなる用途に用いられたものであるか十全たる考察を加えるだけの能力を持ち合わせておらず、大半を用途不明という形で「処理」することとなった。もちろん、用途不明とは、現在の我々にとってそうであるというに過ぎず、それらを諸生産へと活用していた当時の人々にとっては、個々が生々とした用途を持ち、日常を潤す優れて意義ある所産であったことは想像に難くない。読者諸賢の英明なる判断を抑ぎたい。

なお、以下に概括する木製品各種の番号は、挿図、図版に記載された番号に一致するよう照合してある。

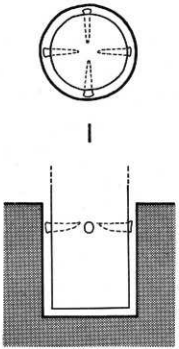
柄（Ｗ１）

先端部を欠損しているので、何の柄であるかは不明である。残存長29.3cm、幅約2.5cm、厚さは把り部で約1.2cmを計り、先端部へ行くに従い厚さを増して2.5cmに至り欠損している。先端部から2.5cmの箇所で把り部へ向かう大きな削痕が認められ、全体に丁寧な加工を施している。把り部には２孔が穿たれており、吊り下げる用途を想起させるが、使用痕は確認されなかった。

〈下繰子遺跡S地区出土木製品一覧表〉

区	遺構	杭	竪杵	有孔板状木製品	組板状木製品	井戸枠状木製品	棒杭	柱根	楔状木製品	板材	火鑽臼	用途不明木製品
S－1	旧河道	1	12	4	15		22,23	28		26		2．3．6．7 9．10．13．16 25．27．
S－2	P － 1								30．31			
S－4	P － 2								32．33．34			
S－8	P － 8							18				
S－9	SE－1					19,20						17
S－13	SD－1		11	14		21		24			29	
	SK－4											5．8

（木製品各番号の「W」は省略）



第18図
楔状木製品出土復元模式図

竪杵

1．（W12）

残存長41.4cm、長径9.7cm、短径8.5cmの楕円に近い円形を呈する。把りの部分に至るくびれ部端の削り出しの箇所で欠損している。木取りは木心を中心としており、そのために木心に向かうひび割れが激しい。先端は中心部がやや盛り上がりをみせるが、ほぼ平担に近く、端部は使用により磨滅している。最終的に研きをかけているためか、全体に加工の痕跡は明瞭でないが、くびれ部の一部において斜方向に断続的な削り出しの痕が認められた。

2．（W11）

残存長43.5cm、長径7.0cm、短径5.7cm、の楕円に近い円形を呈する。これも把りの部分に至る箇所で欠損しており、木取りの方法も同様である。先端はW12に比して丸みを帯びており、W12のくびれ部にみられた削り出しの痕跡が、これではくびれ部以外で確認された。やはり斜方向に断続的なそれである。

有孔板状木製品

1．（W4）

長さ26.5cm、幅7.4cm、厚さ約1.0cmの板状品で遺存度は良好である。上方右寄りに、約1.0×0.5cmの本来長方形であったと思われる一孔が両面から穿たれている。又、右端より2.7cmの箇所で、下端から約12.0cmにわたって右側を削り落とし、さらにその右側を

刀子様工具で上方に向かって断続的に削り出し丸みを負っている。一方、左側でも下端から9.1cmの箇所を起点としてわずかに内向弧状をなしながら一気に削り出している。その規模、形状より、精緻な機具の一部、ないしはマジカルな使用用途を想起させるが、確かな事は不明である。

2．（W14）

残存長46.7cm、幅26.7cm、厚さ約2.5cmの板状品である。.2.6×2.8cm、2.4×1.5cm、2.0×1.8cmの３孔穿たれているが、現状では規則性を考慮し難い。上面に、下から上へ向かう削痕がわずかに認められる。

2.0×1.8cmの３孔穿たれているが、現状では規則性を考慮し難い。上面に、下から上へ向かう削痕がわずかに認められる。

俎板状木製品（W15）

長さ56.4cm、幅24.1cm、厚さ約1.5cmを計る板状を呈す。端部に幾分欠損がみられるが、比較的良く当初の面影を残している。上、下各端部より、11.1cmと9.6cm入った箇所で、深さ1.2cm、幅おのおの約1.5cmと約2.0cmの溝が切り込まれている。溝は、当初のみ状工具で内部にやや広がるように打ち込んだ後、木目に直角にあてて断続的に削り出したものと考えられる。削り出しの痕跡が、その跡を留めていた。こうして作りあげられた溝には、本来「脚」となる木片が横から挿入されていたと思われるが、現在、それは検出されていない。なお、上、下、左の各端部は、それぞれ外に向かって削り出されており、しだいに厚みを減じて端部に至るよう加工されている。しかも、力の加わる溝部は、意識的に避けて削り出されているようだ。ただ、そうした加工痕が右端部にのみ見られないことから、その箇所には、さらに同様の板状品が１ないし数枚併列する可能性も考えられ、その場合には、俎というよりも別の用途を考慮するのが妥当であろう。

井戸枠状木製品

W19は、井戸枠とするのが妥当であると思われるが、W20、W21に関しては幾多の疑問を残しており、ここではそれらを一括して井戸枠状木製品と総称しておくことにする。

1．（W19）

残存長36.5cm、残存幅7.3cm、厚さ約2.5cmを計る。下端は薄くなり火を受けてやや焼けている。地中にあって下端はほぼ現状を留めているが、上端は腐蝕により欠損している。当初は下端のみ削った長方形に近い板状のものと思われる。材質は優れて堅緻である。

2．（W20）

残存長58.9cm、残存幅約10.8cm、厚さ約1.4cmを計る。表面は荒く、腐蝕が激しい。側

裂後の加工の痕跡は認め難い。当初は、W19 同様に、長方形に近い板状品と考えられ、欠板と称すべき可能性を残している。ＳＥ－１からは、同様の木製品が他に１点検出されている。

3．（W21）

残存長48.5cm、残存幅約5.0cm、厚さ約1.0cmを計る。材質・遺存状況ともに W20 に近いが、やや孤状を呈する点で異なる。

棒杭

Ｓ－１区旧河道からは、堰状遺構を補強する用途を主とした棒杭の検出例が相次いだ。それらは、樹皮を伴う円柱状のもの、鋭利な縦の割裂を受けた多角柱状ないし断面扇状のものと偏差に富む形状を呈する。ここでは、比較的遺存状況の良好であった２点について概括を加える。

1．（W22）

残存長58.5cm、4.5×3.0cmの四角柱状を呈する。縦の割裂の後、下端を鋭い鉄刃器様の工具で削って尖らせた細長い棒杭である。

2．（W23）

残存長46.2cm、直径約3.5cmの円柱状を呈する。自然木をそのまま利用し、下端部のみ鉄刃器様の工具で鋭く削って尖らせている。

柱根

今回の調査区は極めて限定された範囲ではあったが、Ｓ地区Ｐ－３、Ｐ－４、Ｐ－８、Ｐ－９、Ｐ－10、Ｅ地区Ｐ－11と幾多のピット内から柱根が検出された。ただ、調査区が限定的であることもあり、そのことによって建物址を想定するまでには至らなかった。ここでは、それらの柱根の内、比較的良好な遺存状況を示すＰ－８のそれについて説明を加え、あわせて、ＳＤ－１から検出された主柱様の木製品、及び旧河道から検出された支柱様の木製品のおのおのについても付記しておきたい。

1．（W18）

残存長12.0cmで、直径約7.0cm内外の円柱であったと思われる。本来堅緻な材質だったろうが、現在では腐蝕が著しく、地中に埋もれた下端部のみ遺存し、柱の心部も又欠損している。表面の一部に火を受けて焼けた痕跡があるのは留意されよう。木心を柱の中心にしているが、現状では表面に加工の痕跡は認められない。

2．（W24）

残存長47.0cmで、長径10.7cm、短径9.2cmの楕円に近い円形を呈する。上端を欠損しているが、遺存状況は良好である。木心を柱の中心に、心割法によって荒ごなし、手斧様工具で上方より下方にむかって断続的に削って仕上げたもので、下端は心もち太くして

いる。柱底部はほぼ平坦に近い。ＳＤ－１の暗黒色泥土層下部から多量の土器片とともに検出された。主柱として利用されたものであろう。

3．（W28）

残存長144.2cm、直径約8.3cmの円柱状を呈する。小枝を荒く払っただけの自然木を基材とし、先端部には長さ13.0cm、深さ2.7cmからなる切り込みがみられる。又、その切り込み部の背面には、粗雑な抉りがめぐっている。おそらく、建物の支柱ないしはそれに類する建築資材として、切り込み部で他の木材と組んだ後、抉り部を縄様のもので縛っていたと考えられる。

楔状木製品（W30～W34）

おおよそ、長さ5.0～6.0cm、最大径1.5cm前後を計り、一端は堅緻な小枝の節部で切断し、他端を刀子様工具で削り出し尖らせた木片である。Ｐ－１から３点、Ｐ－２から３点それぞれ検出された。Ｐ－１では、それに伴って柱根の外皮部がわずかに遺存しており、両者の関係が推定されるに至った。それによれば、楔状木製品のやや反り気味の面を上にして柱根心部に向かって４方から打ち込んでいたようである。従って、楔状木製品も本来は、１柱根につき４点を数えたであろう。大木の運搬の際、楔を打ち込んで、それに縄を結えて引きずる様に移動させることがあるが、本例の場合、柱の規模及び４方から打ち込んでいる点等からみて、新たな用途を考慮するのが妥当かと思われる。

板材（W26）

長さ235.0cm、幅33.6cm、厚さ2.5cmを計る板材で、端部にみられるわずかの欠損以外遺存状況は比較的良好である。木取りは、木心に近い辺材を用いており、表裏とも手斧様工具による加工の痕跡がみられる。その加工痕の当り幅は、磨耗のため明瞭ではないが、約８cm前後と推察される。両端部は、表裏両面から外に向かってやや尖がり気味に削り落としている。一部に火を受けた形跡が認められた。旧河道からは、これに類する板材が他に１例検出されており、両者とも堰状遺構の東側つまり上流に、流れに従いあたかも堰状遺構に潜り込む様相を示していた。建築関係に用いられた資材であろう。

火鑽臼（W29）

残存長 5.6cm、幅 1.9cm、高さ 1.4cm のむすび形を呈する。それは、小枝様のものに若干加工を施したもので、最も広い面を底面とし、それに対する頂部には、中央および一端に擦痕がみられる。端部に位置した擦痕は３分の２を欠損しているが、中央のそれは良く原形を留めており、直径1.0cm、深さ0.6cmの半球状にくぼんでいる。周辺は火を受けて焼けており、一方の側面には溝が掘られ、揉みだされた火屑を導く工夫が施されている。本来は、こうしたくぼみがさらに幾つか並列していたのであろう。火鑽弓及び火鑽杵の検出はなかったが、それらを加えた３者が一体となり、発火の用途に付されて

いたと考えられる。

用途不明木製品

1. (W2)

長さ31.0cm、幅約6.0cm、厚さ1.0cmを計る板状木製品である。遺存状況は良好で、上面には下から上へ向かう削痕が確認される。その削痕は、幅を狭くする上端部で特に顕著となり、それは上面のみならず下面にも加えられている。こうして薄くした先端部には、幅0.4cm、長さ0.9cmの小さな抉りがみられる。下端部は、おだやかな内向孤状に削り落されている。上端の抉りと、下端のそれを関連づければ、糸巻きとしての用途も考えることもできようが、使用痕が不明瞭でもあり一考を要する。中央には、上、下両面にわたる幅0.1cm余の切り傷痕が認められる。断定はし難いが、当時その使用が始まったとされる両端に柄をつけた小さな鋸、つまり両端鋸を挽いた痕跡であるかもしれない。下面では、わずかに挽かれた痕跡を通して各歯様の圧痕がうかがわれる。仮に鋸歯の圧痕であると想定すれば、その歯幅は0.2cm前後を計る。

2. (W3)

長さ30.1cm、幅6.5cm、厚さ1.8cmを計る板状品である。左側面を大きく欠損しているが、遺存度は比較的良好である。中央上方と下端に切り込みが存在する。中央上方のそれは右側面より幅2.3cm、深さ1.3cmに切り込み、奥行きはほぼ2.8cmを計る。下端のそれは、幅1.4cm、深さ0.9cmの切り込みであるが、一部を残して欠落している。比較的精緻な組み物として使用されたのであろう。

3. (W5)

長さ36.8cm、幅3.2cm、厚さ3.3cmの四角柱状品である。堅緻な材質であり、遺存度も良好である。両端にやや規模を異にする切り込みがあり、切り込まない方の面は、やや反り気味に削り落としている。W3同様、精緻な組み物の一部であったと考えられる。

4. (W6)

残存長22.3cmで、断面は2.9×2.0cmの不正方形をなす。遺存する方の端部は斜方向に削り落としている。上面には下から上へ断続的に削る加工痕が明瞭に認められる。用途は不明である。

5. (W7)

長さ14.1cm、直径約7cmの円柱状をなす。木心を中心にしているため、木心に向かうひび割れがみられる。幅約1.0cm、深さ0.3～0.5cmを計る中央部の抉り様のものは、ツタ等の植物繊維で固く縛った結果、成起したようなあり方を示している。これまで、これに類する木製品が幾例か知られ、鷹繍み用の繩巻き具や大形浮きとしての可能性も考えられるが定かではない。

。（W８）

長さ76.2cm、直径2.3cmの細い円柱状の棒である。材質は堅緻で遺存度も良好である。両端近くには、一方は深く（約1.0cm）、他方は浅い（約0.1cm）抉りを入れており、最端部に至って抉りより0.2cm程太くすることで、こぶ様のものを作り出している。体部全般にわたって刀子様工具による加工の痕が明瞭である。ＳＫ－１から流入の様相で検出されており、ちきりとも思われるが用途は不明である。

7.（W９）

残存長57.2cm、幅2.9cm、厚さ1.4cmの木目にそった細い板状を呈す。一方を欠損しているが、他方を斜めに一気に削り落とし、内へ0.7cm入った箇所で幅0.2cm、深さ0.05cmの狭く浅い抉りを内から外へ向かって斜めに入れている。抉りは、裏面には存在しない。それ以外の加工痕は現状では確認されず、ただ中央部の幅約５cmが火を受けて焼けているのが知られる。用途は不明である。

8.（W10）

残存長49.5cmで、断面は直径約2.8cmの不正円形をなす。遺存する一方の端部は丸く、随所で火を受けて焼けている。断面に木心が認められず、木目がほぼ平行に走るところから、比較的太い木の辺材部を原材としているように思われる。ただ、比較的堅緻な材質でもあり、柄としても十分使用に耐えよう。

9.（W13）

大木の辺材を用いた堅緻な板状品である。上、下両端をやや厚く加工し、上端には幅16.8cmの中心に向かう三角形の切り込みがある。それは、中心近くで一段おいて半円からなる孔を穿っている。両側面は、上端へやや反り気味に開いている。半円からなる孔が着装孔であるとすれば、上下は逆転する必要を生じるが、現品のみでは用途不明である。

10.（W16）

残存長51.6cm、幅7.0cm、厚さ2.2cmの板状品で、上面には左から右への手斧様工具による削痕が顕著である。両端とも欠損しているが、左端には1.7×2.3cmからなる１孔が穿たれており、それを埋めるように木片が装填されている。しかも、両者の間隙には数枚の桜樹皮を挿入して堅牢なものとなし、桜樹皮の一端はさらに他の資材を束縛すべく伸びている。こうした手の込んだ加工が、本来ほぞ穴として使用されてきたものを二次利用に供したためであるのか否かは定かでないが、いずれにしろ注目すべき用法であろう。

11.（W17）

残存長19.7cm、約7.0×8.8cmの面取り角柱状を呈す。大木の辺材の部分を使用してお

り、断面中央部に木目にそった一孔が存在するが、加工痕が認められず人為的なものであるかどうか断定し難い。遺存度は極めて良好で、側面には下方から上方へ向かって断続的に削り出した手斧様工具の痕跡が明瞭である。削痕の当り幅は3cm内外を計る。上端は欠損しており定かでないが、下端は三方から中央に向かって削り出し尖がらせている。柱根であるかもしれない。

12. (W25)

残存長95.6cm、残存幅3.6cm、厚さ5.2cmを計る。一端は斜めに鋭く切断されているが、他端は欠損のため不明である。表面には上下両方向からの手斧様工具による削痕が顕著である。加工未製品ないしは破損品であろう。

13. (W27)

残存長87.1cm、幅約12.5cm、厚さ約7.2cmを計る。心材を面取りし、さらに加工を施して丸みを帯びた厚い板状に整形している。一端は長さ13.4cm、深さ4.5cmの切り込みを設けており、残った先端の両側は丸く削った痕跡を保つ。他端は欠損しており定かではない。一部火を受けて焼けている箇所がみられた。単に組み合わせの用途を持つ建築資材とも考えられるが、通常のそれに比して加工が丁寧であり、別の用途が考慮される。

(谷口　徹)

5．むすび

以上、遺構・遺物について、概略説明を加えた。したがって、ここでは本遺跡の性格について、若干言及し、むすびとしたい。

本遺跡は、上に述べられているように、野洲川扇状地端の微高地に営まれた、古墳時代前期に属する集落跡である。今回の調査は、延長200m、幅4mの限られた部分(S地区)と一部削平予想地(E地区)において実施したものであり、数棟の竪穴住居址、若干の土拡、溝などが検出されたのみであったが、E・S地区北辺において発見された旧河道からは、古墳時代前期、なかでもいわゆる庄内式並行期を主体とする土器が多数出土し、本地方における良好な基礎資料を提供することになった。

このように本調査は、きわめて限られた部分において実施したものであり、遺跡の範囲・構造・変遷など、全面的に明らかにできないが、さきに実施された試掘調査[注2]や、本遺跡と一体のものと考えられる高木遺跡の調査結果、本調査と並行して実施したN地区の調査[注3]などを参照して、概観しておきたい。

まず、遺跡の範囲については、第1図に示されているとおり、高木遺跡を含め、東西500m、南北400mにおよぶ大規模なものであることが知られる。すなわち、遺跡の東辺としては、調査区の東約100mの地点において、ほ場整備工事中、多量の土器が発見されてお

り、西辺については、今一つ明白ではないが、一応高木遺跡の西辺と考えられる。南辺・北辺については、本調査区の南北400mが、一応の範囲と考えられるだろう。

本遺跡の存続期間についても、必ずしも明白ではないが、古墳時代前期を大きく下るものでないことは、諸調査によって明らかである。すなわち、本遺跡の下限を示すものとしては、49年度のN地区の調査において、古式の須恵器を伴う遺構が、若干検出されており、S地区の前年度調査において、主として包含層より、多数の庄内式並行期の土器とともに、布留式並行期のの土器が若干出土(注4)、今回の調査においてもSH－5竪穴住居址などより、布留式並行期の土器が出土している。したがって、本遺跡は、一部古墳時代中期に下るものも含むが、高木遺跡および本地区においては、撹乱層を除いて、須恵器の出土は知られておらず、少なくとも古墳時代前期のワクにおさまると考えられる。

本遺跡の上限としては、S地区旧河道より出土した弥生時代後期後半と考えられる土器、および、高木遺跡円形大型土拡より出土した一括土器群が指摘される。これらの土器群は、従来、庄内式並行期のものと考えられてきたが、「遺物」の項で述べられているように、本報告において、甕Ⅰ－Aに分類した甕形土器が、最近調査のなされた、野洲町久野部遺跡の2地点において、中河内で細分された畿内第Ⅴ様式中葉に比定される「上小坂」、「馬場川」期の土器に共伴して出土しており、又、高木遺跡の一括資料についても、兼康保明氏が、久野部遺跡のものより後出し、中河内より搬入された庄内式の甕を伴出する、大津市坂口遺跡方形周溝墓の一括遺物に先行することを指摘されているのである(注6)。高木遺跡の一括資料中に含まれる大形高杯は、伊勢湾地方弥生後期後半に比定される欠山期に通有のものであり(注7)、弥生に遡及する可能性も、残されている。

以上、本遺跡は、一応、弥生後期後半のある時点より、古墳時代前期を中心に存続したことが知られるが、旧河道の資料が示すように、庄内式並行期が、その盛期であったことは、ほぼ間違いないところと考えられる。

本遺跡は、何回も述べるように限られた部分の調査であって、その性格、構造を全面的に明らかにしがたいが、本遺跡において、数棟の竪穴住居址、土拡、ピット、溝跡など多数が発見され、高木遺跡においても、多数の土拡、ピットが検出されており、一応、集落であることが知られる。ただ現在のところ、墓地遺構は、全く検出されておらず、今後の課題として残される。ただ本遺跡の南東350mに所在する五之里遺跡において、弥生中期～古墳前期の方形周溝墓が多数検出されており、それとの関連が、一応予想されよう(注8)。

なお、本遺跡旧河道より、土製支脚一点が出土しているが、これは、いわゆる「角形土製品」と呼ばれるものであって、豊中市原田、泉大津市豊中古池、奈良県纒向など畿内に出土例が多い。県下においては、本遺跡が初見で、本遺跡の性格を考える上で注目される。なお一般にこの種の遺物は、山陰系統とされるが、山陰においては、「大堤輪」と呼ばれて

いるものが主流であり、やや系譜的に異なるのではなかろうか。

野洲町は従来より、24口の銅鐸出土地として著名であったが、それに伴う弥生遺跡は、ほとんど知られなかった。しかし近年来の造成、ほ場整備等の多発によって、集落、墓地遺跡が、各所で発見され、その実態も、しだいに明らかになりつつある。本遺跡の調査も、(註9)このような中で、今後の調査、研究に若干の寄与をなすものと考えるのである。

注

(1) 「遺物」の項で、詳しく述べられているように、旧河道出土の遺物は、大部分が、庄内式並行期に位置づけるものである。須恵器を全く伴わないこと、布留式に特有の鍵Ⅱに分類しうるものが、ほとんど発見されていないことから、明らかである。

(2) 古川与志継「野洲町下緑子遺跡」(前掲書)

(3) 古川与志継「高木遺跡調査概要」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅱ所収　滋賀県教育委員会　1975)

(4) 古川与志継「野洲町下緑子遺跡」(前掲)、なおN地区の今年度の調査については、別に報告されている。(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅰ、滋賀県教育委員会　1977)

(5) 兼康保明『久野部遺跡発掘調査報告書』(野洲町教育委員会　1977)は、久野部十ヶ坪地区の造成に先立って実施されたもので、堀立柱建物および溝、土拡内より出土したものである。現在調査中の久野部遺跡七ノ坪地区においても、ＳＤ－２よりほぼ同時期と思われる土器の出土が知られる。(大橋信弥・別所健二・谷口徹「野洲町久野部遺跡七ノ坪地区調査略報」『滋賀文化財だより』２号、1977) なお、この種の土器について丸山竜平氏は、「最古の土師器」とされている。(同氏「弥生式土器の終焉」、『古代研究』10　1977) 注目すべき見解である。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 大参義一「弥生式土器から土師式土器へ」(『名古屋大学文学部研究論集（史学)』第47輯　1968)

(8) 丸山竜平ほか「野洲町五之里遺跡」(本書所収)

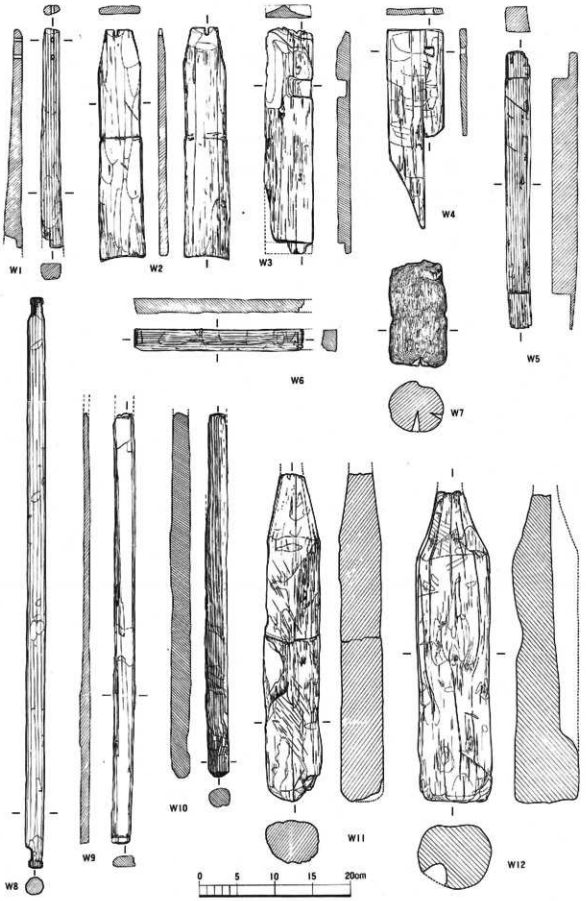
(9) 昭和50年２月、滋賀県企業庁が実施した野洲町妙光寺字東浦地区の試掘調査において、弥生中期中葉～後葉の土器片が発見されており、昭和51年９月～52年１月、県教委が実施した野洲町五之里遺跡からは、弥生中期から古墳前期にかけての方形周溝墓、土拡等が発見されている。そして、本年２月、さきにふれた久野部遺跡十ヶ坪地区の調査が実施され、弥生後期の堀立柱建物３棟ほか、溝、土拡が検出された。さらに本年２月～６月に実施された同遺跡七ノ坪地区でも、同時期の溝および土拡が検出されている。ほかに市三宅、下々塚などでも弥生期の遺物が発見されており、今後さらに増加すると思われる。

追　記

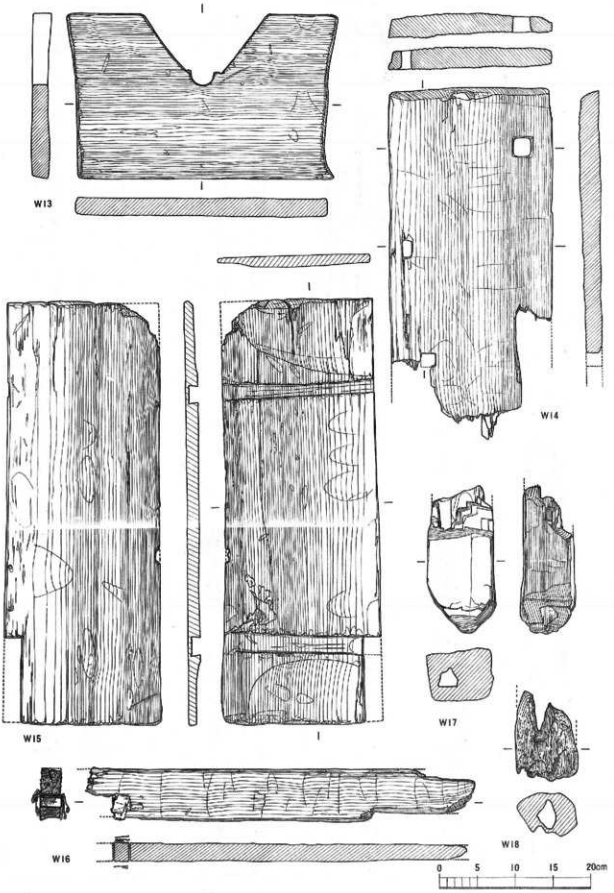
本調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師大橋信弥が担当して実施したが、調査・整理に当っては、財団法人滋賀県文化財保護協会主任調査員別所健二氏・同調査員谷口徹・西島陽子の諸氏に全面的な協力を得、遺物写真については、寿福滋氏を煩わした。記して謝意を表したい。なお、調査および整理業務参加者は次の通りである。

久米雅雄、赤井優、中西和多隆、谷口孝司、水野敏昭、吉田芳行、尾谷孝、井入勉、三宅治、美濃部力、中村明、福井昭彦、国松千夏、大橋美和子、寺田忠良、木村良太、大崎義彦、石橋平。

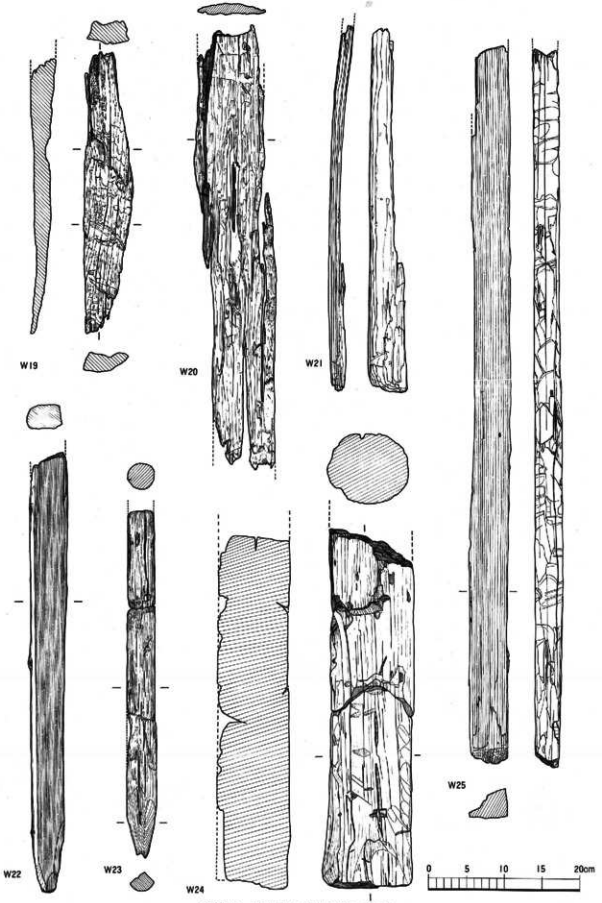
（大橋信弥）



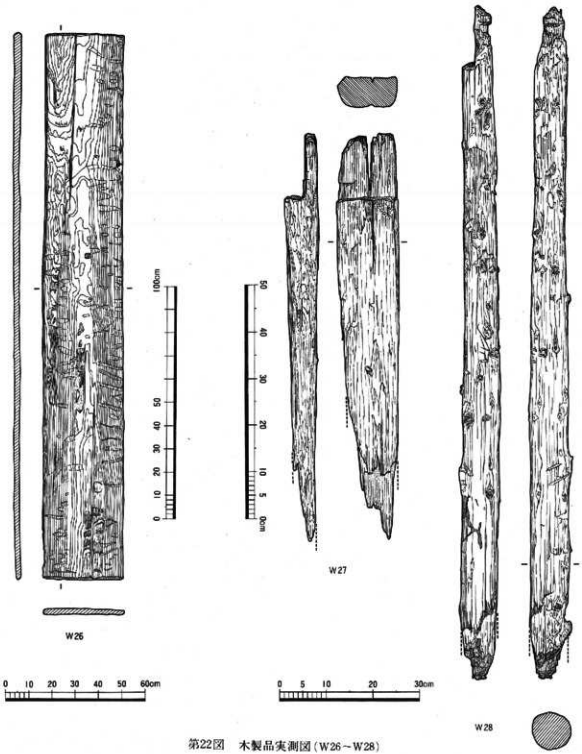
第19図　木製品実測図(W 1 ～W12)



第20図　木製品実測図（W13～W18）



第21図　木製品実測図（W19～W25）



第22図　木製品実測図（W26～W28）

出土遺物観察表

旧河道下層出土土器

器種	土器番号	法量(cm)	形態上の特徴	調整上の特徴	備考
深Ⅰ－A	e 1	口径16.1	鋭い屈曲の頸部から水平気味につづく口縁は途中で直立気味に屈折して、外上方へのびる。上端は平坦な面を成す。	口頸部内外両面を横にナデる。 口縁直立部に列点文を横位置に刺突する。	(胎土) やや、不良 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) やや、不十分 (色調) 淡褐色
深Ⅰ－A	e 2	口径15.0	頸部から水平にのびる口縁の中途で鋭く屈曲して、きつく立上がるものである。 端部は薄く尖り、内傾する面を成す。	口縁部横ナデ、下端に5ヶ1単位の列点文を二段に施す。 頸部から肩部にも横ナデ調整のあと5ヶ1単位の刺突列点文と櫛状具による条痕を施す。	(胎土) 不良 1～2㎜の砂粒を多量に含む。 (焼成) やや、不十分 (色調) 暗灰褐色 頸部外面に煤付着。
深Ⅰ－A	e 3	口径15.6	頸部から鋭く外反する口縁は、屈曲して上方へほゞ真直に立上がる。 端部は外上方へ軽くつまむため、わずかに内傾する面を成す。	頸部外面にハケ目調整を施したあと、口頸部を横ナデ調整。 その上から口縁下端に3ヶ1単位の列点文を、肩部に6ヶ1単位の列点文を刺突する。 内面は口縁中央部にハケ目調整を行ったあと、口縁部を横ナデ、頸部をナデ調整している。	(胎土) 不良 1㎜大の砂粒多し。 (焼成) やや、不十分 (色調) 暗灰黒色 外面は煤で黒色化する。
深Ⅰ－A	e 4	口径16.4	頸部から大きく外反した口縁は、途中で鋭く上方へ立上がる。 端部は大きく引出す。	口縁内外両面とも横ナデを行い、直立部にヘラ沈線を一条、3ヶ1単位の列点文を施し、さらに棒状浮文を貼付する。 頸部内面の口縁部との接合部付近を指圧する。外面には3ヶ1単位の列点文を刺突する。	(胎土) 不良 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) やや、不十分 (色調) 茶褐色
深Ⅰ－B	e 5	口径16.2	丸味のある「く」字形の頸部から外反する口縁部は、さらにゆるく屈曲して外上方へ開き、端部に至る。	外面は口頸部を横ナデ調整、そのあと頸部にハケ目調整を行う。さらにその上から櫛状工具によるカキ目を施す。	(胎土) やや、不良 1～2㎜大の砂粒多し。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色 外面には煤が付着。

			端部は外側へ水平に突出し、平坦な面を成す。	内面は口縁を横ナデ調整。頸部から肩部へ指でナデ上げたあと、横ナデを行う。なお、外面頸部の接合部には指頭の圧痕が見える。	
甕Ⅰ－B	e 6	口径13.8	外上方へ外反する口縁部の中位でゆるく屈曲するもので、端部は外へ摘む。平坦な面を成す上端部の中央はやゝ窪む。	口縁は内外両面とも横ナデを施す。体部内面は指でナデ上げ、横方向にヘラ削でる。体部外面には接合痕が残るが、その上には粘土を削りとったと思われる擦痕が見られる。	(胎土) 不良 (焼成) やゝ不十分 (色調) 乳褐色 外面には煤付着。
甕Ⅰ－B	e 7	口径17.4	e 5・6同様口縁部中位にやゝあまい稜線を残して、外上方へ立上がるものである。端部は外方へ水平へ摘み出し、上に端面を取るが、中央はやゝ窪む。	口縁内外両面とも、横ナデを施すほかには、接合部付近に指の圧痕が見られる程度である。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒あり。 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色
甕Ⅰ－B	e 8	口径15.4	口縁部のみの破片である。中位の稜線は非常にあまい。端部は外へ引き出し突出する。上端は平坦な面を成すが、中央は凹線風に窪む。	内外両面とも横にナデるが、外面は前段階に細かいハケ目を施した模様。	(胎土) 良好 小砂粒を含む。 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色 外面には煤が付着。
甕Ⅰ－B	e 9	口径16.2	口縁部は中位でゆるい屈曲をするもので外上方へのびる。端部は平坦な面をなすが、内外にやゝ肥厚し、中央部はやゝ窪む。	内外両面とも口頸部を横にナデる。	(胎土) おおむね良好 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色 外面は煤付着。
甕Ⅰ－B	e 10	口径12.9	口縁部中位の屈曲部の稜線は比較的明瞭で、端部は外方へ摘み出すが、先端はやゝ上方へ突き出す感がある。	内外両面とも口頸部を横ナデするが、外面頸部から肩部にかけては、その上から櫛状具によるカキ目を施す。	(胎土) やゝ不良 1㎜大の砂粒多し。 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色 外面は煤付着。

甕Ⅰ－B	e 11	口径13.0	e10同様口径は比較的小さい。上端部は平坦を面を呈すが、先端が外上方へ突出するため段を有す。	内外両面とも丁寧に横にナデる。	(胎土) 良好　1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色 断面は黒灰色を呈す。
甕Ⅰ－B	e 12	口径18.0	口縁部の器壁が全体に非常に薄手なのが特徴である。上端部は幅のせまい平坦を面を成す。	内外両面とも口頸部に横ナデ調整を加える。 外面には接合痕を残す。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒有り。 (焼成) や、不十分 (色調) 淡赤褐色
甕Ⅰ－B	e 13	口径14.6	全体に薄手であるが、中位の屈曲部あたりはや、厚く、不格好な感を与える。 頸部以下欠損	内外両面とも横ナデ	(胎土) や、不良 1㎜大の砂粒多し。 (焼成) 不良 (色調) 淡灰褐色 外面煤付着。
甕Ⅰ－C	e 14	口径14.4	頸部から大きく外反する口縁部の中位で、再び外方へ反るものである。このため内面は内傾しており、上端は平坦な面を呈さない。むしろ外側に丸味のある面を有す。	口頸部内外両面とも横ナデ調整を施すが、外面頸部にはヘラ削りのためか、擦痕を残す。	(胎土) や、不良 1㎜大の砂粒多し。 (焼成) 不良 (色調) 赤褐色 外面に煤付着。
甕Ⅰ－C	e 15	口径16.4	頸部の屈曲も小さく、口縁部中位の屈折も甘く、稜線も鈍い。端部は丸くおさめる。	口頸部内外両面とも横にナデるが、頸部内面には指の圧痕が残る。	(胎土) 良好 細砂粒を含む。 (焼成) 良好 硬質 (色調) 茶褐色 外面は煤で黒色。
甕Ⅰ－C	e 16	口径16.2	e15同様厚手のもので、中位の屈折はさらに甘く、ほとんどS字をなさない。	内外両面とも横ナデ調整	(胎土) 良好 細砂粒含む。 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色 断面は黒灰色。
甕Ⅱ－A	e 17	口径16.0	鋭く「く」の字形に屈曲した頸部から内変気味に外上方に開く口縁部は、端部で内側へ丸く肥厚する。体部は秘形を呈し、丸底と推定される。	口縁部内外両面は横ナデ調整。 頸から肩にかけての体部外面はハケ目調整のあと刷毛状具により横に強くナデる。同内面は指押さえのあと、指でナデ上げ、その上からヘラ削りを行う。	(胎土) 不良 1～2㎜大の砂粒多し。 (焼成) や、不十分 (色調) 外面赤褐色 内面黒褐色 外面には煤が多量に付着。

				を行う。	
褒Ⅲ－B	e 18	口径13.2	厚い頸部からやや、ゆるく「く」の字状に屈曲し、外上方へ伸びる。口縁部である。端部はやや、尖り気味の感があるが、内側に少し肥厚する。口縁部は端部へ進むほど器壁が薄くなる。	外面は頸部から肩付近にハケ目調整を施したあと、口縁及び頸部を横にナデる。内面は口頸部を横にナデ、肩以下を左下～右上へ指でナデ上げ、そのあとヘラ削りを行う。	(胎土) や、不良 2㎜大の砂粒含む。 (焼成) や、不十分 (色調) 乳白褐色 口縁部外面に煤付着。
褒Ⅱ－B	e 19	口径16.0	外上方へ直線的にのびる口端部は内側に肥厚。この肥厚する面はほゞ水平である。頸部以下欠損	内外両面とも横ナデ調整。	(胎土) 良好 1㎜下の砂粒含む。 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色 外面煤付着。
褒Ⅱ－C	e 20	口径19.0	頸部で鋭く「く」の字形に屈曲した口縁部は少し内寄しつつ外上方へのび、端部で内側に肥厚。 この肥厚面は長く内傾する。	口縁部内外両面とも横にナデる。	(胎土) 良好 1～2㎜大の砂粒あり。 (焼成) や、不十分 (色調) 淡褐色 断面は淡黒灰色を呈す。
褒Ⅱ－D	e 21	口径 9.6	小型品である。頸部から鋭く水平気味に屈曲した口縁は、再び上方へまっすぐ立上る。端部は内側へ水平に肥厚する。	口縁の内外は横にナデる。 肩部はハケ目調整のあと櫛状具により掻く。内面は指圧を加える。	(胎土) 良好 1～2㎜大の砂粒あり。 (焼成) 堅緻 (色調) 灰褐色
褒Ⅲ－A	e 22	口径14.6	「く」の字形に屈曲する頸部から、外上方へ直線的に開く口縁を持つ。端部は外傾する面を取る。	口縁部上半を指で押さえ、頸部から肩部にハケ目調整を行ったあと、横にナデる。内面もハケ目調整を口縁部に施し、その上から横にナデる。肩部に圧痕を見る。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色
褒Ⅲ－A	e 23	口径15.2	頸部内面に鋭い稜線を残して、外上方へ直線的に大きく開く口縁を持つ。端部はや、丸味を呈するが面を取る。 頸部器壁は厚い。	外面は口頸部を横ナデ調整した上に、細かいハケ目を頸部中心に施す。内面にも強く横にナデたあとハケ目調整を加えたものと考えられる。 頸部～肩部にかけて	(胎土) 良好 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 堅緻 (色調) 明褐色 外面煤付着。

				は接合面に指押さえを施し、肩部以下を横方向に削る。 外面口唇に接ぎ目が判然としている。	
甕Ⅲ－A	e 24	口径16.2	くの字形に屈曲する頸部から、外上方にまっすぐに伸び、内外に少し肥厚気味の端部に至る。	口縁部内外両面は横ナデ調整。体部内面は指ナデのあとヘラ削りか。また、口縁部外面には接合痕及びヘラによる刻目状の深い傷が残る。	（胎土）良好 細砂含有 （焼成）良好 （色調）暗褐色 外面には煤付着。
甕Ⅲ－A	e 25	口径16.0	頸部の屈曲は内面に比較的明瞭な稜線を残す「く」字状のものだが、外面は丸味がある屈曲で稜線は明瞭でない。 口縁部は斜上方へまっすぐに伸び、端部は丸くおさめる。	外面は口縁部上半、下半及び肩部を指で押さえ、頸から肩にかけてハケ目調整。そのあと横ナデを加える。内面は口縁部を横にナデ、体部は斜めにナデ上げ、その上からヘラケズリを加える。	（胎土）良好 1～2㎜大の砂粒を含む。 （焼成）やゝ不十分 （色調）茶褐色 断面は黒灰色を呈す。 外面には煤が付着。
甕Ⅲ－A	e 26	口径22.8	大型品である。 明瞭な稜線を残して「く」字形に屈曲する頸部から外上方へ大きく開く口縁で、端部は丸くおわる。	口縁部外面を刷毛状具で横・縦に強いナデ調整を行う。また、肩部にはヘラ削りを施す。 内面は頸部の上下を指で押さえたあと、ナデ調整を加える。	（胎土）良好 1㎜大の砂粒を含む。 （焼成）やゝ不十分 （色調）乳褐色
甕Ⅲ－A	e 27	口径16.8	おそらく体部中位に最大径を有すと思われる甕である。 外上方へまっすぐのびる口縁部の端部外面は一段と丁寧にナデるため、わずかに窪む。	口縁部内外とも対応する二段の指押さえ痕が見られ、その上を横にナデるが、外面頸部には細かいハケ目痕が残っており、ナデ調整以前のものと考えられる。 頸部以下の内面は指でおさえたあと、上部にはハケ目と推定される調整を加え、肩部以下はヘラで削り、横にナデる。	（胎土）良好 1㎜前後の砂粒を多少含む。 （焼成）良好 硬質 （色調）暗乳灰色 断面は灰黒色。 外面には煤の付着。
甕Ⅲ－A	e 28	口径16.6	e 27同様口縁部端部	外面は口縁部を横ナ	（胎土）良好

甕Ⅲ－A	e 28	口径16.6	e 27同様口縁部端部外面を格別にナデるためわずかに窪む。口縁は少し厚手だが、肩部以下は薄く仕上げられている。	外面は口縁部を横ナデ調整。肩部付近を横、斜目に刷毛状具でナデる。内面はまず刷毛状具で口縁部を縦にナデたあと、横ナデを施す。頸部以下は接合痕、指の圧痕が残るが、横にナデる。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒少し含む。 (焼成) や、不十分 軟質 (色調) 乳褐色 外面は煤付着
甕Ⅲ－A	e 29	口径13.2	頸部からゆるく屈曲した口縁は外上方へ伸びるが、中途で再びゆるく屈折し端部に至る。 頸部以下欠損	口縁部内外両面とも横ナデを行う。 頸部との接合部付近にはハケ目と叩目状の調整痕が見られる。	(胎土) や、不良 細砂を多く含む。 (焼成) 不良 (色調) 乳赤褐色
甕Ⅲ－A	e 30	口径15.2	「く」字形に屈折する頸部からやや、内弯気味に外上方へ伸びる口縁は、端部を丸くおさめるが、やや、内外に肥厚気味である。	口縁部内外両面を刷毛状具で強く横にナデる。肩部外面は同じく強いナデが波を打って施され、内面は横方向にヘラ削りを行う。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒あり。 (焼成) や、不十分 (色調) 淡茶褐色 口縁部外面に煤付着。
甕Ⅲ－A	e 31	口径15.4	頸部内面に比較的明瞭な稜を成して「く」字形に屈折した口縁は、やや、弯曲気味に短かく逆「八」字形に開く。端部は丸くおさめる。体部は器壁は内外とも凹凸が著しく、雑な出来上がりのものである。肩部の張り具合は少い。	口縁部は内外両面とも横ナデ調整。体部は輪積みしたあとの指圧痕が数段に見られる。また、所々をヘラ削りしたと思われる。擦痕が器体外面に残る。更に横ナデの痕跡も見られる。内面は左上がりに指でナデ上げたあと、頸部付近と、体部中位をヘラで削る。	(胎土) 不良 2㎜前後の砂粒を多く含む。 (焼成) や、不十分 (色調) 淡赤褐色 外面の体部には煤が厚く付着、口縁も煤で黒くなっている。
甕Ⅲ－B	e 32	口径21.0	大型品である。 頸部から大きく外反りする口縁であり、端部は丸くおさめる。	頸部から口縁下半にかけてハケ目調整を施し、その上から横にナデる。 内面は横方向の粗いハケ目を施す。頸部以下は、指で押さえたあと、ヘラ削り、横ナデを行う。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 明茶褐色 断面の中心は黒色。

				横ナデを行う。 口縁外面には接ぎ目、指圧痕が見える。	
甕Ⅲ－B	e 33	口径13.6	薄手の口縁部のみが強く外反するものだが、口縁はそれほど開らかない。 肩部は厚く、よく張るものである。	口頸部外面を縦にハケ目を施し、そのあと横にナデる。内面は横方向の粗いハケ目を行い、その上を横にナデる。 肩部には指押さえ、指のナデ上げ等の痕跡がある。	（胎土）良好 （焼成）堅緻 （色調）淡褐色 外面は煤付着。
甕Ⅲ－B	e 34	口径12.4	頸部の屈曲は稜を成さない。 口縁は外上方へ大きく反る。 端部は面を取る。	口縁部上半を指で押さえる。横にナデたあと、細かいハケ目を施す。頸部にもハケ目あり。内面は口縁部を横ナデ調整。 頸部以下を横方向にヘラで削る。	（胎土）不良 1㎜前後の砂粒含む。 （焼成）良好 （色調）淡褐色 外面は煤が付着。
甕Ⅲ－B	e 35	口径15.4	外上方へ逆「八」字状に大きく反る口縁。 口縁下端以下は欠損。	外面には指圧痕と横ナデが見える。 内面には、横ナデと強い斜目の刷毛状具によるナデが見られる。	（胎土）やゝ不良 1㎜大の砂粒含む。 （焼成）良好 （色調）茶褐色 外面は煤付着。
壺　Ⅰ	e 36	口径12.6	引き締った頸部から外上方へ逆「八」字状にまっすぐのびた口縁である。 端部は外に面を取る。	口縁部外面をヘラ磨き。あとは横ナデ調整の模様。	（胎土）やゝ不良 1～2㎜大の砂粒含む。 （焼成）良好 （色調）乳灰褐色
壺　Ⅰ	e 37	口径14.4	丸く屈曲する頸部から単純に大きく外反する口縁を持つ。 端部は外傾する面を取る。 体部の肩の張りは少なく、ナデ肩である。	外面は頸部以下を格子叩目を施し、器壁を叩き締める。そのあと口頸部を横にナデる。内面は頸部及び肩部を指頭で押さえ、そのあと横にナデる。 口縁部内面も横ナデ調整。	（胎土）良好 1㎜大の砂粒を含む。 （焼成）良好 （色調）淡茶褐色
壺　Ⅱ	e 38	口径11.4	球形の体部から「く」の字形に屈曲する頸部を持つ壺で、口縁は外上方へ長く伸び、	口縁内外を横にナデるが、下端にはヘラ削り状の擦痕をとどめる。	（胎土）精良 （焼成）堅緻 （色調）淡白褐色

			あまり開かないその端部は丸くおさめる。		
壺 II	e 39	口径 9.3	頸部から外上方へのびる口縁は端部付近で外反度を強め端部に至る。端部は幅のせまい面をとる。	口縁部外面をハケ目調整のあと、内外を横にナデる。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 灰白色
壺 II	e 40	口径10.2	肩の張った体部に直口気味の口縁のつく壺である。口縁は中位で屈折をかえて上方に立ち上がる。 端部は尖った感を呈すが、わずかに内傾する面をもつ。	口縁部内外を横にナデる。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色
壺 III	e 41	口径19.8	口縁部下端を垂下させて段をつくる二重口縁のものである。 端部は外傾する面を成す。	口縁部内外を横にナデたあと、外面にはヘラ磨きを加える。内面にもわずかにヘラ研磨の痕跡が見える。頸部外面にはヘラ削りの痕が残る。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) (外面) 淡灰褐色 (内面) 淡赤褐色
壺 IV	e 42	口径 7.9	口端部に最大径を持つ鉢形のものである。 口縁部は頸部よりゆるく外反し、中位で屈折をかえて、再び外上方へ外反する。いわゆる「S」字形を呈す。 体部は肩の張らない、最大径を肩部に持つものである。 底部は尖り気味の丸底を押さえつけて平底としたような感を呈す粗雑なものである。	口縁部は内外両面とも横ナデ調整。体部外面は上・中・下位をそれぞれ指で押さえてわずかな面をとる。さらに中位には叩き目の痕跡が残る。最後に下～上へ縦方向のナデ調整を粗く加えたか。内面は上下を指で押さえたあと、ほゞ真横にナデる。体部外面の底部から体部中位までに粘土巻上げ痕を明瞭にとどめる。	(胎土) や・不良 1～2㎜大の砂粒含有。 (焼成) 良好 硬質 (色調) 乳褐色 体部中位から底部にかけて火熱のため一部黒化。
小型丸底壺	e 43	口径 9.2	頸部の屈曲が極めて甘いもので、内面にかすかに稜線を作る。口縁部は外上方へ大きく開き、端部は尖る。体部は肩が張らず、扁平で底部との明確な境がない。	外面は口縁から体部まで、細かいヘラ研磨を施し、口端部を横にナデる。内面は口縁部を横方向の細かいハケ目で調整し、体部を横にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) (外面) 淡黄灰褐色 (内面) 乳灰褐色

			明確な境がない。		
小型丸底壺	e 44	口径 9.2	「く」の字形の頸部より外上方へ大きく開く口縁は、やや内寄気味で、特に端部近くでは内寄度を強める。先端は鋭く尖る。体部は肩の張らないものであるが、比較的深い、中位に最大径を有するものと思われる。	口頸部を内外両面とも横にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 軟質 (色調) 乳白褐色 断面は灰色を呈す。
小型丸底壺	e 45	口径 7.2	口縁部外上方へまっすぐにのびるが、開き具合はあまり大きくない。 体部は中位に最大径を持つと考えられ、口縁部との比率は同じぐらいになる。	口縁部内外は横にナデ、体部はヘラでナデたと思われる。 肩部内面に指圧痕が残る。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 軟質 (色調) 淡灰褐色
小型丸底壺	e 46		口縁部は欠損するが、外上方へ開く比較的短かいものと考えられる。 体部は中位に最大径を有し、口縁部との比率は体部の方が大きいと思われる。	外面は肩部に横ナデ調整を施している。体部中位以下はヘラで浅く削り、中位は指でナデ上げ平滑にする。内面は頸部および粘土ヒモの巻上げ接合面をそれぞれ指圧、またはナデ上げ、そのあと横にナデて仕上げる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 乳白褐色 及び 暗灰褐色
小型丸底壺	e 47		球形の体部に、あまり大きく開かない短かい口縁部をもつものと考えれる。	体部外面を縦方向にハケ目を施し、底部中下位を部分的にヘラで浅く削る。 内面はラセ状にナデ上げる。 内外ともに粘土ヒモの巻上げ痕を残す。	(胎土) 不良 1㎜大の砂粒を多量に含む。 (焼成) や、不良 硬質 (色調) 乳白褐色
小型壺	e 48	口径 6.6	手捏のものと考えられる。丸く屈曲する頸部から短かく外上方へ反る。	内外面ともハケ目調整のあと横にナデる。 内面には指圧痕が残る。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 暗灰褐色
壺	e 49	口径14.4	半球形の体部に丸底と思われるもの。	体部外面は間隔の広い粗いハケ目をほど	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻

			端部は内湾気味だが、ナデにより上方へ立ち上がる。 先端は丸く終る。	こす。端部は刷毛状具により横にナデる。 内面は横にナデるほか、細かい刷毛状具により主として斜目にナデる。	(色調) 乳白褐色 体部下半に火熱のため黒化。
埦	e 50	口径14.6	e 49に比して立上がりの強い縦長のものである。口端は内湾を強める。	体部外面は粗いハケ目調整。口端部は横にナデる。 内面は横にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 外面 灰褐色 内面 乳灰褐色
高杯 I	e 51		支柱部中位でやゝふくらむ。 裾部との屈曲は甘く内面に不明瞭な稜線をとどめる。 端部には内寄しつつ至る。	外面は支柱部付根をヘラで削る。支柱下端から裾部にかけて叩目状の圧痕が横方向に入り、その上から横ナデを行う。内面は付根に絞り目、支柱部中位に指圧痕が見られる。ナデは支柱部を縦に、裾部を横にナデる。 内外両面に巻上げ痕が残る。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色
高杯 I	e 52		支柱部中位がふくらむ。 裾部は外反気味に端部に至るか。	外面は支柱部付根をヘラ削り。以下を縦のハケ目で調整、さらに支柱部下半を横にナデる。内面は右→左へヘラで小きざみに削る。	(胎土) 良好 (焼成) 堅緻 (色調) 淡褐色
高杯 II	e 53	脚径10.4	杯部上半を欠くが、杯部に比して脚部のや、小さなものである。裾部は支柱部よりゆるく屈折し、端部へなめらかに大きく開く。端部近くの内面は平坦になり接地する。 杯部は底部から体部への屈曲が全くなく、丸くつながる。底部の器壁は体部に比して極端に厚い。	外面は杯部を、付根付近より上へヘラ削りを行い、支柱部はヘラナデか粗い研磨のため不整な面がとられる。付根附近は剝落が著しく調整不明。内面は、支柱部を横にヘラで削り、裾部をハケ目調整する。 杯部内面は体部を横にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) やゝ不良 手ざわりがざらつく。 硬質 (色調) 外面 明灰褐色 内面 白褐色
高杯 II	e 54	脚径11.6	支柱部が高く、スマートなもので、裾部	外面は剝落が著しく不明瞭であるが、裾	(胎土) 良好 (焼成) 不十分

			は支柱部よりゆるく折れて、短かく水平に近く開く。	部は横にナデる。 内面の支柱部を横にヘラ削り、裾部を横にナデる。	(色調) 淡赤褐色 裾部内面から外面裾端にかけて火を受け、一部黒化している。
高杯 II	e 55		外下方へまっすぐ開く支柱部と内面に比較的明瞭な稜を持つ裾部との高杯脚部である。 支柱部下位に小孔を1ヶ外から内へ穿つ。	外面には支柱部付根、中位、下位に指圧痕が見え、下位にはハケ目調整も加える。 なお、支柱部にはかすかな稜線が走る。 内面は支柱部を横(左→右)にヘラ削りするが、巻上げ痕がまだ残る。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 淡褐色
高杯 II	e 56	脚径11.4	細身の筒型の支柱部よりゆるく屈折して端部に至る裾部を持つ脚である。端部は丸くおさめるが、内面端部が接地する。 なお、裾部屈折点は内面に明瞭な稜を残す。	外面は全体を横にナデる。 内面は支柱部を上下に分けて横にヘラで削る。 裾部は横ナデ調整である。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 淡褐色
高杯 II	e 57		比較的に細身で中実の支柱部で屈折の柔らかな裾部をもつ脚部である。支柱部下端に小孔3ヶを外から内へ穿つ。支柱部器壁は非常に厚い。	支柱部外面上半をハケ目調整。 その上から支柱全体をヘラ磨き。 内面は支柱部をヘラ削り。	(胎土) やゝ不良 1㎜大の砂粒多し。 (焼成) 良好 硬質 (色調) 淡灰褐色
高杯 II	e 58		細い付根から下方へ開く支柱部。 裾部への屈曲はゆるやかなものと推測される。	支柱部上半をヘラで縦に削る。ド半は所々を指で押さえ、あとは指でナデる。なお、支柱部下半の下地に凹目状の圧痕が残る。裾部屈折部をヘラで縦に削るか。 内面には上半に絞り目が残り、中位より下を横にナデ、下端を下へナデる。屈折部には圧痕が残る。 支柱部には巻上げ痕が見られる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 淡褐色
高杯 II	e 59		やゝ太身であるが、	支柱部外面を縦にヘ	(胎土) 精良

			外開きのあまり大きくない支柱で、支柱部そのものは短かい。裾部の屈折は内面に比較的明瞭な稜を残す。	ラ磨きする。内面は絞り目を残し、下半はヘラで削る。 裾部はハケ目調整を施す。 杯部底部はヘラ磨き。	(焼成) 堅緻 (色調) 淡赤褐色
高 杯 Ⅲ	e 60	脚径12.4	下方へまっすぐに開く太目の支柱部から、鋭く屈折して、「八」の字状に大きく開く裾部を持つ脚である。端部は角ばった面をとる。	支柱部外面は縦にヘラ削り。内面はヘラを細かく回わして削る。裾部は外面は横にナデ、内面はハケ目を縦横に加える。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 軟質 (色調) 淡褐色 裾端部は部分的に黒化。
高 杯 Ⅳ	e 61	脚径 9.8	背の低い、裾部を大きく「八」の字状に開き、端部近くは水に平のびるもの。	外面は横にナデる。 内面は裾部屈折部付近までを横にヘラ削り。以下は横にナデる。	(胎土) 良好 (焼成) 良存 (色調) 乳灰褐色
高 杯 Ⅳ	e 62		「八」字状に開く低い支柱に、底部と体部の境に稜を作る杯部を有するもの。支柱部中位に外か内へ穿つ小孔ニケが見られるが、もともと3ヶと思われる。	外面は付根をヘラ削りして、横ナデ。 支柱部をヘラ磨き。 内面の上半はヘラを細かく回し削り、絞り目を消すが、付根にはまだ絞り目が残る。下半はナデる。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色
高杯杯部	e 63	口径13.2	底部に丸味のある、浅い皿状の杯部である。 端部は外反気味で先端は丸くおさめる。	外面は底部あたりをヘラ削り、体部は指で押さえ横にナデる。 内面は指で押さえ、ハケ目調整を行い、そのあとを横にナデる。	(胎土) 良好 (焼成) 堅緻 (色調) 淡灰褐色
高杯杯脚部	e 64		杯部底面は比較的広く、体部との境界点には明瞭な稜を持つと思われる。裾部は下方へ大きく「八」字状に開く。	外面は付根から杯部底へハケ目を施し、支柱部にはナデて面を取る。 内面は指でナデ下す。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色
高杯脚部	e 65		きわめて細身の小型と思われる高杯である。	外面はナデ調整を行うため、面がとられ、稜線が走る。内面には絞り目が見られる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 淡赤褐色
高杯脚部	e 66	脚径15.2	背の低い裾部で、内弯ぎみに端部に至る。端面は丸味を持つが、	外面は裾部に指圧痕が残り、端面の横ナデは沈線風を呈す。	(胎土) 良好 やゝ砂粒が目立つ。 (焼成) 良好

			幅のせまいヘラ状具で横ナデするため、端面は窪む。	内面は横に細かくハケ目調整し、端部近くを横にナデる。	(色調) 淡褐色 裾端部内外は火熱のため一部黒化。
高杯脚部	e 67	脚径 9.8	小型の高杯の裾部。支柱部との屈曲は明瞭な稜を残す。端部へは「八」字状にまっすぐ伸びる。	外面の裾端部近くは指で押圧、のち横にナデる。内面の支柱部はヘラで横に削り、裾部は横ナデを行う。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 乳褐色
高杯脚部	e 68	脚径16.0	や、外反気味になだらかに開く裾部である。 端部は少し尖る。 また上端はや、内弯のきざしを見せる。	外面は横にナデるが、所々を幅のせまいヘラ状具でナデるため、その部分のみ段状に窪む。 内面は細かいハケ目の上をナデ調整か。	(胎土) 精良 (焼成) や、不十分 (色調) 乳褐色
器台受部	e 69	口径15.7	ほぐまっすぐに外上方開く受部の口端に断面三角形の粘土帯を貼りつけ、下垂させ、幅のある端面をつくる。 壺口縁かも。	受部内外面とも細かい縦ヘラ研磨を施し、外端面には波状文を描く。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色
器台脚部	e 70	底径24.4	大きく外下方へ開く脚部は端部近くでやや、内向気味になる。 端部は切り落し、角ばった面を取る。	外面はハケ目調整のあとナデで仕上げる。指圧痕も残る。 内面もハケ目調整と指圧痕が見える。	(胎土) 精良 (焼成) や、不十分 (色調) 淡赤褐色
器台受部	e 71	口径10.4	頸部から外反する受部は上半ではや、内弯気味で、外端面は上方に立つ。	内外両面ともヘラ研磨のあとナデで仕上げる。	(胎土) 精良 (焼成) や、不十分 (色調) 淡赤褐色 断面は黒灰色
器台脚部	e 72		内面に稜を成し受部へと外反する脚部。「八」字状に開いて裾部へ伸びる。支柱部中位に小孔二ケを外から内へ穿つ。	外面は細かい縦方向のヘラ研磨を行う。 内面はヘラで横に削る。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 外面 乳灰褐色 内面 暗灰褐色
底　部	e 73	底径 6.2	安定した平底の底部から胴部最大径へ大きく外方へ伸びる壺の底部と考えられる。	外面は底から胴へヘラで削り上げる。 内面はハケ目調整を行う。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好 軟質 (色調)外面 淡黒灰色 内面 淡赤褐色
底　部	e 74	底径 3.7	安定した平底の中央が凹状に窪んだ上げ	外面下端に指の押圧を加え、そのあとハ	(胎土) 良好 1～2㎜大の砂粒含

			底の猿の底部と思われる。	ケ目を縦に施す。 内面も下端を指で押さえて、そのあとハケ目を横に回す。	む。 (焼成) 良好 (色調) 淡茶褐色 外面煤付着
底　部	e 75	底径 6.0	や、上げ底気味の底部である。 端部は丸味を持つ。	内外両面ともハケ目調整を行う。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調)外面 淡灰褐色 内面 灰白褐色
底　部	e 76	底径 3.2	安定した平底の外から内へ孔を穿った甑である。胴部へはやゝ外反気味に伸びる。器壁はきわめて薄手である。	外面はハケ目を斜行させたあと、ヘラで深く棒状に切り取る。内面は縦にハケ目を行う。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 外面 淡褐色 内面 淡赤褐色
底　部	e 77	底径 4.2	安底した平底の底部に一孔穿った甑である。胴下半はやゝふくらみ気味である。穿孔は内から外へである。	外面は指による圧痕以外に見られず。 内面はハケ目の痕跡が見られる。	(胎土) やゝ不良 1～2㎜大の砂粒多し。 (焼成) やゝ不十分 (色調) 淡赤褐色
杯　身 (須恵器)	e 78		たちあがりは内傾し、受部は外上方へのびる。	内外を横にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 暗黒灰色 外面には自然釉が付く。
土製支脚	e 79	脚径11.0	ラッパ状に開く脚の上半をゆるく折りまげたものである。 器壁は厚く頑状である。 背面下端を円形にくり抜き、透しをつくる。	外面は前面に叩目が残り、背面には部分的なヘラ削り痕が見られる。そのあと全面に指でナデ調整を加えるが、不整いな面が形成されている。内面は上半に一条の絞り目が残るほか、指圧、指ナデを加え、そのあとナデ調整する。下半はナデだけのようだが、一部擦痕やヘラがあたった痕があり、ヘラ削り状の調整を行った模様。	(胎土) 良好 やゝ、砂粒を含む。 (焼成) 堅緻 (色調) 淡褐色 内外ともに部分的に火熱を受けて黒化。
土　錘 (土師質)	e 80	径3×3	ほゞ球形を呈する。 中央部に円孔を貫く。	外面はヘラで強くナデるのか、擦痕が残り、この部分が不整いな面を呈する。	(胎土) 不良 1～2㎜大の砂粒多し。 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色

旧河道上層出土土器

甕	e 81	口径16.4	丸味を持って屈曲する頸部から外反した口縁の中位における屈折は丸く甘いが、上方への立上りは強い。	頸部内面に指圧痕が見られるほかは、内外とも口頸部を横にナデる。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 黒灰色
壺	e 82	口径16.8	口縁上半部のみの破片である。頸部からの外反はゆるく大きい。端部は尖る。	外端部近くを指圧するほかは、内外とも横ナデ。	(胎土) 精良 (焼成) やゝ不十分 (色調) 赤褐色
高　杯	e 83	脚径11.4	細身の筒状の支柱部より鋭く屈曲して、低く外方へ開く裾部を有す脚である。	外面は裾部に指押さえをするほか、支柱部はナデ調整による面が見られる。 内面は絞り目をヘラ削りで消す。	(胎土) 不良 1㎜大の砂粒多し。 (焼成) 不十分 (色調) 明赤褐色

S－3　SK－1出土土器

甕	e 84	口径18.6	口縁中位の屈曲は丸味を持つが鋭い、上端へののびは短く、端部は平坦な面を成して外へ突き出る。	内外両面ともナデ調整。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 茶褐色 外面には煤付着。
高　杯	e 85		短い支柱部より伸びる裾部は、ゆるく外反して大きく開く。杯部の外反度は比較的強く水平に近い。脚と杯部との接合は脚部へ杯部を挿入する。付根付近は粘土を補充する。裾部中位に円孔二つが残存。	脚部外面をハケ目調整した上から、縦のヘラ研磨を行う。 内面は指圧痕以外は不明。	(胎土) 良好 (焼成) やゝ不十分 軟質 (色調) 淡赤褐色

S－5　P－5出土土器

鉢	e 86	口径14.2	頸部は内外に明瞭な稜を残して「く」字状に屈曲。口縁部はやゝ内弯気味に外上方へまっすぐ開くもので、端部へ近くなるほど器壁は薄くなる。端部は幅のせまい面をからくも取る。体部は肩が張らず、底部との区別の不明な扁平なものである。	口縁部外面は斜行するヘラ研磨を行い、端部は横ナデ。体部は横方向のヘラ研磨。内面は横ナデのあと全面を斜行するヘラ研磨を施す。但し、肩部内面のわずかな幅は横ヘラ研磨である。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 淡灰褐色 内面に一部火熱を受けた痕をとどめる。

S－6　SK－2出土土器

手焙形土器	e 87	頸部径14.2	胴部の張った浅鉢の上にドーム状と思われる。覆いを接合したもの。	覆部外面は全体をハケ目調整したあと、ヘラ描きの沈線上下二段に引き、その間と覆部上位に貼付けた突帯の間をヘラ描きの斜格子文を施す。また覆部下端にも突帯を貼付し、その上に刻目状の押圧を加える。鉢部外面は頸部にハケ目調整痕が残り、そのあと口頸部を横ナデ調整する。そして最後に肩部附近を櫛状具による条痕を施す。内面は覆部は斜上方へ、板状具で強くナデる。浅鉢部は口頸部を横ナデ調整する。	（胎土）良好 細砂粒含む。 （焼成）良好 （色調）淡灰褐色
高　杯	e 88		つくりの小さな高杯の支柱部、裾部は背が低い、大きく開く手のものと考えられる。支柱部は充実している。	外面を縦に細かくヘラ磨き。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）暗灰白色
器　台	e 89	口径 9.6	いわゆる小形器台である。受部は外上方へ短く大きく開く。端部は外傾する面を取る。	内外両面とも縦にヘラ磨き。 端部は横にナデる。	（脚土）精良　胎 （焼成）良好 軟質 （色調）乳白褐色 外面は一部赤褐色を呈す。
底　部	e 90	底径 5.2	ぶ厚い安定した平底の底部だが、胴部へは外方にやゝ強く屈曲した感じで伸びる。底部のわずかな上げ底は指で押さえたものによる。	外面にはハケ目と指圧痕、内面にはハケ目が見える。	（胎土）良好 （焼成）良好 軟質 （色調）乳灰褐色

S－9　SE－1出土土器

甕	e 91	口径13.0	頸部の屈曲は鋭くほゞ水平に外反し、ただちに屈折して外上方へのびる口縁部となる。 端部は平坦な面を形成する。 肩部は張らず、ナデ肩である。	外面は全面を横にナデたあと、肩部以下をハケ目調整し、ヘラで直線文を口縁部、肩部に描き、さらに斜行する刻目状のヘラ描きを口縁部・肩部に施す。内面は頸部の指圧痕以外は口縁部の横ナデ調整のみである。	（胎土）良好 細砂粒を少し含む。 （焼成）や、不十分 （色調）乳褐色
底　部	e 92	底径 5.8	胴下部が張った壺の底部か。胴下部よりや、突き出ており、安定している。	突出した底部の外面を指で押さえ、底部と胴下部両方をハケ調整する。	（胎土）良好 （焼成）や、不十分 （色調）淡褐色

S－13　SD－1出土土器

甕	e 93	口径10.3	短かい口縁部が鋭く二重に屈折する。 端部は水平に外方へ突出し、平坦な面を呈す。	内外両面を横ナデ調整する。	（胎土）良好 細砂を含有。 （焼成）良好 （色調）淡褐色 外面に煤が付着。
甕	e 94	口径17.2	丸い屈曲の頸部から大きく外方へ開く口縁を持つ。 端部は丸くおさめる。 肩は極端なナデ肩である。	口頸部の内外を横ナデ調整し、頸部を刷毛状具で掻く。	（胎土）不良 1～2㎜大の砂粒含む。 （焼成）や、不十分 （色調）淡褐色 口端部は一部火熱を受け黒化。
甕	e 95	口径 8.1	「く」字状に屈折した頸部は内外面に鋭い稜を作る。 口縁部は外上方へまっすぐ伸び、端部は丸くおさめる。	頸部に押圧を加え、ハケ目を細かく施したあと横ナデ調整する。内面は口縁部をハケ目調整。体部はヘラ削りを横に施す。	（胎土）良好 大粒の砂粒を僅かに含む。 （焼成）堅緻 （色調）淡褐色 外面は煤が付着。
壺	e 96	口径11.8	細く引締った頸部はゆるく「く」字状に屈曲、外上方へ反り気味にのびる口縁部につながる。	内外両面とも口縁部全面を丁寧にハケ目調整する。	（胎土）良好 細砂を多量に含む。 （焼成）や、不十分 （色調）暗赤褐色 内外とも火熱を受けるが、外面はこのためほとんど黒化する。

鉢	e 97	口径15.6	頸部の屈折は外面は甘いが、内面は鋭く明らかな稜を残す。口縁部は外上方へ大きく開き、端部は比較的鋭く立って面を取る。体部は肩が張らない扁平なものだが、底部はやゝ尖り気味になるか。	外面は細かなハケ目を雑に施したあと横にナデた模様。なお口縁部には細かいハケ目状の調整痕も下地に見られる。内面は口縁部を横ナデ調整。体部はヘラ調整痕が残り、ナデ調整も見られる。	(胎土) 不良 1～2㎜大の砂粒を多く含む。 (焼成) やゝ不十分 (色調) 外面 乳灰褐色 内面 赤灰褐色
高　杯	e 98		細身の長い支柱部から裾部はゆるく大きく開くものと思われる。杯部欠損。	支柱部付根を下～上へヘラ削り。下半部はヘラでナデて仕上げるためか、稜線が縦に走る。内面には巻上げ痕が残る。下半は横にナデる。	(胎土) 良好 (焼成) やゝ不十分 (色調) 淡褐色
底　部	e 99	底径 4.4	安定した平底の底部をヘラ削りを行って、わずかな上げ底とする。胴部との境界はやゝ稜を見せて屈曲する。	外面には指押圧とハケ目調整、内面にもハケ目を施したと思われる。	(胎土) やゝ不良 (焼成) やゝ不十分 (色調) 茶褐色

S－13　SK－4出土土器

甕	e100	口径16.8	ゆるやかに弓なりに外反する口縁の端部は尖る。	口縁部上下半に指圧を加え、ハケ目調整を施したあと横ナデ調整。内面にも指圧痕とハケ目調整が加えられる。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好 (色調) 茶褐色
甕	e101	口径10.6	「く」字状に屈曲する頸部は外面に比較的明瞭な稜を成す。口縁部は外上方へ開くが、やゝ屈曲して端部に至る。端部は丸くおさめる。体部はナデ肩である。	口縁部は内外を横ナデ調整。体部は外面にハケ目を加え、内面には指圧痕が見える。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 外面 淡黒灰色 内面 淡灰黒色
壺	e102	口径18.2	「く」字状に鋭く屈曲する頸部から外上方へ大きく開く口縁部は、端部近くでやゝ立上がる。体部の肩の張りは比較的大きい。	口頸部に縦のハケ目調整のあと横にナデる。内面、口縁部は横ナデ。体部は指圧痕、ハケ目調整のあと横にナデる。	(胎土) 良好 1㎜大の砂粒あり。 (焼成) やゝ不十分 (色調) 乳褐色

E区出土土器

高　杯	e103		細身の筒状の開きの小さな支柱部である。	外面は付根から上半部までを斜行するハケ目で調整。その上から縦の細かいヘラ磨きを施す。なお屈曲部近くの下端部に叩目状の圧痕が残る。内面は絞り目のほかは明瞭でない。	(胎土) 精良 (焼成) 良好 (色調) 淡茶褐色 E８区ピット内出土
器　台	e104		「八」字状に大きく開く脚部に、外上方へ大きく開く受部が付く。支柱部下位に円孔２ヶ残存。 外から内へ穿つ。	外面は杯部底を指で押圧、付根付近を横に削るか。内面は脚上半を指でナデ下ろし、以下をハケ目調整する。	(胎土) 良好 １～２㎜大の砂粒含む。 (焼成) やゝ不十分 (色調) 赤褐色 E７区ピット内出土
小　瓶 (須恵器)	e105	高台径4.2	肩部の張った体部の下半は直線的にすぼまって底部に至る。短かいやゝ開き気味の高台は接地面が段を成し、内面側のせまい面で接地する。	体部内外両面とも横ナデ調整。 高台の底面及び上底部も丁寧にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 暗灰色 条里溝出土
皿 (施釉陶器)	e106	口径13.6 高台径6.6	体部はやゝ内弯しつつ外上方へ伸び、端部近くでゆるく折り曲げ短かく外反させる。 端部は丸くおさめる。 高台は糸底で貼りつける。 やゝ外下方へふんばるもので、外面先端は稜を成して内側へ屈曲する面を取る。	内外とも高台部を含めて美しく横ナデ調整。 高台貼付部までの器体外面と体部内面に見られる灰釉は塗掛によるものである。	(胎土) 精良 水簸によるか (焼成) 堅緻 (色調) 明灰白色 但し、施釉の部は内面は淡緑灰色を呈し、外面は白色を呈すが、外面はさらにその上に鉄分が付着し、朱色となって斑状にふき出る。なお、底部両面に環状に釉が残り、高台接地面には釉の付着が見られるところから、重ね焼を行ったものと思われる。　条里溝出土

S－7　SH5出土土器

甕	e107	口径14.2	頸部より外上方へ伸びる口縁部は中位で上方へ屈曲し、引続き端部を外方へ鋭く摘み出すため、明瞭なS字形を呈す。口縁上端は平坦な面を成す。	口縁部内外両面を横ナデ調整。	(胎土) や、不良 1～2㎜大の砂粒多し。 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色 口縁外面には煤が付着。
底　部	e108	底径 4.4	高台風のわずかな上げ底の底部から中位に最大径を持つと思われる胴部へ大きく開く。	胴部下半内外両面をハケ目調整したあと、ナデ調整を加えて仕上げる。	(胎土) や、不良 細砂粒を多量に含む。 (焼成) や、不十分 (色調) 乳白褐色 内外両面とも一部黒色化

第4章　秦荘町上蚊野古墳群

1．はじめに

当古墳群の調査は県営ほ場整備に伴い、事前に発掘調査を実施したものである。当初はほ場整備対象地区の18基全てが記録保存との強い地元の要望であったが、戦後間もなくまで298基からなる県下でも屈指の大古墳群であったが、現在では20数基が残されているだけであるため地元および町関係者の方々と協議を重ねた。この結果、地元上蚊野地区の方々の多大な譲性のもとに、当古墳群中最大規模の百塚を中心に10基の古墳が、以後古墳公園として保存されることとなった。なお、残り８基については当初51年度完掘の予定であったが、内２基はほ場整備工区の変更と諸般の事情により52年度実施としたため、昭和51年度は６基について昭和51年７月１日～12月10日までの間発掘を実施した。この報告は、その概要である。

調査は県教育委員会文化財保護課技師近藤滋が担当し、主任調査員に滋賀大学助教授林紀昭氏を願い、田中政明（滋賀大O.B.）上田完二(龍谷大)、岩崎茂(京都産大)、山口利彦、藤川清文、吉井源三郎、西田幸男、三輪芳子、矢倉裕子、小山昭子、松原きよ子氏等の他滋賀大学歴史学教室の多くの方々に協力を得た。また、地元ほ場整備組合長や区長をはじめ、上蚊野地区の方々、そして調査全般に渡り種々御迷惑をお掛したにもかかわらず、終始協力頂いた町教育委員会北川嘉夫、町耕地課山田清孝両氏等にも、多大の協力を得たことをここに記して謝意を表したい。なお、当報告書の遺物実測には松沢修氏の手を煩わせたことを明記しておく。

2．位置と環境

当古墳群は愛知郡秦荘町上蚊野地先の、東に名神高速道路、西に国道307号線、南に宇曽川の３本の線に囲まれた地域に位置し、広く見ると、蚊野外古墳群の196基と合わせて、金剛寺野古墳群298基を形成していた（第１図)。しかし、この県下屈指の大古墳群も戦後の食料難という国民的欲求の前には、何の力もなくブルドーザーの犠牲になり、今日では、その一割にも満たない20数基が残されているのみであることは前述のとおりである。

この大古墳群は、その立地を宇曽川の扇面に蚊野外集落の付近まで約1.5kmに渡り形成され、今回の調査地は、この金剛寺野古墳群の東端、つまり宇曽川扇状地の扇頂部近くに位置し、平野部に有りながら標高160ｍ～170ｍの湖東平野の最奥であるため、晴れた日などの眺望は湖西方面まで見える。

付近の遺跡については、その多くが南から北進してくる愛知川扇状地の扇側部に位置するものが多く後期古墳群と奈良時代寺院跡が目立っている。

まず、当調査地の宇曽川対岸の祇園東古墳は、名神高速道路建設に際し２基の内１基が

西田弘氏により調査されている。そして、この古墳が、いわゆる竪穴系横口式石室であったことは衆知のことである。また、湖東町小八木の春日神社裏で発見された小八木廃寺の鬼板は、その容貌が我国のものと異なり、外来の要素を持つもので、さらに、妙園寺跡、軽野寺跡と同系統の軒瓦を出土し特色を示している。これらのことは現在の町名からも察せられるように秦氏等帰化系豪族の本貫と考えられ、事実文献にも郡大領依智秦氏の名が多く他に地名にも蚊野・軽野・安孫子等が有り、早くから京都太秦とならんで秦氏研究の上では注目された区域である。

3．遺　構

今調査では前述のとおり6基の古墳を調査した。調査前の観察では何れも墳丘が1m前後で遺存状態は良くないと思われ、基底石と側壁数段との予想であったが、6基中4基がいわゆる階段を有する竪穴系横口式石室と呼ばれるタイプに入いるもので、このため玄室床面は周辺の現地表よりかなり底く、かつ全体が小規模石室に作られており、天井高は約1.7m程のものであったため予想外に遺存状況は良好であった。また他の2基は、普通の横穴式石室で、この方は大岩を用いていることもあってか破壊が著しく、予想通り基底部と、一部側壁は二段目までの状態であった。

以上大別2タイプの石室があることが今回の調査で明らかとなり、しかもこれらは隣接した形で並存するため、時期が異なるのか、被葬者の性格が異なるのか詳細は不明であるが、今報告では、そのタイプの代表を取り上げ各々の特色と若干の疑問点に触れるだけの概報とし、全容は52年度調査分と合わせ検討報告したい。

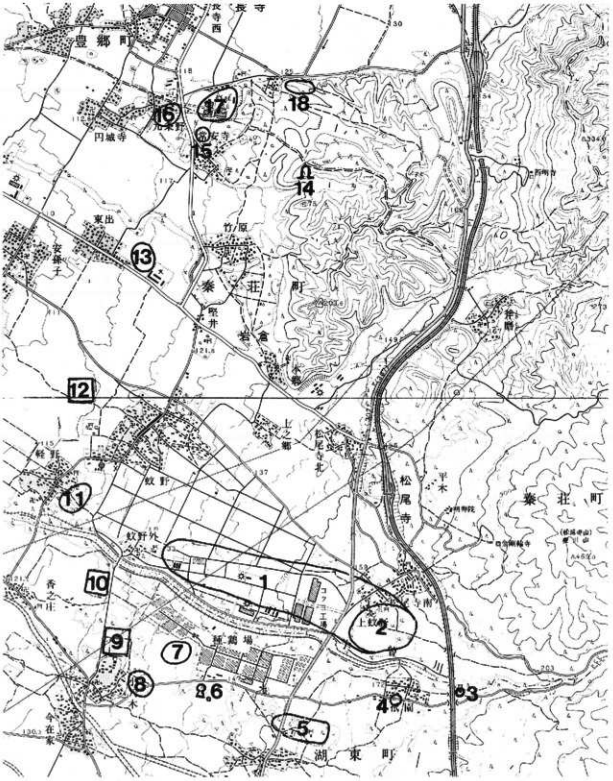
まず一般的なものから述べると、このタイプのものは3・4号墳の2基である(第2図)。掘方についてはこの2基のうち3号墳は精査したが、セクションでは何となく分けられるが平面では、未熟ゆえか検出できなかった。4号墳では、奥壁と両側壁の一部で検出されたが、玄門部以前は削平されているため、その全容は不明であるが、一般的なものと思われる。

また、壁材は大型のものを用いており割石もある。奥壁は高さ2m前後のものとこれよりやや小型のものの2枚で縦置に基底石を形成し、側壁基底石は横置している。また3号墳では左に片袖を持ち袖石は立石としている。

床面については3号墳は盗掘のため不明であるが、4号墳はいづれも河原石であるが5cm前後の小礫と10cm×20cm前後の扁平石を用いて敷石を形成している。ただし、敷石下方からの遺物出土が多く、また雑であるため本来の状態とは思えない。

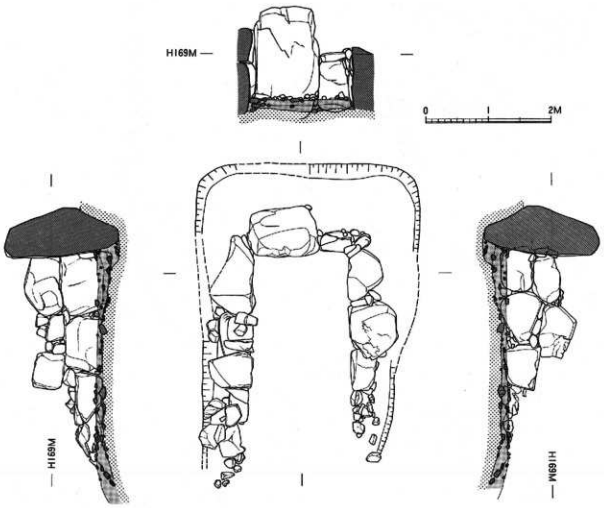
以上が一般的なタイプの状態である。

次に、いわゆる竪穴系横口式石室の状態であるが、1・2・5・6号がこのタイプであ



第1図　遺跡位置図

1．金剛寺野古墳群　2．上蚊野地区　3．祇園東古墳群　4．祇園古墳群
5．平柳古墳群　6．小八木東古墳　7．木戸口遺跡　8．小八木古墳群
9．小八木廃寺　10．妙園寺遺跡　11．正境遺跡　12．軽野(塔ノ塚)遺跡
13．南深田遺跡　14．高坪古窯跡　15．大塚古墳　16．常安寺北遺跡
17．九条野古墳群　18．西ケ丘古墳群

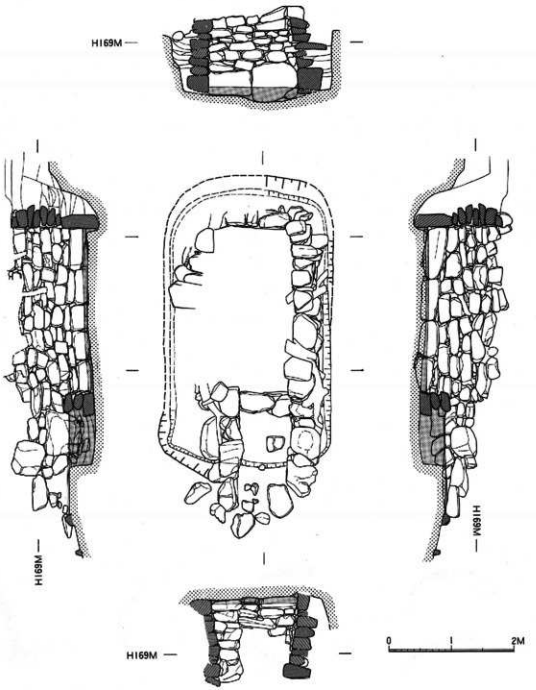


第2図　4号墳石室実測図

る。ただ、中には6号墳の様に、明確には段と言えるかどうか、むしろ、一般的な古墳に時折見られる敷居石として見ることも出来るが、全体の作りとしては、このタイプに入いるものとして扱った(第3図)。

掘方であるが、その有り方には特徴があり、玄室と階段部を含む形でまず掘り、その後羨道部掘方を掘る2段階の作業を行なっている。このことは玄室部から階段部にかけての構築と羨道部の石室構築が別であることを明確にしており、実際、石積みの点で明僚な積み違いがあり、羨道部は一般的に雑に積まれている。また、この掘方は、階段が5号墳の様に玄門部に位置していても、2号墳のように羨道部中央に位置していても、前述の通り掘られている。

次に壁材は川石の細長く1人で持ち上がる程度のもので、小口面が比較的矩形を呈するものを用いて、小口積みを行なっている。ただ時期の若干下がるものには、小口面の形にバラエティーがあり積みも雑である。また奥壁基底石は横置きされているが、これも時期が下がると縦置きが出てくる。羨道部の構築法は玄室部と違い、階段以降の掘方内は縦置



第3図　5号墳石室実測図

きの基底石で足を固め、二段目からは横置きとなり、羨道掘方部以降は基底石から横置きとなっており、玄室側壁とは様相を異にしている。なお5号墳以外は袖石を立石とし、袖は左に作られている。

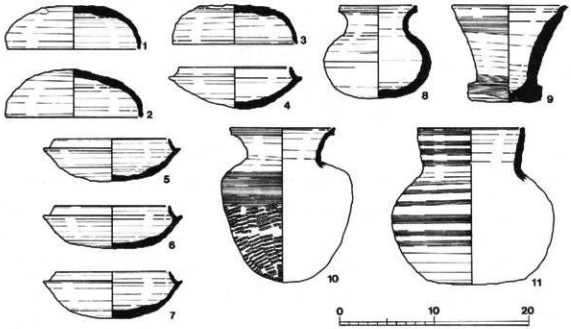
床面については、2号・6号に敷石が認められたが、1号・5号には認められなかった。

最後に2号墳では一部天井石が残されており玄室床面からの高さは約1.7mを計った。また1号墳においても玄室側壁は約1.8mの高さで遺存していた。なお、玄室床面と羨道床面には0.5～0.6mのレベル差が両墳とも有る。

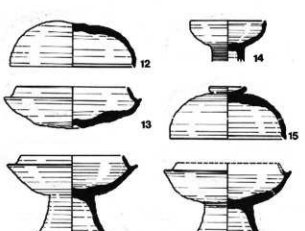
4．遺　物

今調査では6基中5号墳のみが、その石室上に径60～70cmの松の大木が2本あったためほとんど近年の盗掘に会わず、当初調査すら出来るかどうか疑問で有った程であるが、反面多くの遺物が検出された。その大部分は須恵器で、他には刀子1、平根鏃2、黄色ガラス小玉1だけであった。なお、当墳の墳丘外に土坑があり、その内より須恵器坏身、短頸壺等と伴に銀環1が出土している。これは、その状態から見て、墓前祭というよりは追葬の際に第1次被葬者の副葬品を整理したためのものと考えられる。また、玄室内出土の須恵器については、小形高坏や提瓶、台付有蓋短頸壺など特色のある遺物が含まれている。

次に他墳の遺物を概略列記してみると1号墳も比較的まとまって遺物が出土しており、特に袖部に有った一括の完型遺物は型態に癖があり、地元窯の産と思われる。2号墳では、坏蓋身と直刀片が出土しただけである。なお当墳も墳丘前提より短脚高坏が検出されている。この場合は或いは墓前祭のようなものに用いられたとも考えられるが、主体部内より出土の遺物より、時期的には上げるものである。3号墳については盗掘が著しく直口壺が一点検出されただけである。次に4号墳は敷石が残されているにもかかわらず床面の荒れは激しく、出土遺物は皆細片で出土している。ただ、黒色土器碗が比較的良好な形で出土している。これは追葬というより、平安時代後期に石室を他の目的で使用したものと考えられる。なお当墳からは金環3個が出土している。最後に6号墳であるが、これも坏蓋身を各1点出土しただけであった。

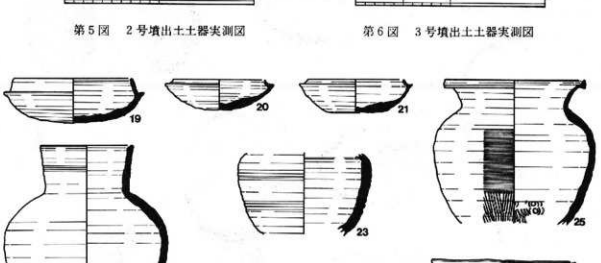


第4図　1号墳出土土器実測図



第5図　2号墳出土土器実測図

第6図　3号墳出土土器実測図

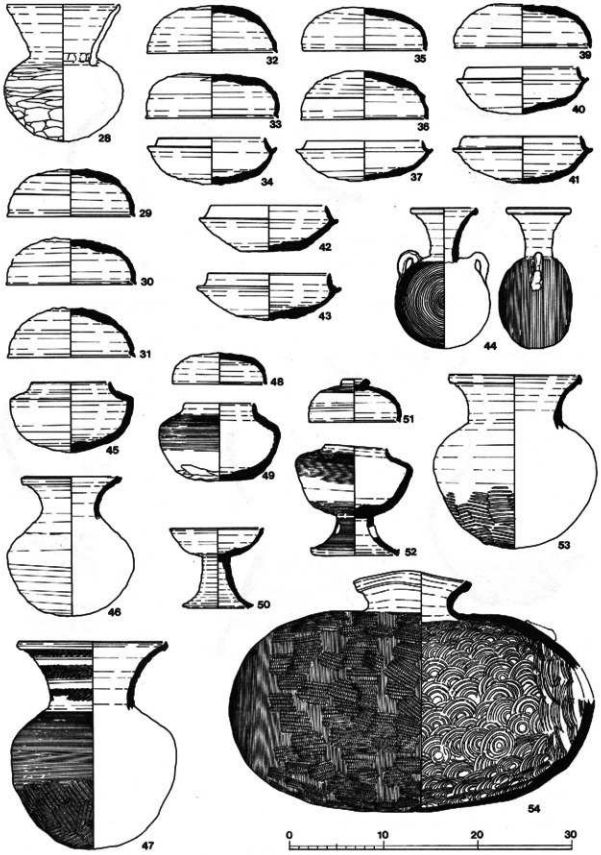


第7図　4号墳出土土器実測図

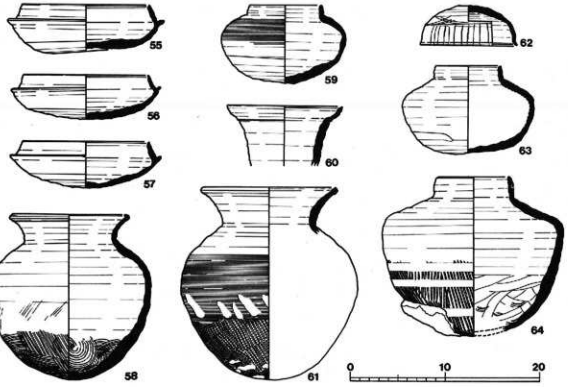
5．ま と め

以上、今調査の概要の概要について述べて来たところであるが、その詳細報告は昭和52年度調査予定の残り2基を含め改めてすることとし、ここでは、いわゆる竪穴系横口式石室で気付いた若干の事について述べ、まとめに変えたい。

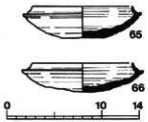
この竪穴系横口式石室については、県下でも概に数ヶ所確認されていることは衆知のことである。例えば先述の祇園東古墳、安土町竜石山古墳、竜王町三ツ山古墳群、水口町波



第8図　5号墳出土土器実測図



第9図　5号墳出土土器実測図



第10図　6号墳出土土器実測図

濤ヵ平古墳等である。そして県外ではというとその資料は少く、北九州地方に集中するだけで、他は有っても1基から数基程度である。この様に見ると近江はその分布、数から特異な存在となる。ただ、北九州方面でのそれは5世紀中葉頃に発達したもので、さらに、その源泉は朝鮮半島にあると水野正好氏や中谷雅治氏た述べられている。しかし、北九州地方では、この竪穴系横口式石室の以降に一般的な横穴式石室が流行して来ており、同時に畿内方面等でも流行し、6世紀代に続くのである。つまり、近江での竪穴系横口式石室の流行については、その中間に一般的な横穴式石室の流行が有り、かつ九州から近江までの間は、この種石室がほとんどなく、まして近江で、この種石室が築かれたのは6世紀中頃であり、九州のそれと約1世紀の時間差がある。そして近江での、この種石室の構造は、築造法において大きく異なるが、その形態は一般的な横穴式石室に近いことがわかるのである。この様に見て来ると、この種石室は特異なものであり、確かに分布が帰化人とのかかわりの地に有るが、一概に、その被葬者を帰化系氏族とするのは早計ではなかろうか。ただし、半島にも、その後変形し近江等で確認されているものと同様のものが確認され、かつ、6世紀中頃に直接近江に新たに帰化した人々がいたとするならば別である。また、我国の分布状態から考えたとき、仮に帰化系氏族のものが被葬者であったとすれば、一般

的横穴式石室の影響を受けたのちもその系譜の人々が細々と、その築造法を守って一世紀維持し、近江の地で花咲くこととなるであろうか。このことについては一般的な横穴式石室と並存することにおいても疑問があり、また、当古墳群中、盟主となるような大型墳、例えば百塚等については横穴式石室である。今後の課題としてここで止めておきたい。

次に石室の特徴というか、石積みの石材等については、各々築造地の周辺から材料を集めると思われるので特にどうこうはないが、副葬品の中に若干の特質が認められる。それは須恵器の中に小型品が多く、特に台付有蓋短頸壺や小型高坏、小型提瓶などが近江の場合認められることである。

最後に5号墳の構築法で気付いたことであるが、第3図を改めて見て頂くと、側壁の中程に左右壁とも縦に積み違いの線が認められる。つまり普通は左右・前後の石と組み合い、石と石の隙が直線的にそろわず、アミダクジの様になっている。これは明らかに積み人が異なるからで、1人の作業量と思える。これと同様に羨道側壁の積みが異なることは先述のとおりである。つまり一方の側壁では延3人の作業が考えられる。これに奥壁を入れると壁だけでは延7人の作業量となる。そして天井であるが石室が比較的小型であるため小型の天井石を3～4枚架している。実際発掘の際、石室内に落ち込んだ物をチェンブロックで引き出した後、丸太のテコで移動したが、3人の男が居れば以外と簡単に移動出来た。この様に見ると、3号・4号等の大型石材、といっても50～60cm角程度のものが多いが、これらを築くことは別として、他の竪穴系横口式石室を築くには、墳丘も小さく径10m前後であり、石材は宇曽川に無数にあり、運搬の距離もほとんどないことなどから考えると以外と簡単に出来ることが判明した。なお石室の壁積みにあたって、一方の側壁で3名の仕事としたが、これは各人が各々の分担分を好き勝手に積んだものではなく、5号墳の階段部の写真を見て頂ければ良いが、羨道側壁と袖、玄室側壁にかかる状態で、コーナに斜めにかけた石が有るが、これと同様に、両側壁と奥壁の接点にも同様手法で斜めの積みが認められる。これは明らかに両者の間で高さの積み揃えが有り、壁の高さを確認しながら作業をしたものと思えるのである。

以上、取留めのないようなことを長々と記したが、これでまとめに変えたい。

（近藤　滋）

第5章　高月町井口遺跡

井口遺跡

1．はじめに

本報告書は、高月北部地区井ノ口第２工区の県営ほ場整備事業に伴う事前調査の成果である。本調査は、県耕地建設課の依頼により、7,500,000円を費して実施した。調査及び整理業務参加者は次の通りである。

林純、川上真成、阪口勝彦、藤村善嗣、芳村高史、岡井誠、飯野清志、南部基、鈴木俊則、曽根秀夫、菅井彰夫、山岡一郎、岡井正、三宅憲明、石本好典、鈴木泰、宮崎雅美、木村昌義、黒田　均、垣村俊夫、上羽基之、吉元達成。

なお、本調査の指導には滋賀県教育委員会文化財保護課　技師　田中勝弘があたった。また、高時小学校笠原猛治、高月中学校山崎七郎、虎姫小学校野沢剛、片岡小学校杁沢成亘、の４教諭には調査に参加し、協力していただいた。

本報告書の本文は田中が執筆し，製図、作図は上記の調査参加者の協力によるものである。

最後に、当調査の便宜をはかっていただいた、高月町教育委員会、井口区の方々、又、東阿閉、西阿閉、保延寺、持寺、雨森の方々には、遠方ながら作業員として参加していただいた。記して謝意を表します。

2．位置と環境（図１）

湖北平野は、余呉川、高時川、姉川、天ノ川等諸河川によって形成された広大な沖積平野である。この平野北部は、主として、高時川及び余呉川によって形成されるが、高時川以東は日高山から山田山、小谷山が大きく張り出し、余呉川西方は賤ゲ岳から山本山に至る地累状の丘陵があって、その沖積作用は両河川にはさまれた範囲に限られ、南北に細長い平野となっている。また、余呉川が、木ノ本町黒田附近で平地にぬけ出た後、平地に横たわる湄出山によって西方に流れを変え、地累状山丘の裾部に沿って南流するため、その沖積作用が小さくなり、湖北平野北部の形成は、主として高時川に負うところが大きい。このことは、等高線が、高時川が平地にぬけ出る附近を基に、南西方向に張り出す扇形となっていることで明らかである。等高線をさらに微細にみれば、標高 110m等高線までは比較的ノーマルなカーブを描いているが、以下では摺曲しており、高時川の諸支流が南西方向に流れて、自然堤防を形成しながら沖積作用を繰り返していた様子がうかがえる。

井口遺跡は標高 111m附近にあり、高時川が平地にぬけ出す附近より南西方向に 1.5km、高時川より西方 0.5kmの位置にある。等高線は遺跡附近で最もよく張り出していて、その立地が微高地上にあることを示している。

現在は、遺跡西側に国道８号線、国鉄北陸本線があって幹道となっているが、福井県武生に発し、県内に入って余呉川に沿う北国街道は、木ノ本町に入って余呉川と分かれ、高

第１図　主要遺跡分布図

１．法光寺遺跡　２．石作遺跡　３．大雄堂・千平遺跡　４．西山古墳群　５．西山山頂古墳群　６．小山古墳群
７．中居谷遺跡　８．赤尾古墳群　９．瓢箪塚古墳　10．幾頭塚古墳　11．大海道遺跡　12．井口・井口大満宮遺跡
13．柏原遺跡　14．高月遺跡　15．兵主神社古墳　16．大将軍古墳　17．生塚古墳　18．姫塚古墳
19．父塚古墳　20．円通寺遺跡　21．大将軍塚遺跡　22．里の内遺跡　23．寺山・宮山古墳群　24．山畑古墳群
25．西野古墳　26．　27．古保利古墳群　28．小倉遺跡　29．大安寺遺跡　30．満願寺遺跡
31．若宮山・ゴンベ穴古墳　32．尾上浜遺跡　33．尾上遺跡　34．今西湖底遺跡　35．今西遺跡　36．早崎湖底遺跡
37．涌出山古墳群

月町に入って高時川の西岸を通り、浅井町、山東町を通って関ヶ原に至る北国脇往還道と結ばれており、これが古代よりの幹道であった。北国脇往還は現在の井口集落内を通っており、従って、井口遺跡はこの幹道の西側沿いに位置することになる。

井口遺跡近辺には、131棟以上の竪穴式住居跡が検出された保延寺大海道跡が北東500m程のところ、北国脇往還道の東側にある。およそ、奈良時代を中心とし、古墳時代前期から平安時代にかけての集落跡があり、奈良時代の軒瓦を出土した瓦溜りを検出しているところから、附近に寺院跡の存在することが推定された遺跡である。井口遺跡の南方 500m程のところでは、灰釉陶器、緑釉陶器等平安時代遺物を散布する柏原遺跡がある。これも北国脇往還道の西側沿いに位置し、従って、高月町内を通る北国往還環道沿いには、奈良～平安時代を中心とする遺跡が濃密に分布しており、注目されるところである。

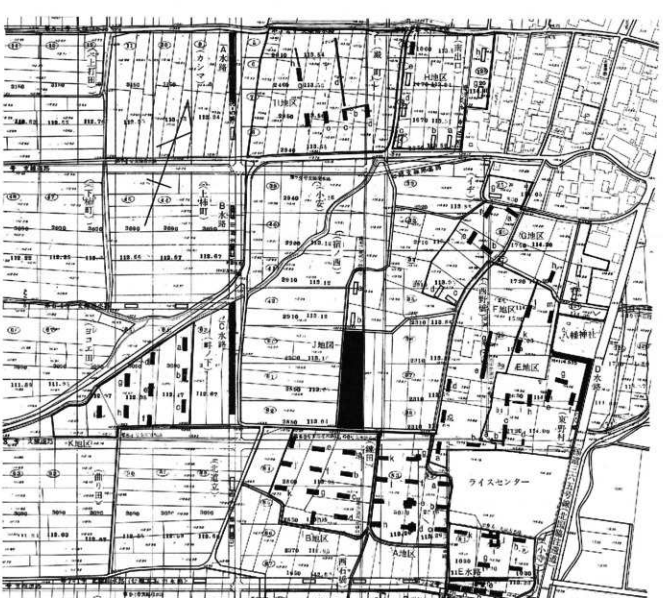
3．調査の経過と概要（図2）

イ．経　過

井口遺跡は、1975年に国道 365号線バイパス建設工事に先立つ遺跡確認調査によって発見したものである。バイパスは、木ノ本町南田部から高月町井口、柏原等を通り、落川の東方、高時川にかかる阿弥陀橋までの間約3kmに及ぶものであるが、この間のうち、南田部から柏原に及ぶ約2kmの間で遺物の散布を見たのである。翌年、井口地先で東西 600m、南北400mに及ぶ範囲では場整備事業が計画され、再度実施した遺跡範囲確認調査によって、事業地域全域に遺跡の広がる可能性のあることを確認した。この結果をもとに、県耕地建設課等関係機関と遺跡の取り扱い等について協議に入り、その結果として、①ほ場整備計画範囲全域を調査対象とする。②ただし、試堀坑設定個所は切土計画部分を中心とする。③試堀の結果をもとに、遺跡保存のための設計変更を行う。④排水路計画部分については完堀し、記録保存をはかる。⑤農道部分については、一切切土せず、盛土とする。等の点において合意に達した。

次いで、調査期間の調整に入ったが、調査対象範囲が広大であるため、地元の要望もあって、遺物散布の希薄な西側幅200mの範囲は8月中に青田刈りすることにより実施することとし、この調査については、木ノ本町立高時小学校教諭笠原氏に依頼した。以東については、秋季刈取り後に工事工程と調整をはかりながら実施することとした。

調査は、夏季実施部分を西区、秋季実施部分を東区として区別し、さらに、西区をA～E地区の5地区、東区をA～Kの11地区を設定し、各地区の切土計画部分を中心に、2m×4mを基本とするトレンチを設け、遺構の有無、包含層の有無等を確認することとした。トレンチはa～oのアルファベットの小文字であらわした。また、排水路計画部については、遺構の分布に従って、A～Eの5つに区別し、A～E水路と呼び、トレンチにより遺



第２図　東区グリッド配置及び遺構分布図

構分布範囲を確認のうえ、発堀調査を実施した。

ロ．概　要

東区の試堀調査は、地割りに応じてＡ～Ｋの11地区を設定し、各地区毎に、ほ場整備工事によって切土が計画されている田面を中心に、６～15ヵ所のトレンチを設定した。調査は、遺構、遺物包含層の有無等を確認し、ほ場整備工事により影響のある場合、協議のうえ、設計変更により、その保存を計ることを目的としたため、遺構等の完堀を避け、また、

拡張して確実な分布状況を追求していない。従って、遺構の性格、年代等については明瞭でない。ただ、遺跡は設定した11地区全体に分布しており、出土遺物より見る限り、古墳時代後期から平安時代後期に及ぶものであることは明らかである。下表に、各地区の所在する字名、検出した主要遺構、出土遺物の年代を示しておく。

地区名	所在地（字名）	主要遺構	出土遺物年代
A	鎌田東半部	竪穴式住居、ピット、溝	平安前・中
B	〃 西半部	竪穴式住居、ピット	〃
C	小寺	掘立柱建物、ピット	〃
D	西石橋	包含層	〃
E	東野村南東部	掘立柱建物、ピット、溝	古墳後・平安中
F	〃 南西部	包含層	平安前・中
G	〃 北部	包含層	古墳後・平安前・中
H	南出口	土器溜、包含層	古墳後・平安中
I	殿町	瓦溜	平安前・中
J	宿ノ西東部	包含層	平安中
K	畔ノ下	竪穴式住居、掘立柱建物	古墳後・平安前・中

表1　地区別主要遺構一覧（なおL地区は遺跡外に当り、省略）

西区については、10m×10mトレンチを5ヵ所に設定し、遺構・遺物包含層の追求を行なったが、いずれにおいても、検出し得なかった。ただ、B地区に設定したトレンチにおいて、NE－SW方向に走る幅1m程の溝跡を検出した。小礫を多量に包含した自然溝であるが、礫とともに、平安時代中～後期頃のものと思われる須恵器　灰釉陶器の小片が含まれ、このころに廃絶したものと考えられた。現在、小字宿ノ西、畔ノ下の北側に沿ってNE－SW方向に条里田を斜めに横切る水路が存在するがこの水路は小字曲り田の西側で条里田に沿って南流し、以下、条里田の区画に沿った流れを示している。Bトレンチで検出した自然溝は、この斜めに横切る水路の廃絶したものではないかと考えられる。

4．遺　構

イ．A水路（図3）

A水路は小字カシマの東寄りに位置する。遺構は、字内のやや北寄りで、南北約40mの範囲内で検出された。遺構分布範囲以北は耕作土下に薄い床土があり、黄褐色の地山面はほぼ水平であり、以南では、茶褐色の厚い堆積がある。遺構分布範囲では、全体的に南傾しており、以北は削平、以南は盛土して耕地面を整備した状況が伺える。

検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟の他多数のピット群である。

〔掘立柱建物〕　柱穴4基（P16・P18・P23・P25）を確認した。掘り方は1辺約60cmで、いずれも方形に掘られている。P23・P25で柱痕が見られたが、ともに、径約30cm程であった。P16はP17の大型土坑内の埋土除去後に検出している。P20とP25の柱間が2.1m、P16とP18が2.0mを計る。P16、P18の柱列を西端として東西に長い建物と考えると桁行3間、梁間2間以上となる。東西軸はW3度Nにある。P16より二種類の婉が出土し、ともに平安時代前期と考えられ、建物もこれに近い年代を与えることができる。

〔ピット群〕　多数のピットを検出したが、そのうち、P21は1辺50cm程の方形の掘り方で、径約20cmの柱痕を確認した。しかし、これと組み合せて統一的な配列を示すものは検出し得なかった。また、P31は、南北2.2m、東西2.5m以上の長方形の土坑で、その南東部で焼土塊がみられた。また、東側約1.5m幅が一段高く、その床面より2基のピットを検出した。竪穴式住居跡とするにはやや不十分で、その性格については、明確にし得なかった。

次に、8基のピットから遺物の出土を見ているので、その器種、年代を表に示しておく。ピット内出土遺物は古墳時代後期から平安時代中期にわたるが、古墳時代後期の遺物を含むP11、P17にはそれぞれ、平安時代中期、平安時代前期のものを含み、ピットはこの二時期に大別できる。耕作土中より出土のものもおよそこの二時期に集中し、古墳時代後期に属するものは非常に少ない。従って、遺物の出土がなく、その年代を確定し得ない他のピットも大半が平安時代前期と平安時代中期に属するものと考えられる。

ピットNo.	灰釉陶器	須恵器	土師器	その他	挿図No.	年代
P 4		甕				
P 6	皿		皿		10	平安中期
P 7		甕	甕			
P 11		婉・蓋・長頸壺・壺	皿・甕		2·6·7 14~16	古・平安前・中
P 15		台付長頸壺			12	奈
P 16		婉	甕		4・5	平安前
P 17	婉	婉・蓋・台付壺・坩・甕	皿	平瓦	1·3·13	白・奈良末
P 39	婉					平安中

表2　A水路ピット内出土遺物一覧（古は古墳時代　白は白鳳時代　挿図は図14）

ロ．C水路（図4）

小字畔の下の東端にあたる。条里による方形の地割りはこの部分では遺存せず、現水路が西隣の字ヨコエ田にかけて斜めに走っており、条里2坪分をその対角線で二分した形に

なっている。遺構の分布は北半分約50mの範囲に限られ、南半分は、茶褐色土の堆積とそれを切って東西に走るIH河川状の砂利層がみられるにすぎない。ここで検出した遺構は竪穴式住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、ピット群である。

〔竪穴式住居跡〕　4基確認したが、うち1基は現水路によって大半が破壊されていた。2・3号が、その軸線を一致させ、また、完存した3基では、いずれも南北軸がやや長く、長方形プランを呈し、東壁に沿って焼土痕が認められた。また、いずれも柱穴痕を持たず、共通した特徴を持つ。出土遺物から、4号が平安時代前期、2・3号が7世紀前半のものと考えられる。

（1号住居跡）　住居跡東側壁の一部を残すのみで、現水路によって大半が破壊されていた。遺存した東側壁の方向はN26度Eを示す。

（2号住居跡）　4.6m×3.1mの南北に長い長方形プランを示すが、東側壁がやや張り出し、最大幅3.6mを計る。長軸はN－Sにあり、磁北に一致している。深さは15cm程が遺存していた。床面で2基のピットを検出したが、柱穴痕はない。東壁に沿って、そのほぼ中央に焼土痕が検出され、その北方70cm程のところに土器溜りがあった。いずれも土師器片である。

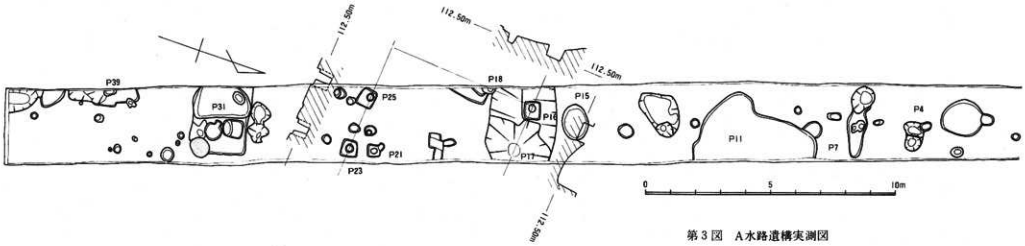
（3号住居跡）　4.2m×3.7mの南北に長い長方形プランを持つ。長軸はN－Sで、2号住居跡にほぼ一致する。焼土痕はやはり東側壁沿いにあるが、やや北寄りで認められた。4基の不整形なピットを床面で検出したが、柱穴痕を思わせるものは認められなかった。深さ25cm程遺存。床面中央附近で土師器片が出土したが、器形は不明である。

（4号住居跡）　5.25m×4.35mで、長軸をN7度Wに持ち、長方形プランを持つ。深さ30cm程が遺存していた。床面で2基の小ピットを検出したが、柱穴痕は認められなかった。焼土痕は東側壁に沿って、その中央よりやや北寄りで認められた。床面より土師器片及び須恵器片が出土している。須恵器片は碗形品で、平安時代前期のものである。土師器片は形態は明瞭でない。

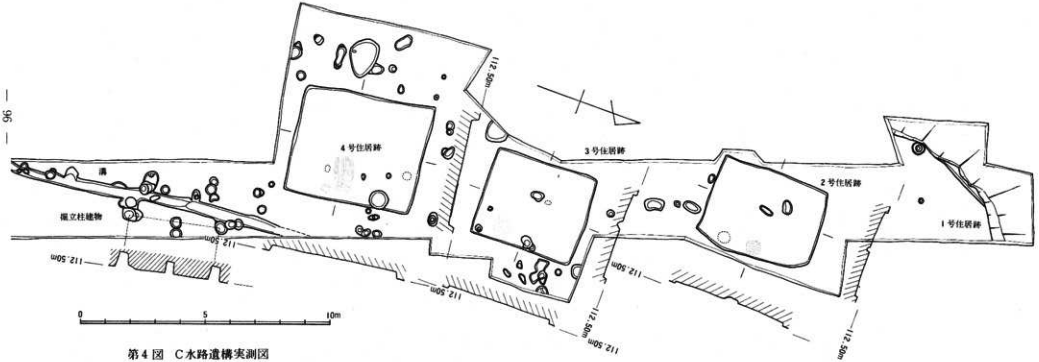
〔掘立柱建物〕　南北に並ぶ3基の柱穴P49～P51を検出している。柱間はともに1.8mを計る。その配列状況から東へのびるものと考えられる。なお、柱列はN11度Wの傾きを持ち、4号住居跡の軸線に近似している。なお、P51は溝を切っているP61を切って掘り込まれており、溝より後出のものといえる。柱穴よりの出土遺物は認められなかった。

〔溝〕　およそN12度Wの傾きをもって、ほぼ直線的にのびる。幅30cm～50cmで南側寄りが細く、深さ約15cmで凹字形の掘り方を示している。南よりにわずかに傾斜するが、大きな落差はない。

〔ピット群〕　柱穴を含めて、70余基を検出したが、不整形なものが多く、建物を思わせる配列は認め難い。



第3図　A水路遺構実測図



第4図　C水路遺構実測図

ハ．D水路（図5）

小字東野村の東端に位置し、北国脇往還道の東側に沿った部分である。北側に八幡神社があり、現在周囲より一段高くなっているが、頭初よりこの部分は土壇になっていたという。八幡神社より南方50m程が遺構の分布範囲であり、さらにその南方50m程は約40cm程田面が低くなっている。東野村及びその周辺は条里制による地割が全くたく認められない地域である。

D水路では、建物等を思わせる明瞭な遺構を検出しえなかったが、築地塀を思わせる2条の並行した溝、掘立柱建物である可能性の強い4基のピット列及び多数のピットを検出した。また、D水路では、平安時代中期頃と考えられる多数の灯明皿が出土し、この附近の遺構の性格を暗示している。

〔溝状遺構〕　4.7mの間隔をもって並行に、東西方向に走る。方向はW3度Sである。特に、南側のものは、E地区 gトレンチにおいて、西方に少なくとも22m以上のびることを確認した。ともに幅70cm、深さは北側が20cm、南側が40cmを計る。横断面はともに凹字形を定している。特に南側の溝より平安時代中期に比定できる灯明皿が出土しており、その年代を考定できた。

〔掘立柱建物？〕　N81度Eの方向にある4基のピット列を検出した。柱間は東より2.50m、1.25m、1.50mで不等間隔であり、南北柱列を確認していないので、建物とするには不十分であろう。

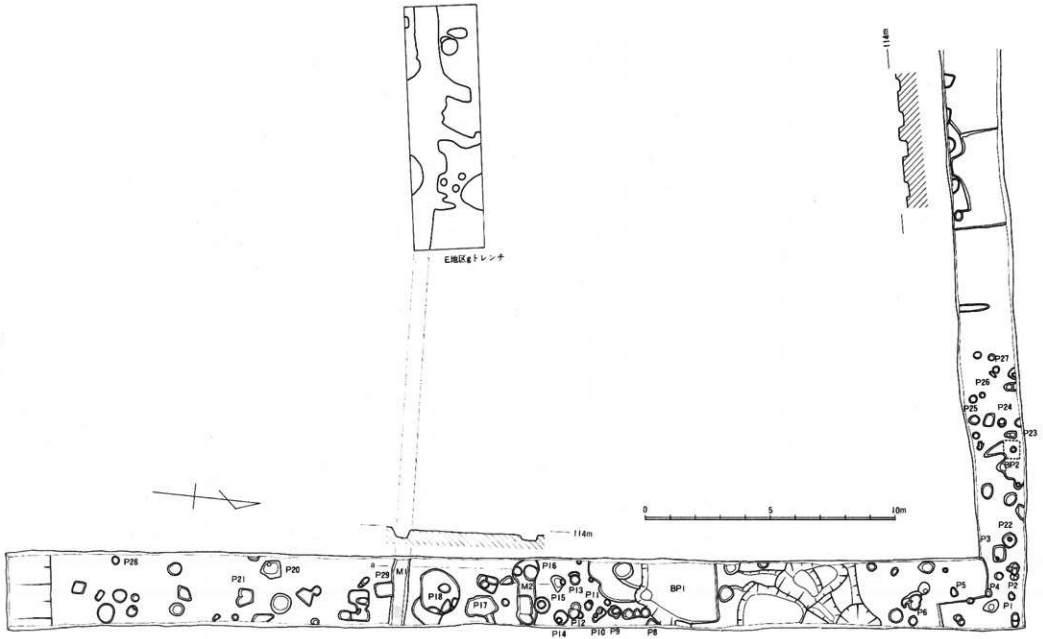
〔ピット群〕　多数のピットを検出した。各ピットの出土遺物及びその年代を表に示した。これによると、およそ、平安時代中期のもののみを出土するもの、室町時代前後の遺物を含むもの、あるいは室町時代前後の遺物のみを含むものの二時期に大別できる。また、新旧いずれのピットからも、大部分灯明皿を出土しており、D水路附近の遺構の性格を暗示している。なお、P2、P15、P18、B.P.1から灰釉陶器が、また、P15、P18、P30からは緑釉陶器が小片ながら出土している。

ニ．E水路（図6）

E水路は字東野の南側、字小寺に属する。小寺は南北中程で北半分が25cm程高く、E水路はこの北側部分の南端に位置する。小寺も条里制による地割を認めることができない。

ここでは、掘立柱建物1棟と柱穴状のものを含むピット群を検出した。また、E水路の南側及び北方に設定したトレンチ2ヵ所（C地区 e、i及びjトレンチ）で掘立柱建物を各1棟ずつを検出している。

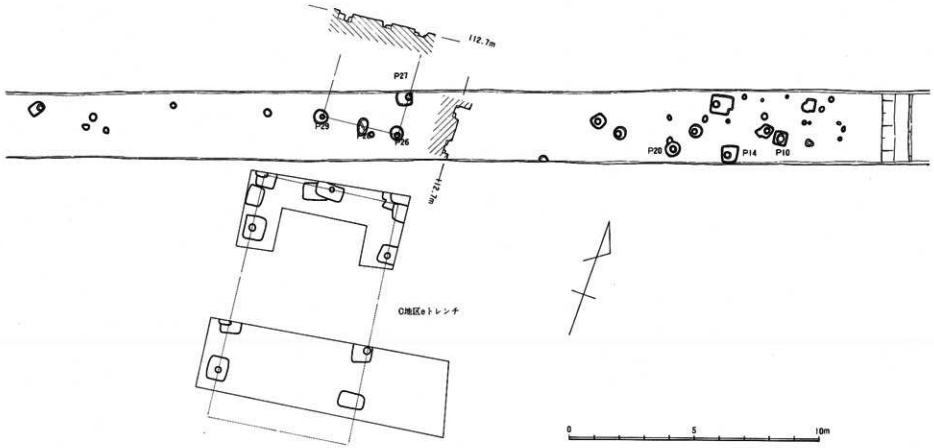
〔掘立柱建物〕　南側で柱列3基（P26、28、29）西側で2基（P26、27）までを検出した。柱間はいずれも1.3mを計る。掘り方は径50～60cmの円形で、柱痕は径20～25cmである。南方へのびるようであり、南側柱列はW5度Sの傾きを持っている。



第5図　D水路遺構実測図

ピット No.	灰釉陶器	緑釉陶器	須恵器	土師器	その他	年代	挿図 No.
1			椀	灯明皿		平安	
2	小片		椀・蓋	灯明皿・その他			50・51
3				灯明皿		平安中	
4				灯明皿		平安中	
5			甕	灯明皿			
6				灯明皿	レンガ	平安～現代	
7				灯明皿・甕	摺鉢	平安中～近世	17・18
8			椀・蓋	灯明皿・その他		白鳳～平安中	14～16
9			椀・蓋・甕	灯明皿	白磁	平安～近世	
10			蓋・壺	灯明皿			20～30
11			小片				
12							
13			椀・甕	灯明皿・その他			
14			小片	小片			
15	椀	小片	椀・蓋・甕			平安中	36・37
16			椀・蓋・その他	小片	摺鉢・梁付	平安～近世	53
17			椀	灯明皿・壺	土錘	奈良～室町	45～49
18	小片	小片	椀・蓋・甕	灯明皿	摺鉢	平安～近世	41～43
19			椀・甕・その他	小片			
20			椀・蓋	灯明皿・鍋			
21			椀・蓋	甕		古墳前～平安前	34・35
22				灯明皿		平安中	10～13
23			椀・甕				
24			椀・甕・その他	灯明皿・甕		奈良～平安中	19
25			小片				
26				灯明皿		室町	38～40
27					陶器	近世	
28							
29			椀				
BP1	椀		椀・蓋・台付壺・甕	灯明皿・甕	摺鉢・火鉢・平瓦	近世～平安	1～9
BP2			小片	灯明皿・甕	平瓦	平安中	31～33
M 1				灯明皿・甕		平安中	
M 2							

表3　D水路ピット内出土遺物一覧表（挿図は図10）



第6図　E水路遺構実測図

〔ピット群〕・ P10・11・14・17・19・20・23・24で柱穴が検出でき柱穴である可能性があるが、建物を思わせる統一的な配列は認められない。ピットの時期については、P10より古墳時代後期中頃の須恵器蓋1点を出土した以外、ほとんど有効な遺物は出土していない。

ピットNo.	須恵器	土師器	その他	年代	挿図No.
10	蓋	小片		古墳	
14	小片				
20	小片	燈明皿	鉄釘	平安中	

表4　E水路ピット内出土遺物一覧表（挿図は図15）

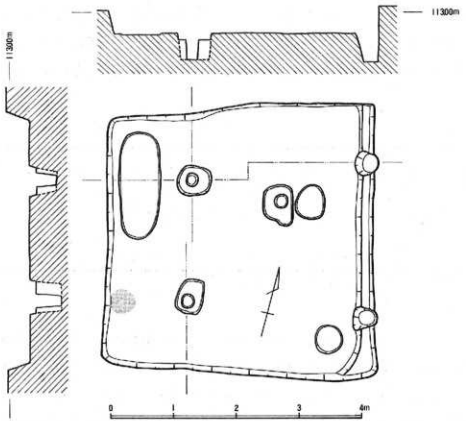
〔C地区eトレンチ掘立柱建物〕　南側柱列については、道路敷きに当るため調査し得なかったが、2間×5間の南北に長い建物と思われる。北側柱列柱間はともに2.75m、西側は北より2.12m、1.96m、1.96m、1.96m、東側は2.02m、1.96m、1.96、1.96mを計る。柱穴は東西約80cm、南北90cm程の方形のもので、柱痕は20～30cmを計る。南北主軸はN5度Wの傾きをもつ。完掘はしていないが、北西隅の柱の抜き取り穴より須恵器甕が出土しており、およそ平安時代初頭の建物と考えられる。

ホ　A地区dトレンチ竪穴住居跡（図7）

A地区は字鍵田の東半部に当り、11ヵ所にグリットを設定し、溝、ピット等を検出している。このうちdグリットで、竪穴式住居跡の完掘をはかった。

住居跡は深さ38cm程遺存していた。平面規模は西側1.3m程までで南北幅2.1mを計り、以東では広くなり、4.4mとなっている。東西幅は一定で4.4mである。東側壁は幅10cm、高さ30cm程の段を持っている。柱穴は南北側壁のクビレ部附近で2基（柱間1.94m）、東側壁の段の部分で2基（柱間2.5m）を検出した。西側柱列は径40～54cmの不整円形で、柱痕は20～22cmを計る。東側柱列は柱痕を確認しなかったが、掘り方は、側壁側が垂直に、内側は斜めに掘り込まれている。掘り方は円形で、径40cmを計る。また、西側壁沿いで、南寄りに焼土痕を検出している。

この住居跡床面直上では遺物を検出できなかったが、埋土中より土師器甕、須恵器蓋、甕を検出している。これらは、およそ7世紀前半のもので、住居跡もこれに近い年代を与えることができる。なお、軸線はN14度Wの方向にある。



第７図　A地区dグリッド竪穴住居跡実測図

５．遺　物

イ．A地区出土遺物（図８）

須恵器

〔塊〕　いずれも高台を持つもの（A類）である。高台の形態に、横断面が逆台形を呈していて端部に面を取り、開きのないもの（AⅠ類－２・３・17・18・19）、横断面が長方形に近かく、わずかに外方へ開くもの　（AⅡ類－４）、端部の面取りは小さく、丸味を持つもの（AⅢ類－16）等がある。AⅠ類の18では、口縁部径11.5cm、器高３.7cm、高台径８cm、高さ０.3cmを計り、体部は直線的で、比較的大きく開く。高台は体部下端に付く。他のものは全体的な形態は明瞭でないが、２が18に近似して体部の開きが大きいようである。又、３は高台径11.6cmと大型で、体部は内側にカーブして、あまり開かない。４も全体的な形態は明らかでないが、高台径16.5cmで大型品である。

灰釉釉器

〔塊〕　10は口縁部径10.8cm、器高３.3cm、高台径６.2cm、高さ０.3cmの小型品（A類）である。体部は大きく開き、中程に２本の稜を取って口縁部と区別し、口縁部は外反する。高台は横断面三角形状のものが、外方へ踏んばった状態で貼り付く。端部は丸い。５もロ

縁部径9.6cmで小型品である。高台の規模、形状も体部遺存部の様子からこれと同例であろう。これに対し、6は口縁部径14.6cmで大型品（B類）である。体部は内側にカーブして開き、口縁部は外面に二本の稜線が走り、端部で外反する。13も同心円復元では規模、形態が異るが同例であろう。8・11・14もB類と思われるが、8・14は高台高0.8cmで外方に開いた状況にあり、端部は丸い（BⅢ類）。11は高さ0.5cmで端部が丸く、真直ぐに付く（BⅣ類）。

〔皿〕 15は体部が二段に屈折して開き、高台は逆台形のものが貼り付く。7も皿形品と思われるが、高台は外方に開いた高いものが付く。

緑釉陶器

〔埦〕 20は高台部分の破片で、高台は内側に段を持つ。

土師器

〔皿〕 21は口縁部径8.4cm、器高2.0cmと小型で、底部は丸く、口縁部が屈折して外反する。

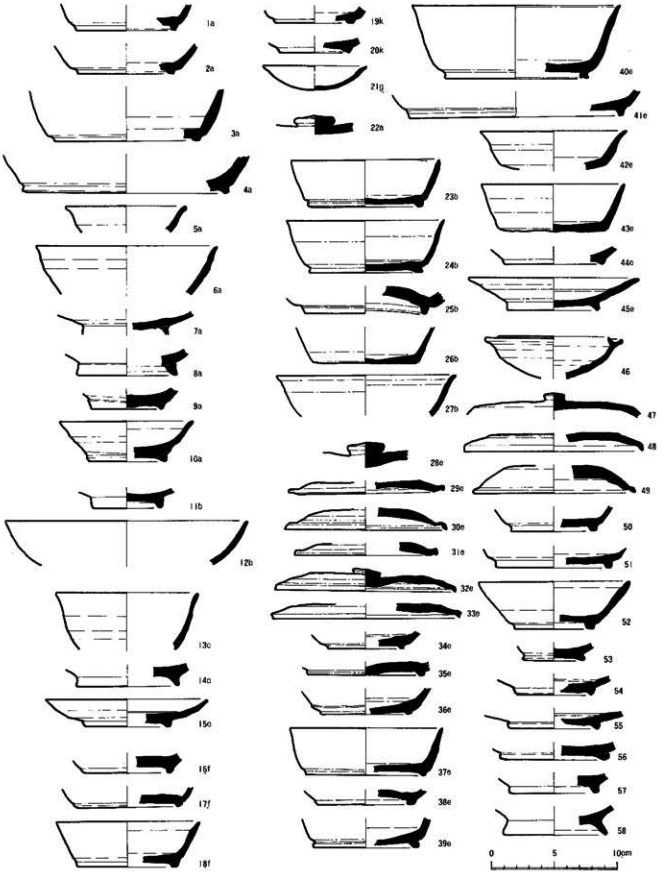
ロ．B地区出土遺物（図9・10）

須恵器

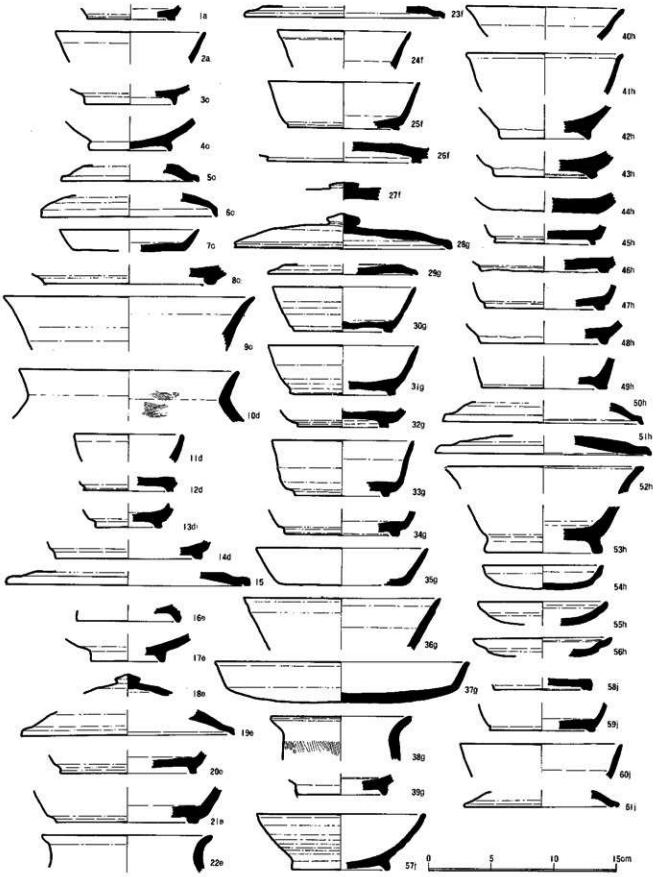
〔埦〕 A類にはⅠ類（図9－8・14・30・33・34・46・47・図10－8・9・11・12）、Ⅱ類（図9－1・13・20・25・31・32・45・49・59）Ⅲ類（図9－48）の他に、Ⅰ類と同形態であるが、端面に凹みがみられるもの（Ⅳ類－図9－12・21・図13－7）、端部が肥厚し、端面に凹みのみられるもの（Ⅴ類－図9－26）がある。AⅠ類の図9－30は口縁部径11.4cm、器高3.6cm、高台径7.8cm、高さ0.3cmで体部は直線的で、開きは比較的広い。これに対し、図9－33は口縁部径11.4cm、器高4.4cm、高台径7.5cm、高さ0.4cm。体部は直線的であるが口縁部は屈折して開く。高台は体部下端より内側に付き、体部と底部との境界は丸味を持つ。AⅡ類の図9－25は口縁部径12.2cm、器高3.9cm。体部は直線的であるが、口縁端部はわずかに外反する。高台は体部下端より内側に付き、体部と底部との境界は明瞭に稜を取る。図9－31では、体部は内側にカーブしながら開き、端部は単純に終る。体部下方には篦削り調整痕が見られる。

埦型品には、高台を持たないB類（図9－35・図10－1・13）がある。図9－35は体部が直線的に開き、口縁部は単純に終る。図10－1では、口縁端部がわずかに外反する。規模は前者が口縁部径13.6cm、器高3.0cm、後者が口縁部径14.4cm、器高3.6cmで、大差ない。

〔蓋〕 口縁部が屈曲して段を持つもの（A類）ともたないもの（B類）とがある。A類には、さらに、口縁部の屈曲がなだらかで、口縁端部の横断面が三角形状を呈するが、端部の稜の甘いもの（AⅠ類－図9－5・19・23・28・29・図10－5・6）、口縁端部が稜を取って屈折し、外反しながら垂下するもの（AⅡ類－図9－51）、口縁端部が極端に折



第８図　A・D・L地区出土遺物実測図



第9図　B地区出土遺物実測図

れ曲り、端部に面を取るもの（AⅢ類－図９－15・61）、口縁部の屈曲が小さく、端部が肥厚する程度で終るもの（AⅣ類－図10－４）等がある。ＡⅠ類の図９－28では、天井部は扁平で、付け根のクビレの大きいツマミがつく。Ｂ類の図９－６では天井部に丸味があるが、Ａ類は相対的に扁平な天井部を持つようである。

ツマミの形態では、図９－18・27・図10－３は付け根のクビレが小さく、扁平である。

〔壺〕　口縁部の形態で、端部が単純に終るもの（Ａ類－図９－９・36）、端部が突帯状に内側に肥厚するもの（Ｂ類－図９－52）、端部が肥厚して、幅広くなるもの（Ｃ類－図13－14）等がある。

〔皿〕　図９－７の１点のみである。口縁部径11.1cm、器高1.7cmで、口縁部は、短かく直線的に開き、端部は尖り気味に終る。

〔盤〕　図９－37の１点のみで、口縁部径19.3cm、器高3.2cm。体部は底部より屈曲して直線的に開き、端部が小さく外反する。底部は丸味がある。

〔台付壺形土器〕　図９－53の１点で、外方へ開く高台が体部下端に付く。高台端面は面を取るが、稜は甘い。

土師器

〔皿〕　灯明皿形のもの（Ａ類－図９－54～56）がある。度合いの差はあるが、いずれも口縁部に屈曲のみられるもので、口縁部径9.6～11.2cm、器高1.5～1.9cmの小型のものである（ＡⅠ類）。

〔甕〕　口縁部が短かく、大きく外反し、体部の張りがほとんどないもの　（Ａ類－図９－22・38）と頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部が突帯状に内側に肥厚するもの（Ｂ類－図10－17）とがある。Ａ類の図９－38の口縁端部は凹線が走るが、図９－22は丸く終る。38の体部には、縦方向の刷毛目痕がみられる。Ｂ類の図10－17の体部は球形状になるものと思われる。

灰釉陶器

〔埦〕　小型のＡ類には見られない。全体を知れる図９－57は口縁部径13.4cm、器高4.6cmで、Ｂ類である。57では、口縁部は内側にカーブしながら開き、端部でわずかに外反する。高台は開き気味で、外臂しており端部は丸い。口縁部の形態では図12－41が近似している（ＢⅡ類）。

高台の特徴では、図９－３・４が大きく外臂し、端部が尖り気味に終る（ＢⅠ類）。図９－７・42・43が幅広く、横断面三角形状で、端部が丸い（ＢⅣ類）。高さはともに0.5cmと比較的高い。図９－16、図10－２は高さ１cmと高かく、外側に開くが、弯曲は見られず、端部が丸い（ＢⅢ類）。

図９－40は口縁部が幅広く、外反するもので、ＢⅠ類の高台が付くものと思われる。

〔皿〕 図10－15は口縁部径11.6cm、器高2.2cmで、形態はA地区出土のものと同様である。

ハ．C地区出土遺物（図10）

須恵器

〔塊〕 A類のみで、I類（30）、II類（22・28・29）、III類（24）、IV類（23）の各種がみられる。

〔蓋〕 21は口縁部が屈曲して段を持ち、端部が垂下するタイプで、AI類。19・20のツマミは付け根のクビレが小さく、AI類の口縁部を持つものと思われる。

〔壺〕 25は口縁部片で、外反して開き、端部は内傾し、凹む。

灰釉陶器

〔塊〕 26・27ともにB類で、27の高台はIII類に近かく、外側に開く。26の口縁部は体部から稜を取って外反する。

ニ．D地区出土遺物（図8）

須恵器

〔塊〕 A類ではI類（23・38）、II類（24・25・39）の他に、高台の端部が肥厚し、端面の凹むもの（V類－40）と高台の高さ及び幅が小さく、やや外方へ開き気味で、端部に面を取り、稜の明瞭なもの（VI類－34～37）がある。I類の23では、体部が直線的で、口縁部が単純に終る。高台は体部下端附近に付く。口縁部径11.8cm、器高4cm、高台径9.2cmで、体部の開きは小さく、浅い。II類の24は、口縁部径12.6cm、器高4.3cmを計り、体部はやや内側にカーブして開き、その中程より外反させて口縁部をつくる。V類の40は口縁部径16.6cm、器高5.9cmと大型で、体部は直線的に開き、その中程から外反させて口縁部をつくっている。VI類の37では、体部は直線的で、口縁部は内外より押えて薄くし、区別している。高台は体部下端に付き、体部と底部との境界に稜を取る。

〔蓋〕 A類のみで、I類（33）、II類（32）、III類（30）、IV類（29・31）がある。22・28のツマミは比較的大型で、扁平であり、AI類、あるいはII類につくものであろうか。

灰釉陶器

〔塊〕 体部の上方部で外反して口縁部をつくり、端部でさらに大きく外反する（27）。

緑釉陶器

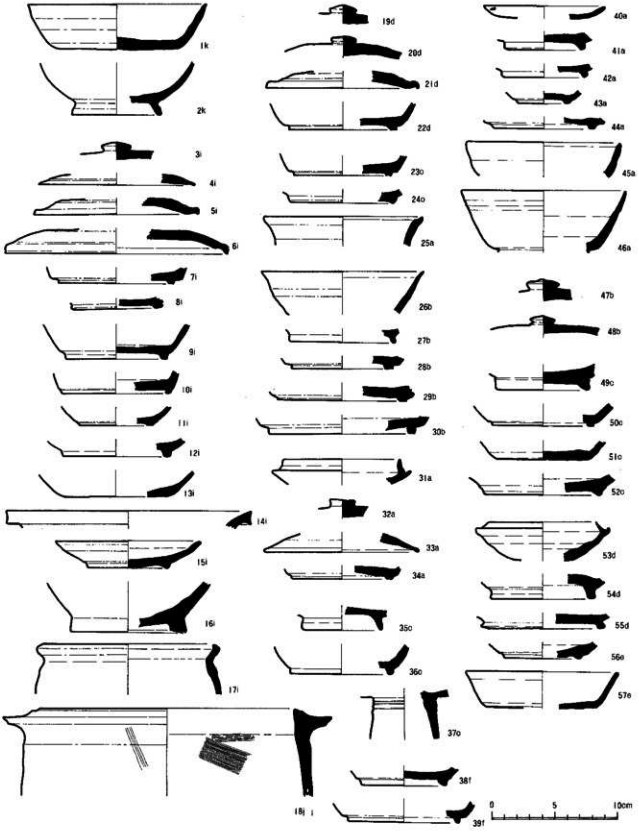
〔皿〕 45は体部内面に段を持つ段皿である。体部は直線的で、端部でわずかに外反する。高台は外方へ開き、端部は丸い。口縁部径13.6cm、器高2.6cmを計る。

ホ．E地区出土遺物（図10）

須恵器

〔塊〕 AI類（36・38・39）とAIV類（34）とがある。

〔杯〕 受部を持つ杯身（31）で、口縁部は外反し、受部は斜上方に短かく突出する。



第10図　B・C・E・I・J地区出土土器実測図

6世紀後葉のものであろう。

〔蓋〕 AⅣ類（33）の口縁部とAⅠ類に付くと思われる円柱状に近いツマミ（32）である。

〔高杯〕 脚部の破片（37）で、付け根に3条の凹線を持つ。古墳時代のものと思われる。

灰釉陶器

〔埦〕 BⅢ類（35）に近似するが、外面の付け根附近が凹み、中程に稜線が走る。

ヘ．F地区出土遺物（図13）

須恵器

〔埦〕 A類はⅠ類（23・35・36）とⅤ類に近似して、高台端部が肥厚し、体部が大きく開くもの（24）がある。AⅠ類の23では、口縁部径13.4cm、器高3.7cm、高台径9.4cm、高さ0.4cmで、直線的な体部は比較的開きが大きい。高台は体部下端より内側に付く。端面はやや凹む。

22は高台を持たないB類で、口縁部径19.6cm、器高4.7cmを計り、大型品である。平坦な底部と直線的な体部を持つ。

〔蓋〕 A類のみで、Ⅰ類（31・33）、Ⅱ類（8・32）、Ⅲ類（34）、Ⅳ類（3・6・7・16・25）の各種がある。Ⅱ類の8は口縁部径20.4cm、天井部までの高さ1.1cmと扁平であり、ツマミは付け根のクビレがやや大きく、高い。

ツマミには、付け根のクビレが大きく、かつ扁平なもの（15・26・27・29）と円柱状に近いもの（28）とがある。

〔硯〕 円面硯（21）で、脚部の透しは、外面に篦による刻線を施したにとどまる。

土師器

〔皿〕 4は薄手で、口縁部が極端に屈曲し、端部でわずかに肥厚し、内面に一条の沈線が走る。

〔高杯〕 杯部付け根附近の破片（17）で、外面に篦調整痕を見る。

灰釉陶器

〔埦〕 BⅢ類（9・19・20）、BⅣ類（10・18）の他に、削り出した平底のもの（12）が見られる。

〔壺〕 13・14は瓶形の底部と口縁部で、14の口縁部は端部で上下に肥厚する。13の底部は体部よりすぼみ、平底である。

緑釉陶器

〔埦〕 底部片（11）で、高台は内側に段を持ち、外面が外反気味で、端部は丸い。

ト．G地区出土遺物（図14・図15）

須恵器

〔埦〕　A類にはⅠ類（図11−12、20、32、35、52）、Ⅱ類（図11−3、18、19、34、37、38、50、図12−3〜6）、Ⅲ類（13、36、53）、Ⅳ類（図11−14、15、51、図12−15）、Ⅴ類（図11−16、17）、Ⅵ類（図11−30、31）の各種がある。Ⅱ類の図11−3では、口縁部径13.8cm、器高4.6cm、高台径7.5cm、高さ0.3cmで、体部は直線的に大きく開く。口縁端部は、内側にカーブしながら開いている。体部と底部の境界は稜を取り、高台は体部下端より、わずかに内側に付く。

A類の他、B類（図11−55、56、図12−7）も見られる。図12−7では、体部は直線的で、口縁部は単純に終る。底部と体部との屈曲は図11−56等に比べて大きい。

〔杯〕　図11−1、48、49とも同規模、同形態で、口縁部は短かく、大きく内傾し、受部も短かく、斜上方に突出している。6世紀末頃のものであろう。

〔蓋〕　AⅠ類（図11−8、9、28、46）、AⅣ類（図11−45）の他に、口縁部にかえりを持つもの（C類−図11−7）がある。これは、受部は折り曲げられ、天井部は丸味を持つようである。ツマミ（図11−2、27）はともに薄手で、クビレは比較的小さい。A類に付くものであろう。又、短頸の壺形土器のものかと思われる蓋（図11−47）がある。口縁部は内傾し、端部は面を取って凹む。天井部には丸味がある。

〔皿〕　図11−54は口縁部径17.2cm、器高2.9cmと大型で、口縁端部がわずかに外反する。底部は丸味を持っている。

〔鉢〕　鉢形の器形を持つと思われるもの（図11−39、40）がある。39は、横断面逆三角形状の高台を持ち、体部は、低部よりなめらかに移行し、やゝ内側にカーブしながら大きく開く。40は、端部で肥厚し、端面が凹む高台を持ち、体部は直線的で、低部より屈曲して開く。

〔壺〕　花瓶形品の口縁部（図11−24）と長頸壺形品の肩部（図11−25）、小形壺形土器（図12−8）、短頸直口形のもの（図12−9）等がある。図11−24では、口縁端部が折れ曲がって上方に突帯状に突出する。図11−25は、肩部と体部との境界に一条の凹線が走り、図12−8は肩部が稜を取って、やや丸味のある体部へ移行する。図12−9では、口縁部の開きは小さく、端部で突帯状に内側に肥厚し、肩部がよく張っている。

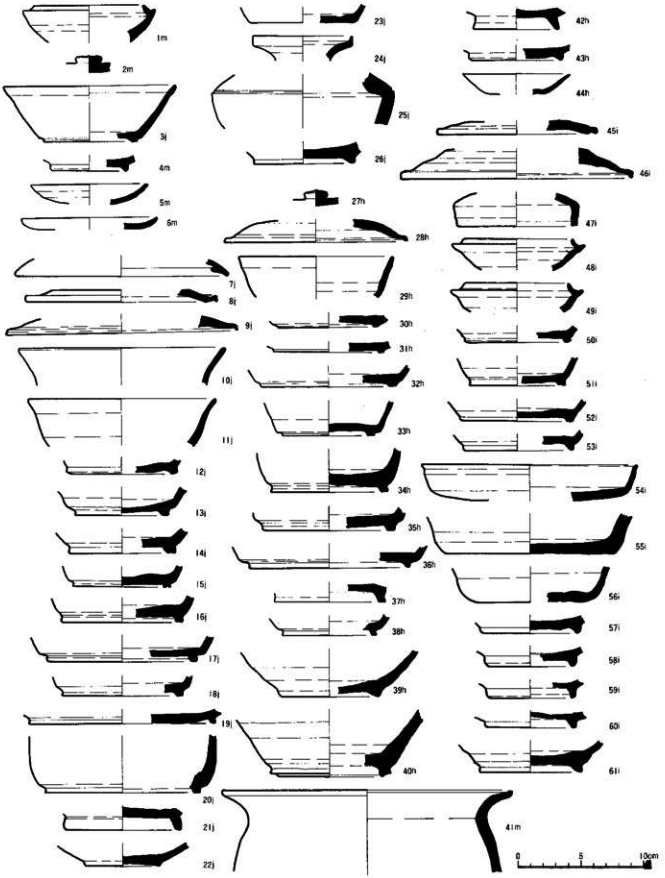
灰釉陶器

〔埦〕　BⅡ類（図11−4、43、57、58）、BⅢ類（図11−42、59、60、61）の2類が見られる。

土師器

〔皿〕　灯明皿形のA類（図11−5、6、44）のみである。いずれも口縁部が単純に終るもので、5、6はともに底部に丸味を持つ。44は、やや上底気味である。

〔甕〕　図11−41は、口縁部が大きく外反し、端部が上方に肥厚する。肩部はほとんど張



第11図　G地区出土遺物実測図

らない。図12－10、11は同形品と思われる。10では頸部が「く」の字形に折れ、口縁端部は単純である。体部内外面とも刷毛目調整痕がある。

チ．H地区出土遺物（図12）

須恵器

〔埦〕　AⅢ類（18）とAⅣ類（17、23、24）がある。AⅢ類の17では、口縁部径14.6cm、器高3.4cmと浅く、口縁部は直線的で、比較的大きく開く。

〔蓋〕　19は、天井部が大きくふくらみ、口縁部との境界の稜はにぶく、口縁端部は丸味がある。22はA類のツマミであろう。19は6世紀末頃のものであろう。

灰釉陶器

〔埦〕　25はBⅡ類、26はBⅢ類に属す埦形品。

〔壺〕　花瓶形のもの（20）で、口縁端部が上方へ突出する。

土師器

〔皿〕　灯明皿形のもので、27～57は同一ピットの出土品である。形態は二類ある。口縁端部が屈曲して段を持ち、端部から上方へ肥厚するもの（27～48）と口縁部がわずかに内傾するもの（49～57）とがある。いずれも、口縁部の外面と内面全体をナデ、底部は未調整である。

リ．I地区出土遺物（図10）

須恵器

〔埦〕　AⅡ類（54、55）、AⅢ類（49、52）、AⅣ類（50、56）及びB類（51、57）がある。B類の57は、口縁部径12.2cm、器高3cm、体部は直線的で、口縁端部は丸い。

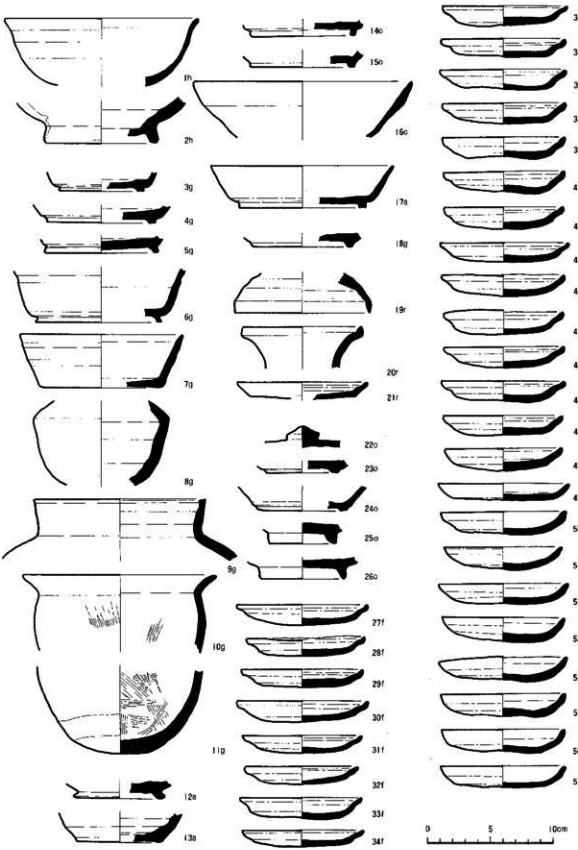
〔杯〕　53は口縁部が短かく、大きく内傾し受部は端部が屈曲している。

〔蓋〕　扁平でクビレの大きいツマミ（47、48）で、B類につく可能性もある。

瓦（図版十七・二十一～二十五）

軒丸瓦は瓦当文様に2種類があり、一つは（図版十七・二十一下の1）単弁8葉で、外区には幅の広い圏線と広い間隔を持って16個の珠文をめぐらせている。内区には、やや肉太の花弁の間に、撥形の厚味のある間弁を配している。中房は、中央に丈の高い半球状のものを置き、その外側に16個の蓮子がある。又、半球状の蓮子は突線で4等分され、突線の交点と4等分された部分に各1個の蓮子が配されている。同類は高月町保延寺大海道遺跡で出土している。他は（図版十七下）調査中に盗難に会って詳細は明らかでないが、瓦当裏面に布目痕が見られる。調査中の観察では、複弁で中房の大きな川原寺式系に類似している。

軒平瓦（図版二十一下の3）は重弧文で、4重弧をめぐらす。大海道遺跡では三重弧文の下線に波形の粘土帯を加え、重弧文面に鋸歯状の刻みを施しており、軒平瓦・軒丸瓦の



第12図　G・H地区出土遺物実測図

共伴状況が異る。

平瓦（図版二十二～二十五）は裏面の調査痕に３通りのものがある。一つは（図版二十二）縄目の叩き痕を持つもの、二つは（図版二十三・二十五上）縄目痕を篦で磨き消しているもの、三つは（図版二十四）比較的細い格子目の叩きを持つものである。二つ目のものは硬質で焼き上りは良好であるが、三つ目のものは非常に軟質である。一つ目にはその両方のものがみられる。

ヌ．Ｊ地区出土遺物（図13）

須恵器

〔埦〕　ＡⅠ類（43、44）のみである。他に口縁部片（45）がある。

灰釉陶器

〔埦〕　ＢⅢ類に近似するが、端部に面を取る（41、42）

土師器

〔皿〕　灯明形品（40）で、非常に浅く、口縁部は単純である。

ル．Ｋ地区出土遺物（図13）

須恵器

〔埦〕　ＡⅠ類（45、47、48、50）、ＡⅡ類（38、40、41）、ＡⅣ類（39、46）がある。

ＡⅠ類の40は口縁部径13.8cm、高さ5.2cm。体部は外側へカーブして開く。38は口縁部径11.4cm、高さ4cmとやや小型で、口縁端部がわずかに外反する。高台は端部で肥厚している。ＡⅢ類の46は口縁部径13.4cm、器高4.6cm。体部は直線的で、口縁部で厚味を増す。高台は0.2cmと低い。

〔皿〕　42は高台を持つもので、口縁部径15cm、器高３cm、口縁部が外反する。高台は端面に段を持つ。

〔蓋〕　ＡⅠ類（43、44、54）で、43にはクビレの比較的大きい扁平なツマミがつく。44は口縁部が屈曲して垂下している。53もＡⅠ類であろう。

灰釉陶器

〔埦〕　ＢⅡ類（51）と須恵器埦のＡⅠ類に近似した高台を持つもの（52）とがある。

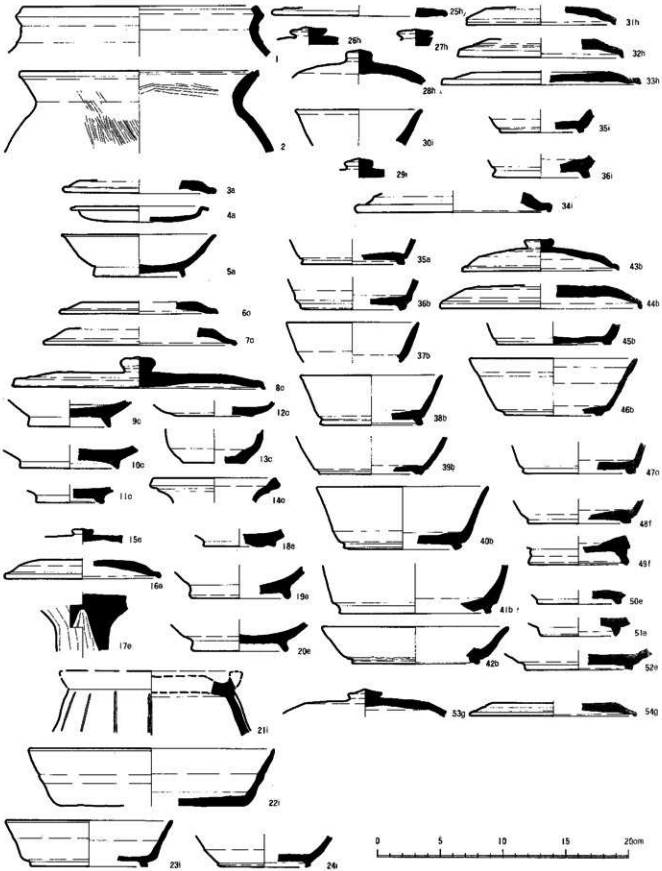
オ．Ｌ地区出土遺物（図８）

須恵器

〔埦〕　ＡⅠ類（50～52）のみで、52は口縁部径12.1cm、器高４cmを計り体部は直線的で大きく開く。

〔杯〕　小型で口縁部の内傾が大きく、受部との高さと近似している（46）。小型品で、７世紀初当のものと思われる。

〔蓋〕　ＡⅡ類（48）とＡⅠ類（49）とがあり、47はＡⅡ類であろう。



第13図　F・K地区出土遺物実測図

灰釉陶器

〔埦〕　BⅡ類（56、57）、BⅢ類（58）とがある。53はA類の小型品と思われ、外方へ開いた低い高台が付く。

〔皿〕　逆三角形の高台を持つ（54、55）。55では内面に段を持つ。

ワ．A水路出土遺物（図8）

ピット内出土遺物

〔P6（10）〕　灰釉の台付皿で、埦形品のBⅢ類に近似した高台を持つが、内面の彎曲は小さく、端部に面を取る。

〔P11（2、6、7、13～16）〕　須恵器埦にはA類（2）とB類（6、7）とがある。2は直線的に開く口縁部とわずかに外反する口縁端部を持つ。6、7はともに未調整の底部で丸味があり、体部下端外面に1～2cm幅程の未調整痕を見る。13～16は土師器の皿で、13～14は灯明皿型の皿で、口縁部が屈曲して段を持ち、端部が上方へ肥厚するもの。15、16は盤形の皿で、口縁部は15が外反するのに対し、16は直線的で、端部が肥厚している。

〔P15（12）〕　台付きの長頸壺で、肩部に丸味があり、体部は直線的にすぼまる。肩部と体部との境界とその下方とに3条の凹線が走り、体部下端を篦削り調整している。

〔P16（4、5）〕　ともに須恵器の埦で、4がAⅤ類、5はB類で、底部は未調整で平底になっており、体部下端を篦削りしている。

〔P17（1、3、57）〕　1、3は須恵器の埦で、1は、口縁部がやや内側にカーブしている。3はAⅤ類に属し、高台端部が肥厚し、端面が凹む。57は壺で、埦のAⅡ類に近似した高台が付く。瓶型の壺であろう。

〔P37（11）〕　灰釉の埦型品で、10と同様のBⅢ類に近似した高台がつく。

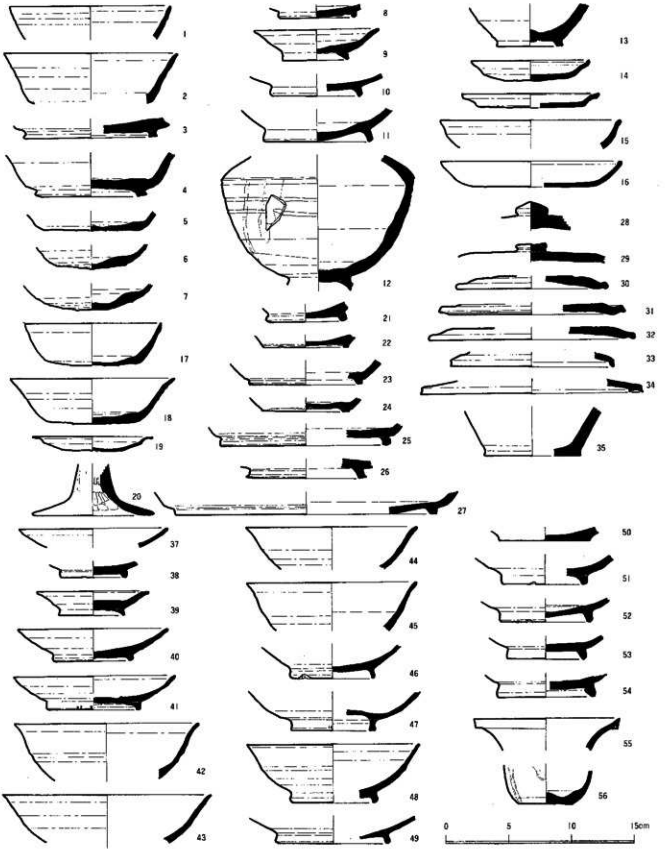
表土層出土遺物

〔須恵器〕　埦のA類には、Ⅰ類（21）、Ⅱ類（23、25～27）、Ⅳ類（22、24）があり、時期的にバラエティがある。B類は、口縁部が内側にカーブしながら開き、端部で肥厚している17と口縁部の開きが比較的大きく、端部が大きく外反する18とがある。さらに、底部は未調整で、平底になっている。

蓋には、口縁部が屈曲して段をもつA類（30～32）、段を持たず、口縁部に垂下するB類（33）、口縁部にかえりを持つC類（34）の各種がある。A類は、いずれもⅠ類である。

壺には花瓶型品様の底部片（35）がある。

〔灰釉陶器〕　埦型品には小型のものがなく、いずれもB類である。高台でみると、開いて内面が彎曲するⅠ類（46～48）、外方に開くが内面の彎曲のみられないⅢ類（49、51～54）の3類がある。Ⅰ類の48では、口縁部の中程で稜を取り、口縁部がやや外反気味となっており、42～45もⅠ類のものとし得る。



第14図　A 水路出土遺物実測図

皿には39の小型品と37、38、40、41の大型品とがある。大型品の口縁部は内側にカーブしながら開き、端部が単純に終る。高台は開き気味で低いものがつく。小型品は口縁部が外反する。高台はやや開く。

壺には、口縁部が上下に肥厚して、端部に面を取る瓶型のもの（55）と、平底のやはり瓶型品の底部56とがある。

カ．C水路出土遺物（図15）

竪穴式住居跡出土遺物

2号～4号の各住居跡から土器片が出土しているが、形態の特徴の知れるものは、2号住居跡の土師器甕（13）と4号住居跡の須恵器塊（14）である。13は、頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部は稜を取って内側に屈折している。体部はなだらかで、あまり開かないようである。14はAII類の高台を持つものである。

表土層出土遺跡

AII類の須恵器塊型品（15、16）が主なものである

ヨ．D水路出土遺物（図16）

ピット内出土遺物

〔P2（50、51）〕　土師器皿（50）と灰釉の塊（51）の他、須恵器の塊、蓋の小片が出土している。50は直線的で中太な口縁部を持つ灯明皿、51は口縁端部が外反する。

〔P10（20～30）〕　灯明皿（20～30）の他須恵器塊、壺の小片がある。灯明皿は、口縁端部に屈曲がなくおさめられるもの（20、21）、口縁端部が屈曲し、端部を上方に肥厚させるもの（22～30）の2種類がある。

〔P15（36、37）〕　須恵器蓋（36）、灰釉の塊（37）の他は、須恵器塊、甕、緑釉陶器の小片がある。36は小型であるがAI類に近似する。37はBIII類に近似する。

〔P16（53）〕　P16は、近世の摺鉢や陶器を混在する。　53は須恵器の塊でAIII類の高台を持つ。

〔P17（44～49）〕　44、45は土師器の皿型品で、44は直線的で中太りの口縁部で、端部がわずかに屈折する。45も口縁端部がわずかに内側に屈折するが、大型で口縁部は外反気味である。46、47は塊型品で、46はAII類に近かく、47はAIV類の高台を持つ。48、49は須恵器壺で、48は、直線的で開きが少なく、端部が内側に肥厚する口縁部、49は、外方に開いた長方形の高台を持つ端部である

〔P18（41～43）〕　近世の摺鉢を含み、混在しているが、灰釉、緑釉陶器の小片も出土している。41はAIV類の須恵器蓋、42は須恵器塊のB類、43はAI類の塊型品。

〔P7（17、18）〕　近世のものを混在している。17、18は灯明皿で、口縁部が屈曲し端部を上方に肥厚させるもの（18）と、単純に終るもの（17）とがある。

〔P8（14～16）〕　14は、口縁部が屈曲し、端部を上方に肥厚させているが、他の類品に比べて、器壁が薄い。15は須恵器の蓋で、口縁部にかえりを持つC類、16は埦で、外反気味に開く口縁部。

〔P21（34、35）〕　34は須恵器蓋でAII類に近似するが、端部は直線的に垂下する。35の埦は直線的に開く体部で、口縁部に変化はない。P21からは、これらの他に、いわゆる古式土師器と思われる甕型品がある。

〔P22（10～13）〕　P10同様の2種類の灯明皿が出土している。

〔P24（19）〕　II類の高台を持つ須恵器埦（19）で、この他に、須恵器及び土師器の甕、土師器皿の小片が出土している。

〔P26（38～40）〕　いずれも灯明皿型の土師器。38は底部が上げ底風で、小型である。39、40は、口縁部が内側にカーブし、端部が尖り気味になっている。

〔P29（52）〕　外反する体部と未調整で丸味のある底部をもつ須恵器の埦B類。

〔B．P1（1～9）〕　近世の摺鉢等を混在するピットである。1～5は灯明皿型の土師器で　口縁部が屈折して外反する点に共通した特徴を見る。P17出土の45に近似する。

6は土師器の甕で、「く」の字型の頸部とやや外側でカーブしながら開く口縁部を持つ。口縁部、体部の内外面に刷毛目痕を見る。7はAIV類の須恵器蓋、8はAIV類の須恵器埦、9はBII類の灰釉の埦である。

〔B．P2（31～33）〕　灯明皿（31～33）の他に、平瓦　土師器甕、須恵器片を含む。

31、32　は、小型の灯明皿で、薄手で、丸味があり、体部と底部の区別はない。33は、B．P1出土の2等に近似する。

〔M1〕　M1からは土師器の灯明皿と甕が出土している。灯明皿はP10出土品に同型のものである。

タ．E水路出土遺物（図15）

ピット内出土遺物

〔P10（1）〕　須恵器の蓋で、天井部と口縁部との境界に凹線を施して区別し、口縁部は外反して開く。端部は幅広く肥厚する。

〔P14〕　須恵器の小片が出土しているが、器形は不明。

〔P20〕　須恵器の小片、灯明皿、鉄釘等が出土しているが小片で図示し得なかった。

表土層出土遺物

〔須恵器〕　埦のAII類(4)、C類(3)、の他埦の口縁部（2）と壺の口縁部（6、7）及び蓋（5、11）がある。2はやや内側にカーブしながら開く。7は、口縁端が上下に肥厚して面を取り、口縁部に波状文と凹線を施している。6は口縁端部をわずかに肥厚させている。5の蓋は口縁端部はわずかな屈曲があり、AII類に近似する。11は天井部から稜を取

って口縁部に移行し、口縁部に屈曲はみられないが、端部の形態はＡⅠ類に近似している。〔土師器〕　大型の皿（８、９）と小型壺（10）がある。８は口縁端部を小さく外反させ、深みがある。９は口縁端部を外反させ、内側に段を取って、凹ませている。10の壺は、「く」の字形の頸部を持ち、口縁部は短かく、内側に屈折している。

これらの他に円面硯の破片（12）がある。

６．結　　語

イ．試掘調査

試掘調査の結果、Ａ～Ｋの各地区にわたって、遺構及び遺物の包含層を検出した。試掘調査の性格上、トレンチの拡張を行なっていないので、遺構分布の詳細は明確にし得なかったが、知り得る限り、主要遺構の分布は、竪穴式住居跡がＡ、Ｂ、Ｋ地区、掘立柱建物跡がＣ、Ｅ、Ｋ地区に見られ、従って、調査対象範囲の南東部に掘立柱建物群、南西部に竪穴式住居跡群が比較的密に分布している様子が知れる。また、Ｈ地区で灯明皿を多量に包含したピット、Ｉ地区で広範囲にわたる瓦の包含層があり、北部には寺院関連の遺構の存在が推定され、一応の遺構の分布が把握できた。

これら遺構の年代や性格については、水路部分や一部完掘を行なったＡ地区ｄトレンチの竪穴式住居跡以外では、直接年代等を明らかにし得ないが、耕作土を含む表土層より多量の土器片等が出土しており、次に、これをもとに、遺跡の全体的な年代を把握しておく。

各地区におよそ共通して見られるものは、須恵器塊、蓋及び灰釉陶器の塊形品である。須恵器塊は、高台の形態で見る限り６類に大別できる。高台が外方に踏んばるＡⅡ類や端部で肥厚し、端面が凹むⅤ類等は大阪府陶邑古窯跡群におけるＴＫ７や京都府長岡京跡ＳＤ51等の出土遺物に近似したものが見受けられ、多くは平安時代初頭のものと考えられる。高台端面に面を取るが、その稜は甘く、外方への踏んばりのみられないＡⅠ類やこれに近似するが端面に凹みが見られるＡⅣ類等は平安時代のものであるが、さほどさかのぼらないであろう。又。高台端部に面取りがなく、丸く終るＡⅢ類、高台が扁平なＡⅥ類等はＡⅠ類、ＡⅣ類より新しく、一応、平安時代中期頃のものと思われる。

須恵器蓋では、ＡⅡ類、ＡⅢ類が長岡京跡ＳＤ51に近似例がある。次いでＡⅠ類、さらにＡⅣ類と年代的に下り、塊型品と対応すると考えられる。

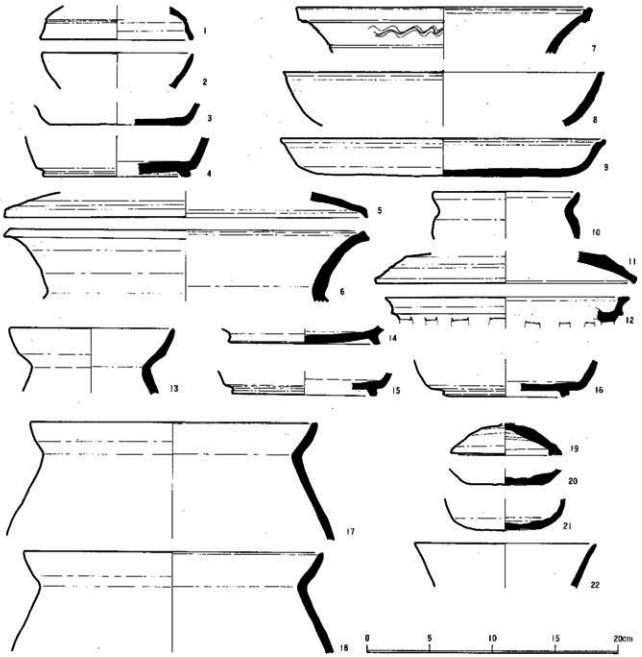
灰釉塊型品では、ＢⅠ類及びＢⅢ類がＢⅡ類、ＢⅣ類に比べて、やや古式と思われるが、花瓶型品も含めて、愛知県黒笹14号窯式から折戸53号窯式の間に含み得るものと考えられ、上述の須恵器塊や蓋の新しい部類と並行し、平安時代前期までさかのぼるものはない。

その他、土師器の灯明皿型の皿類は、特にＨ地区Ｆトレンチピット内出土の２類のものが一括遺物として注意される。類品は長岡京跡ＳＫ03にあり10世紀末～11世紀の一括遺物

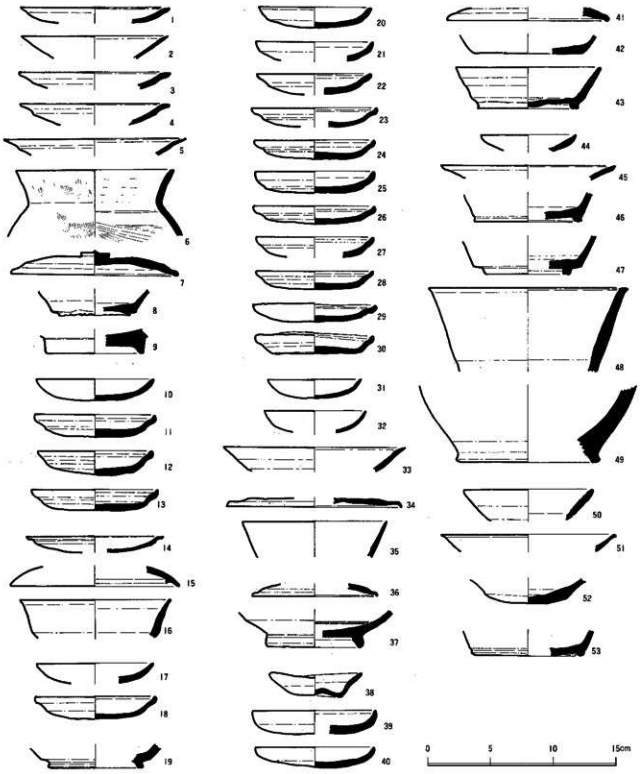
とされている。

以上のように、A～K地区の出土遺物を見る限り、平安前期及び中期を中心とした遺物の分布を見ている。ただ、この他に、E、G、H、Lの4地区から6世紀末～7世紀初当にさかのぼる杯身や蓋が出土している。このことから、各地区で検出した遺構は、平安時代前期及び中期を中心としたものであり、又A地区dトレンチの竪穴式住居跡が示すように、一部、古墳時代後期にさかのぼるものが重複していると考えられる。

また、H地区で瓦溜りを検出し、出土した単弁八葉軒丸瓦、重弧文軒平瓦は、連珠の間



第15図　C・E水路及びA地区dグリッド竪穴式住居跡内



第16図　D水路出土遺物実測図

隔が広がっていること等から奈良時代に入るものと考えられる。ただ、これに並行すると思われる土器の出土は非常に少なく、又、直接関連すると思われる遺構は検出していない。

ロ．水路調査

〔Ａ水路〕

検出した遺構は掘立柱建物跡の他は、性格不明のピット群である。掘立柱建物跡は３間×３間以上で、南北柱列はＮ３度Ｅの方向にあり、磁北に近い。柱穴の内Ｐ16から須恵器塊のＡ・Ｂ両類（図14－４・５）が出土し、Ａ類がＶ類の高台を有していて、外方に踏んばり、端部が肥厚した特徴を持つところから、陶邑古窯跡群のＴＫ７、や長岡京跡ＳＤ51出土の塊に近似している。従って、平安時代前期頃の建物と考えられる。ピット群からは、Ｐ４・６・７・11・15・17・39から出土しているが、Ｐ６から平安時代中期頃の灯明皿、Ｐ15から奈良時代の台付長頸壺が出土している他、Ｐ11、Ｐ17は大型土坑で、Ｐ11にいわゆる古式土師器と思われる甕型品が混在している他、平安時代前期から中期にかけての須恵器、土師器があり、Ｐ17からは、かえりをもつ須恵器蓋、ＡＶ類の塊、小型で口縁部に屈曲した段を持つ灯明皿が出土していて、時期的に混在した状況を呈している。従って、掘立柱建物跡は平安時代前期であるが、ピット群は、古墳時代から平安時代中期にわたる長期間に形成されたものと考えておく必要がある。Ａ水路東側はＩ地区に当り、奈良時代前半の瓦溜りがあり、さらにＡ水路の遺構群の性格を複雑にしている。

〔Ｃ水路〕

竪穴住居跡４棟、掘立柱建物１棟、溝１条等を検出している。竪穴式住居跡では、２号住居跡出土の土師器の甕は口縁部が屈折する特徴等からして７世紀前半頃のものと考えられる。又は４号住居跡は、ＡⅡ類の須恵器塊が出土しており、さほど大きく踏ばりを見せないところから、陶邑古窯跡のＴＫ７頃と考えられ、８世紀末頃と考える。３号住居跡からは土師器の小片を出土したのみで、時期は不明だが、２号住居跡とほぼ並行して存在するところから、２・３号住居跡は同時期のものと考える。掘立柱建物及び溝については、出土遺物からの年代決定は困難であるが、掘立柱建物の南北柱列がＮ11度Ｗ、溝がＮ12度Ｗにあり、４号住居跡の南北主軸Ｎ７度Ｗに近かく、年代的にも近似した頃のものではなかろうか。

Ｃ水路はＫ地区東端に当り、Ｋ地区からも掘立柱建物、竪穴式住居跡を検出している。

〔Ｄ水路〕

Ｄ水路からは、掘立柱建物かと思われる柱列と、２条の並行する溝を検出した他は、顕著な遺構は検出していない。ただ、この地域から、多数の灯明皿を出土している。灯明皿は、小型で、口縁部が屈曲して端部が上方へ肥厚するもの（Ⅰ）、これと共伴していて、同規模で、口縁部が単純に終るもの（Ⅱ）、の２類の他、口縁部が屈折して外反し、端部が

尖り気味、あるいは上方にわずかに肥厚するもの（Ⅲ）、さらに上げ底風になるもの(Ⅳ)、薄手で、全体的に弧を描くもの（Ⅴ）の多種類がある。Ⅰ、は長岡京跡ＳＫ03に類品があり、10世紀末～11世紀初当の共伴物があり、従って、Ⅰ・Ⅱは平安中期、Ⅳは鎌倉末～室町初期の一括遺物とされる平安宮土坑Ⅰに類品がある。Ⅲは口縁端部が上方に肥厚するものが見られるところから、Ⅰ・Ⅱに近い年代が考えられ、ⅤはⅣに近いものであろう。このように、平安中期から室町時代にかけて多数の灯明皿が出土しており、注意されるところであるが、遺構としては、２条の溝状遺構が、幅4.5ｍ程の間隔をもって並行しており、あるいは築地跡かと思われる以外、顕著なものを検出していない。Ｄ水路はＦ地区に当るが、設定したトレンチからも、明瞭な遺構は明らかにできなかった。

〔Ｅ水路〕

Ｅ水路では、掘立柱建物１棟、ピット群を検出した。遺構内の出土遺物はＰ10・14・20の３基のピットのみで、このうち、Ｐ10の須恵器蓋は天井部と口縁部が凹線で区別されるもので、ＴＫ10に近い。Ｐ20からは土師器灯明皿のⅠがあり、平安中期になる。これ以外のピット、掘立柱建物の年代は不明である。ただ、Ｅ水路南側、Ｃ地区ｅトレンチで検出した掘立柱建物の柱穴内より、須恵器塊ＡⅡ類が出土し、南北軸がＮ５度Ｗにあって、Ｅ水路掘立柱建物とほぼ並行しており、時期的に近似していると考えられる。しかし、柱穴の規模形状、全体規模が極端に異り、２ｍ程の狭い間隔にあっては、なお、詳細は明らかにし得ない。

おわりに

以上のように、当遺跡は、水路調査で、平安時代前期の掘立柱建物をＡ・Ｃ・Ｅの３水路、古墳時代後期と平安時代初頭の竪穴式住居跡をＣ水路で検出した他、Ｄ水路で多数の灯明皿を出土し、又、Ｉ地区で瓦の包含層を検出する等、南北400ｍ、東西400ｍの遺構検出範囲内で、多様な有り方を示している。遺物においても、Ｆ地区及びＥ水路で円面硯を出土した程度であり、遺跡全体の性格はなお究明しがたい状況にある。ただ、次の点は指摘できよう。すなわち、①当遺跡では、掘立柱建物がいずれも平安時代前期に下り、以前では竪穴式住居跡が主流を占るようである。従って、当地方では畿内に比べて、竪穴式住居から掘立柱建物への移行が奈良時代に完了せず、平安時代前期を持たねばならないこと。②掘立柱建物は、長軸線がＮ３度Ｗ（Ａ水路）、Ｎ11度Ｗ（Ｃ水路）、Ｎ５度Ｗ（Ｅ水路）とほぼ一致し、一辺１ｍに近い方形の掘方を持つものが存在する。従って、北国脇往還道に沿って、整然と建物が並ぶ都市的様相を持っていること。③古墳時代から平安時代中期に及ぶ集落跡であるが、寺院、神社を伴う当時の集落の構成を推考し得る可能性があること等が指摘できよう。

このように限られた調査範囲内で、遺跡の全体性格を解明するにはほど遠い調査であったが、ほぼ完存する広大な当遺跡は、集落構成あるいはその発展過程を解明していく上に貴重な遺跡である。

No	遺跡名	所在地	立地	種類	備考
1	法光寺遺跡	高月町千田法光寺	平地	寺院跡	須恵器
2	石作（玉作）遺跡	〃 千田石作	平地	玉作跡	勾玉、砥石
3	大音古墳群	〃 大音	山麓	円墳数基	横穴式石室　鏡、金環、須恵器
4	西山古墳群	〃 西山北ヶ谷	山麓	円墳8基	横穴式石室
5	西山山頂古墳群	〃 西山	山頂	円墳数基	
6	小山古墳群	〃 西山小山	山麓	円墳3基	横穴式石室
7	中居谷遺跡群	〃 赤尾中居谷705	山麓	集落跡	石鏃
8	赤尾古墳群	〃 赤尾四十八方	山頂	円墳2基	横穴式石室　金環、鉄片、石鏃、須恵器
9	瓢箪塚古墳	〃 洞戸塚の越	平地	前方後円墳	周溝
10	鍬頭塚古墳	〃 洞戸長畑	平地	円墳	横穴式石室
11	人海道遺跡	〃 保延寺、持寺、尾山	平地	集落跡	ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書II、III、IS51年
12	井ノ口遺跡	〃 井ノ口	平地	集落跡	ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書IV　S52年
13	柏原遺跡	〃 柏原	平地	集落跡	緑釉、灰釉陶器散布
14	高月遺跡	〃 高月エンノコシ	平地	集落跡	千種勾玉
15	兵主神社古墳	〃 横山	平地	前方後円墳	
16	大将軍遺跡	〃 東物部	平地	円墳	
17	生塚遺跡	〃 東物部555	平地	円墳	
18	姫塚古墳	〃 東柳野	平地	前方後円墳	
19	父塚古墳	〃 東阿閉塚の越	平地	円墳	
20	円通寺遺跡	〃 西阿閉円通寺	平地	集落跡	ほ場整備事業関連遺跡報告書II　S51年
21	大将軍・京田塚遺跡	〃 西阿閉	平地	中世墓？	S52年調査
22	竜の内遺跡	〃 西阿閉里の内	平地	集落跡	石釜
23	松尾古墳群	〃 松尾宮山	丘陵尾根	円墳7基	横穴式石室、金環、銅環、玉類、須恵器
24	松畑古墳群	〃 松尾山畑	山麓	円墳4基	横穴式石室、家形、組合式石棺、玉類、金環、直刀、須恵器
25	西野古墳	〃 西野	山頂	前方後円墳	
26	充満寺遺跡	〃 西野	山麓	寺院跡	
27	古保利古墳群	〃 西野、他	山頂	古墳群	滋賀県文化財調査年報
28	小倉遺跡	湖北町小倉	平地	集落跡	ほ場整備事業関連遺跡調査書II　S51年
29	大安寺遺跡	〃 大安寺	平地	集落跡	〃
30	満願寺遺跡	〃 弓削	平地	寺院跡	礫石、屋
31	若宮山古墳	〃 山本若宮山	山頂	前方後円墳	県指定遺跡
32	尾上浜遺跡	〃 尾上	湖岸	集落跡	
33	延勝寺湖底遺跡	〃 尾上地先	湖底	集落跡？	琵琶湖湖底遺跡の研究　縄文式土器、弥生式土器、石器
34	延勝寺遺跡	〃 延勝寺	湖	集落跡	
35	今西遺跡	〃 今西海老江	平地	集落跡	湖北町今西遺跡発掘調査報告書　S49年
36	早崎遺跡	びわ町早崎	湖岸	集落跡	弥生式土器、須恵器、土師器
37	浦出山古墳群	高月町唐川	山頂	前方後円墳、円墳	

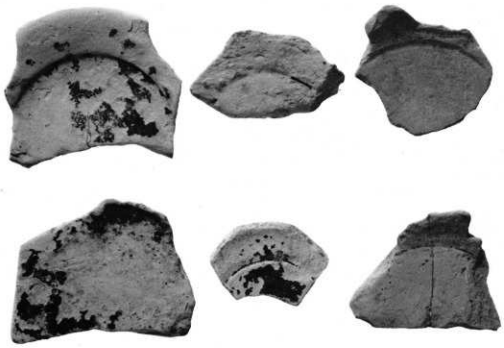
図版

1　Z地区西半　SB1・SB2・SB3・SB4

2　Z地区東半　溝2と掘立柱式建物

1　SB25

2　SB38・SB36



1　出土遺物（緑釉陶器）

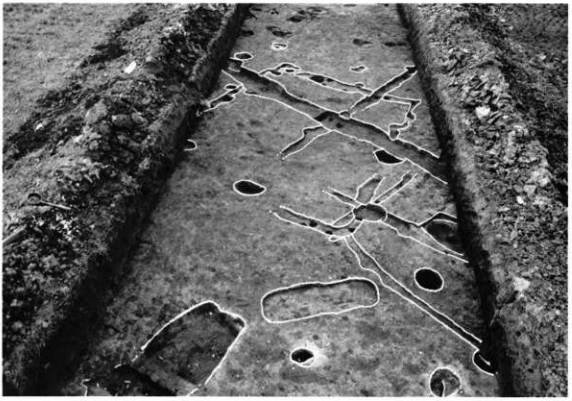
2　出土遺物（ヘラ描き文字）

1　出土遺物（銅銭）

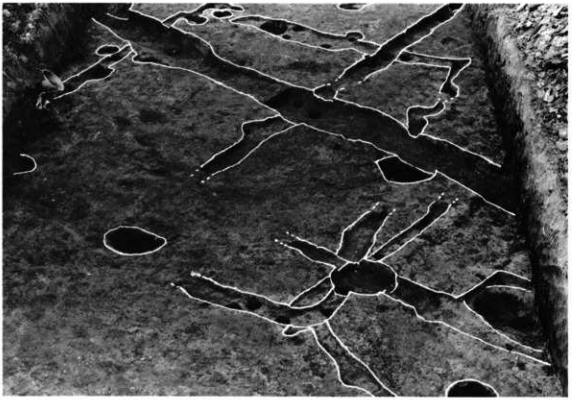
2　出土遺物（瓦）

1　E－7区全景（南より）

2　E－8区全景（北より）



1　S－5区全景（南より）



2　S－5区・SH－1～SH－3（南より）

1　E－7区・SH－4他（東より）

2　E－7区・SH－6他（南より）

1　S－7区より南をのぞむ

2　S－1区旧河道内堰状遺構（北より）

1　S－1区全景（南より）

2　S－1区旧河道及び堰状遺構（北より）

1　S－13区・SD－1（北より）

2　S－9区・SE－1（北より）

e18

e22

e31

e37

e42

e46

e47

1　出土遺物（土器）e18～e47

e51

e53

e54

e60

e83

e85

1　出土遺物（土器）e51～e85

e79

e102

e105

e106

1　出土遺物（土器）e102～e106

e1

e5

e9

e13

e2

e6

e10

e14

e3

e7

e11

e15

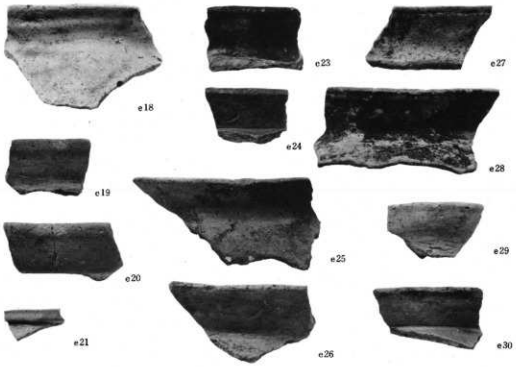
e4

e8

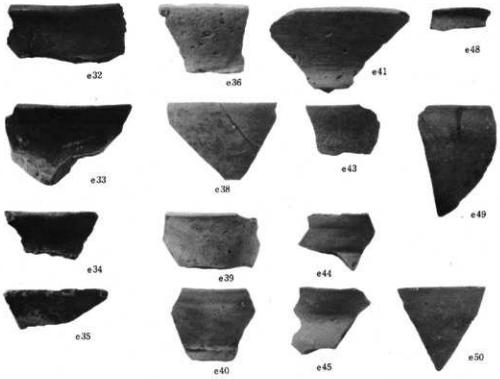
e12

e16

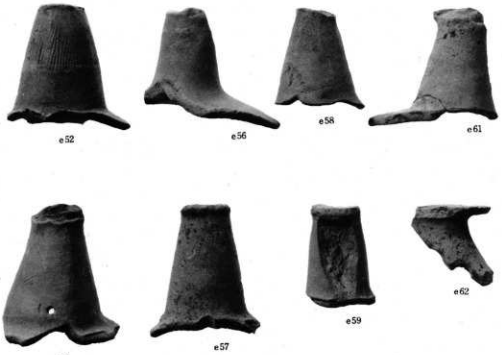
2　出土遺物（土器）e1～e16



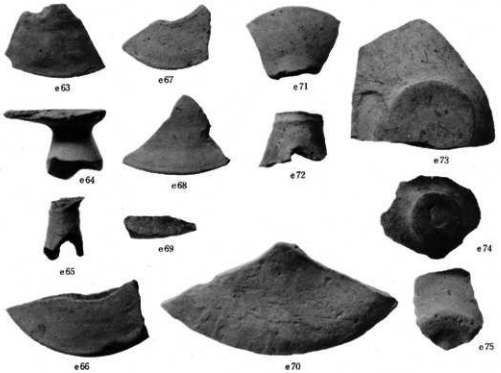
1　出土遺物（土器）e18～e30



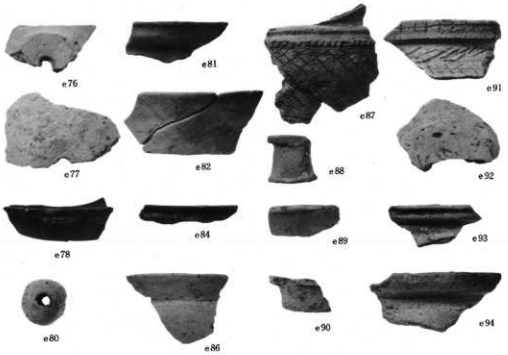
2　出土遺物（土器）e32～e50



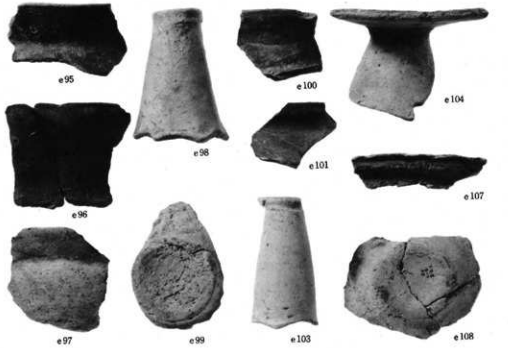
1　出土遺物（土器）e52～e62



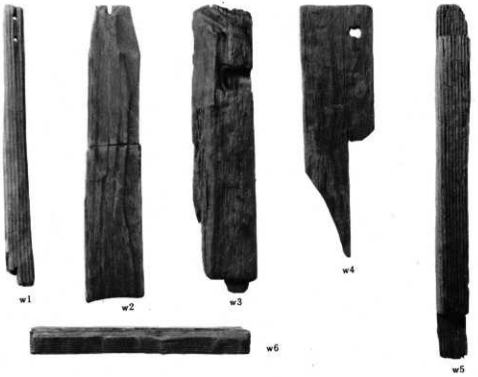
2　出土遺物（土器）e63～e75



1　出土遺物（土器）e76～e94

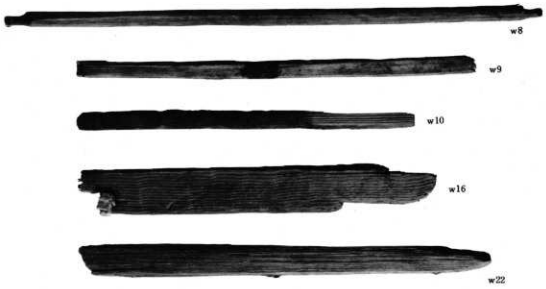


2　出土遺物（土器）e95～e108

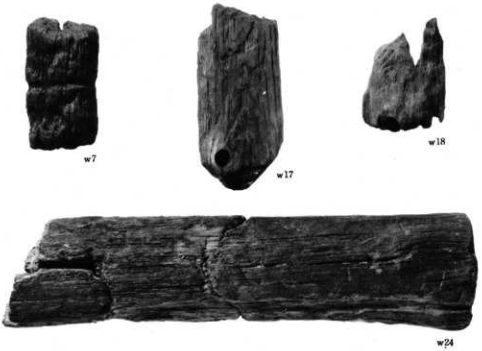


1　出土遺物（木製品）w1～w6

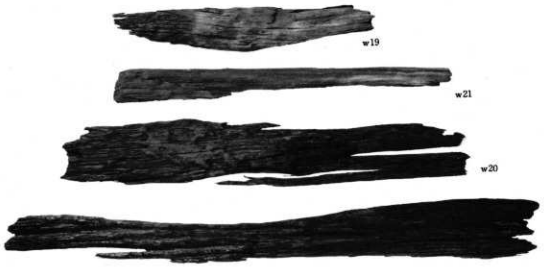
2　出土遺物（木製品）w11・w12



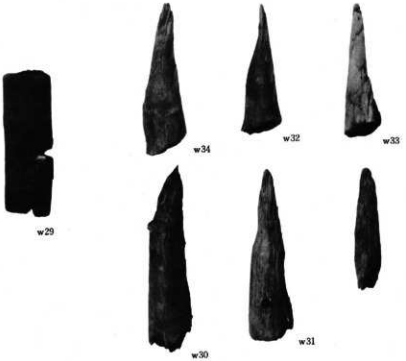
1　出土遺物（木製品）w8～w22



2　出土遺物（木製品）w7・w17・w18・w24



1　出土遺物（木製品）w19・w20・w21



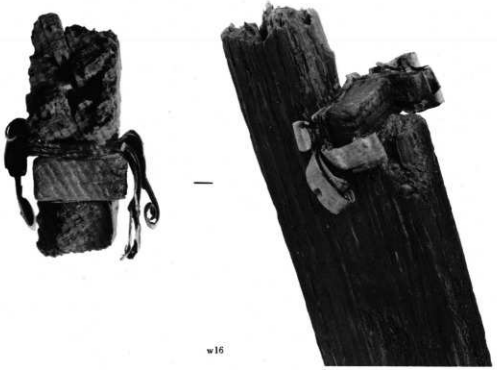
2　出土遺物（木製品）w29～w34

w13

w14

w15

1　出土遺物（木製品）w13～w15

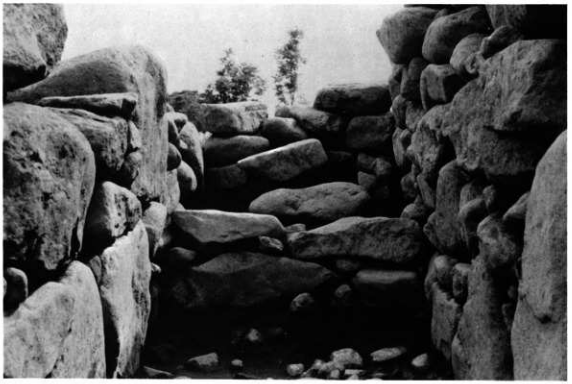


1　出土遺物（木製品）w16・S1・S2・種子

1　3号墳主体部全景

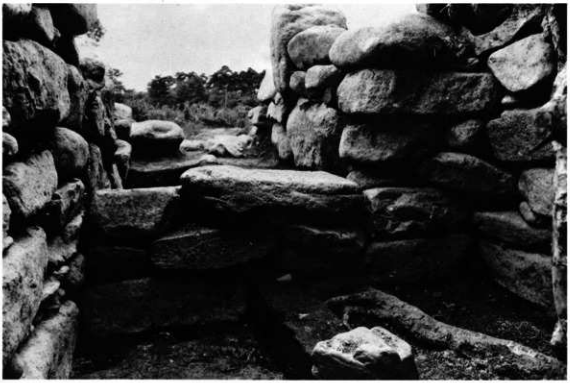
2　4号墳主体部全景

1　1号墳主体部全景



2　2号墳羨道部階段及び閉塞（玄室より）

1　5号墳主体部全景



2　5号墳玄門部階段（玄室より）

1　5号墳墳丘外土壙遺物出土状況

2　6号墳玄室内階段

1　遺跡全景（南部）

2　遺跡全景（北部）

1　A水路全景

2　A水路竪穴式住居跡

1　A水路掘立柱建物跡（部分）

2　A水路掘立柱建物跡（部分）

1　A水路土坑

2　A水路土坑内遺物出土状態

1　C水路全景

2　C水路掘立柱建物跡・溝跡等

1　C水路竪穴式住居跡群

2　C水路4号住居跡

1　C水路3号住居跡

2　C水路2号住居跡

1　D水路全景（南部）

2　D水路全景（西部）

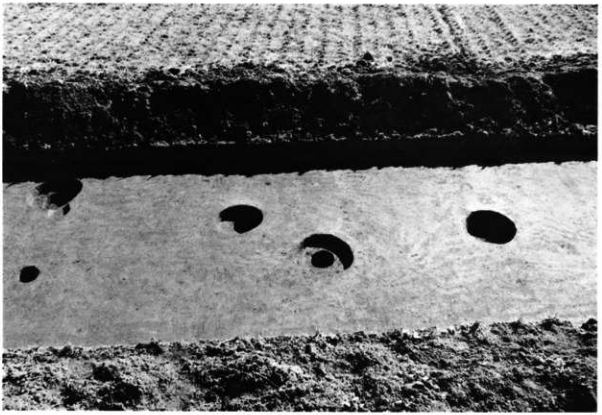
1　D水路西部ピット群

2　D水路南部ピット群

1　D水路溝状遺構

2　D水路掘立柱建物跡

1　E水路全景



2　E水路掘立柱建物跡柱穴

1　E水路ピット群

2　C地区eグリッド掘立柱建物跡（北西部分）

1　C地区bグリッド掘立柱建物跡（東西柱列）

2　C地区jグリッド掘立柱建物跡（東西柱列）

1　A地区dグリッド竪穴式住居跡

2　A地区dグリッド竪穴式住居跡

1　G地区eグリッド遺物出土状態

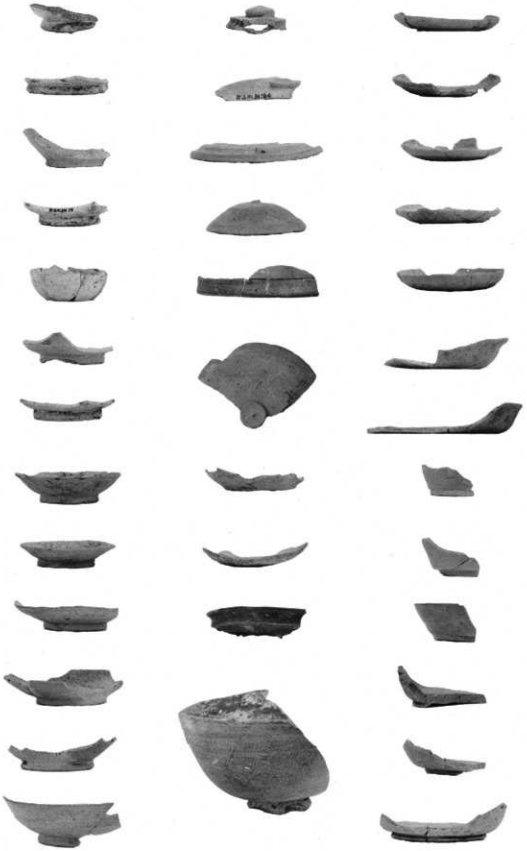
2　A地区fグリッド内灯明辺出土状態

1　I地区eグリッド瓦出土状態

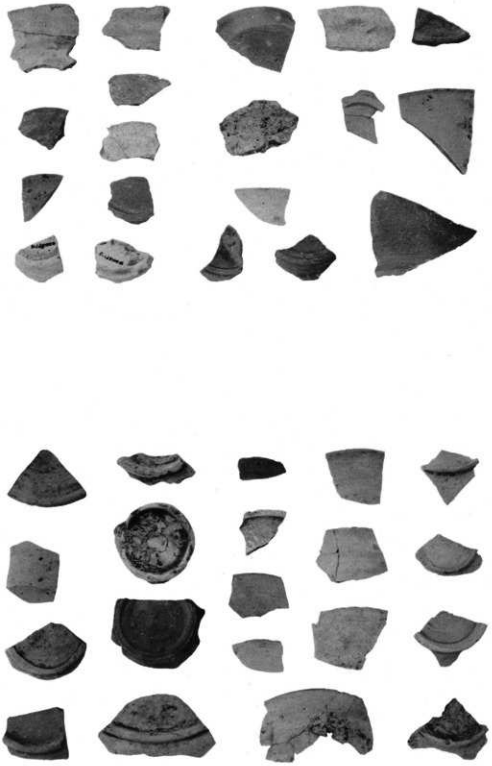
2　I地区eグリッド瓦出土状態近景

1　I地区cグリッド軒丸瓦出土状態

2　I地区cグリッド軒丸瓦出土状態

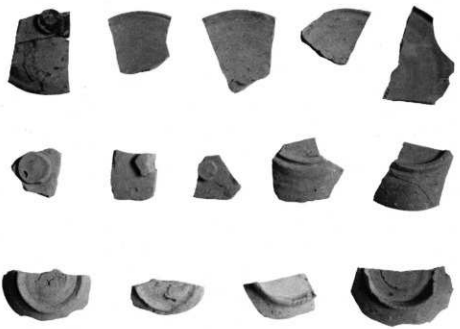


1　A～D水路出土土器



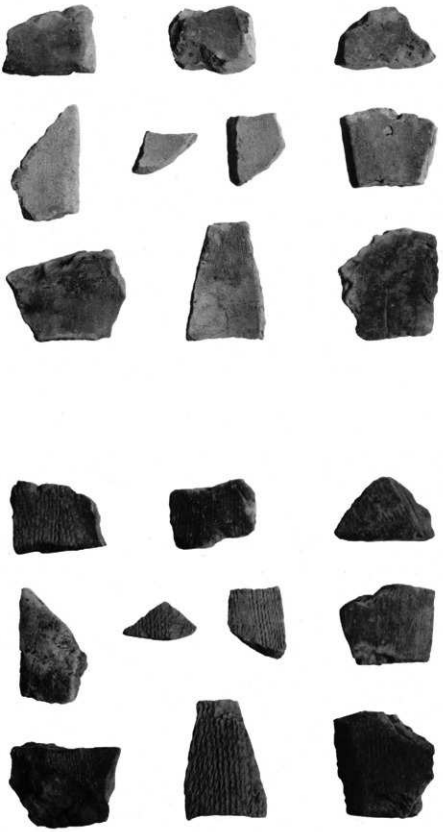
1　A～D水路出土土器

1　各地区出土土器

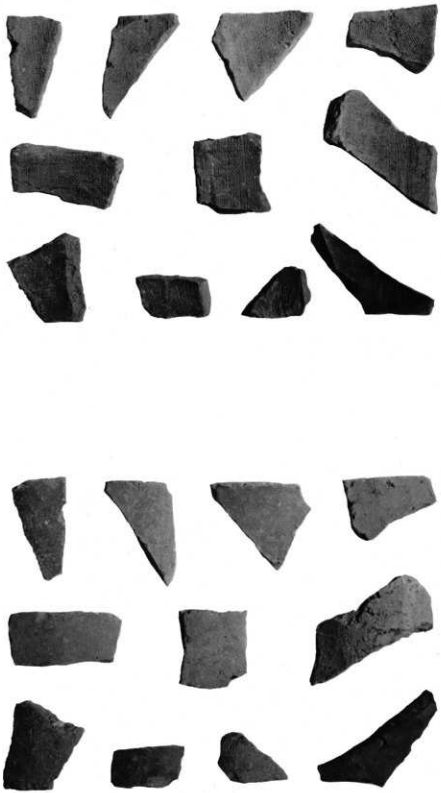


1　各地区出土土器

2　軒丸瓦・陶硯・須恵器・甕

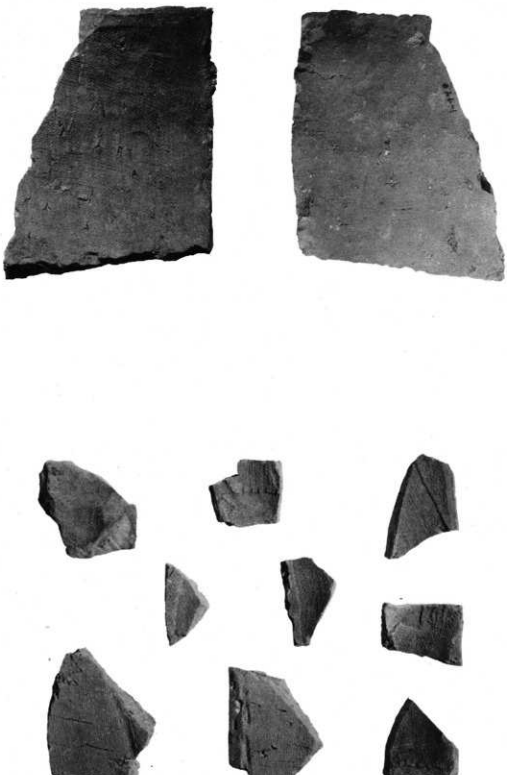


1　I地区cグリッド出土縄目タタキ平瓦



1　I地区cグリッド出土筵整形平瓦

1　I地区cグリッド出土格子目タタキ平瓦



1　I地区eグリッド出土平瓦布目痕

昭和52年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅳ－Ⅱ

編集　滋賀県教育委員会

発行　滋賀県教育委員会

財団法人　滋賀県文化財保護協会

印刷　有限会社　真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL（075）351－6034